思春期の研究

精神分析

★ 第5卷・第1號 ★ 昭和12年 1月・2月 ★

主要項目

詳細目次は卷頭に

T・I・P・A・ VERLAG



東京精神分析學研究所出版部

待望の科學的新養生訓、遂に完成！

責任ある大新聞紙上に於いて學界の諸權威擧って絶讚。堂々の定評今や確立、購讀者の安堵にまで！

東京朝日新聞批評（昭和十一年十月廿六日）

名古屋醫大教授
醫學博士　杉田直樹

人間社會に於ける人と人との交渉は凡て性慾を基本として行はれる、宗敎でも藝術でもいろ／＼の風俗習慣でも、人間らしい事の凡ては性の心理に其の歸源をおくものだとは、フロイド以來明らかにせられつゝある新興科學の創めての開拓境なのであるが、秘密をあばかれるのは誰しも快くないと見えて、氏の精神分析學は極めて素朴純眞な學者以外には、餘り喜ばれてゐない。

大槻氏は其の深く廣い學殖と經驗とから、此の掩はれた人間性眞相を闊達な筆で摘發し、分析し、說明し、批判し、敎示して、性慾生活に就いて人間の正しく進むべき道を示唆し、そこに科學に根ざす人道主義を唱道しようと企圖してゐるらしい。

本書は戀愛生活及び性慾生活の心理をまづ分析的に說いて種々の變態的の性的現象の發生に及ぼし、神話傳說、歷史的事實を解說して更に現代の實際問題を科學的に批評し、多くは東京朝日新聞の女性相談欄に現れた世相の事例を引用して、家庭に見られる幾多の問題、夫婦、嫁姑、女中、男性の遊蕩、有閑夫人其の他の賑やかな男女關係に就いて、根本的な解決策を講じようとしてゐる。洵に新らしい性科學的立場から公平に眺めると、世間の人達の常識を持った家庭生活の實相があぶなっかしくあり氣の毒でもあり又ちゃんちゃら可笑しくもある。表面ばかりを糊塗して、只管荒立てまいとのみする人事相談のありふれた解決案などは問題を單に裏通りの目立たない所へ押しやるだけのことで、その裏通りに續く場所は犯罪と自殺と發狂の境地のみしかない。

性慾問題を眞面目に科學的に取扱はうといふ氣運が起らない限り社會の陰慘な人事は何時の世迄もその暗い影で浮世の生活をじめじめさせることを止めないであらう。

私共は宗敎よりも倫理學よりも此の性慾心理學一篇の知識の方が遙に端的に且人道的に世人の苦惱を除去し、社會風俗の秩序を醇化する基本的の力となることと信ずる。大槻氏は夙に雜誌「精神分析」を主宰し又フロイドの全著作を譯纂

（裏面へ續く）

し、精神分析學の上に多くの貢獻をなしつゝある篤學者で、その熱心な態度は、多くの諸學者が難と避けて見まいとする性慾心理のあらゆる課題を捉へ來つて、少しのいや味もなく又少しの卑しさもなく、極めて平易にのび〳〵と、しかも學問的の尊嚴さに正確を失ふこともなく、述べ去り說き來つて凡ての男女を首肯せしめるに足る程で、其文筆の力は敬服に値する。種々趣味ある圖版を多數收める所にも著者の關心の該博と親切な人間味とが窺はれる。私にとつては少くも多年の待望が本書によつて充たされたやうな氣がして誠に快い。

東京日々新聞批評（昭和十一年九月六日）

慶應醫大教授
醫學博士　林　髞

フロイドの學說並びにその應用は、すでに十數年前からわが國讀書界に紹介せられて、フロイドの數多い論文の殆ど大部分が邦譯せられてゐるから、これを讀んだ人も多いことであらうし、從てフロイドの名は相當よく知られてゐるに違ひないのであるが、二つの理由によつて彼はなほ正しく受け取られてゐないやうに思はれる。

第一の理由はフロイド自身の書いたものが難解であり、且大部であるために、通讀するのに困難であることであり、第二の理由は、すでにフロイド自身が經驗上認識しいうてゐる如く、彼の學說はこれを受容れようとする時に當つて、非常な抵抗を起させるためである。その抵抗の一番大なるものは、フロイドの學說は何事をでも性慾に結合してゐるといふ非難なのである。この非難はやがて、フロイドは醫者であり、すべての醫者は生物學的な、性慾的な見地をその世界觀の根抵に持つてゐるといふ非難と結合して倍加してゐるらしい。

私は、大槻憲二氏の近著を一讀して、フロイドが紹介せられてから十數年、此處に初めてこれ等の二つの抵抗に打ち勝つべき好著が提供せられたと考へる。何故ならば、大槻氏は、此處では、特に戀愛性慾の心理のみを目標に置いて、フロイドの學說を檢討してゐるのであるし、大槻氏自身が醫學出身の人でなく、フロイドの學說を文化的の意義の方面から取扱つてゐることによつてさういへる。

本書の五大特色

一、戀愛性慾の心理が種別的にも年齡的にも、全般的に、且組織的に說いてあること。
二、一般人にも面白く、專門家にも啓發的なること。
三、實例は大部分日本的材料にして、著者自身の實驗に基くこと。
四、新學先哲の意見を尊重しつゝ、然も獨創的見解と發見とに富めること。
五、圖版を多く插入して趣味豐かなること。

大槻氏は人も知る如く、フロイド全集十卷のうち七卷を自ら邦譯した人であり、昭和五年より同志と共に東京精神分析學研究所を設立し、今は主として獨立經營してゐる。昭和八年以來、雜誌『精神分析』を發行し、フロイド學說に關する我が國で最も熱心な研究者である。同氏の近著は初めてフロイド學說の梗概を、極めて分り易く、適切に述べ、ついで戀愛生活の心理、性慾生活の心理、變態性慾の心理、同性愛の心理等の興味ある主題を說明したあと、本書のうち最も精彩に富む「家庭生活と性慾生活」「戀愛性慾生活の統制及び處置」の二章を置いてある。この間主として、新聞紙上に現れる「身の上相談」を例に擧げて、フロイド學說の應用的方面を遺憾なく論じてゐる。

故に、この如く理解し易い、且身近い問題を論じた書物より入つて、も一度フロイド學說に觸れることは、わが國の文化的進展についても極めて緊切のことであると考へるので、私はこの好著を推薦したいと思ふ。啻に一般の讀書界に對してばかりではない、大槻氏もその著のうちで再三力說してゐる如く、世の身の上相談の解答者が主として戀愛性慾の問題について解答の必要に迫られるのであるから、せめてフロイドの學說の一應の知識は得ておくべきであり、そのためにはこの書は澤山の教訓を提供してゐると思ふ。「身の上相談」の解答を凡てフロイド學說の上からやれといふのは極端の議論で、私も贊成し兼ねるが、併し常に一應はフロイドを顧みつゝやることが、その解答に一層の人間味を添へる所以ではないかと考へるのである。

『新聞の新聞』の報道によれば、昭和十一年秋の讀書期に於いて日比谷圖書館の最高讀書率を示したものは本書であつた。

本研究所出版書及び取次書一覽表

フロイド精神分析學全集……………（送料各十二錢）春陽堂

第一卷・夢の註釋（1圓50錢）　第二卷・日常生活（1圓70錢）
第三卷・社會宗教文明（1圓80錢）　第四卷・快不快原則（1圓50錢）
第五卷・性慾論（1圓70錢）　第六卷・藝術論（1圓90錢）
第七卷・トーテム（1圓80錢）　第八卷・療法論（1圓90錢）
第九卷・戀愛論（1圓80錢）　第十卷・精神分析總論（2圓）

精神分析合本　第一卷（昭和八年度）（上下各册とも賣切れ）……當出版部

精神分析合本　第二卷（昭和九年度）（上下各册2圓50錢送料共）‥當出版部

精神分析合本　第三卷（昭和十年度）（全一册3圓送料15錢）……當出版部

文藝と心理分析　長谷川誠也著（2圓70錢送料12錢）…春陽堂

文藝思潮論　長谷川誠也著（2圓送料共）…博文館

精神分析概論　大槻憲二著（80錢送料6錢）…當出版部

理想の家族（マンスフィールド短篇集）
岩倉具榮譯（1圓80錢送料共）…當出版部

モリス書誌　キリアム・モリス研究會編（40錢送料2錢）…丸善株式會社

精神分析雜稿　大槻憲二著（2圓送料10錢）…岡倉書房

精神分析讀本　大槻憲二著（2圓送料10錢）…岡倉書房

精神分析・社會圓滿生活法
大槻憲二著（1圓送料6錢）…人生創造社

ドストイェフスキーの精神分析
平塚義角譯（1圓送料6錢）…當出版部

戀愛性慾の心理とその分析處置法
大槻憲二著（2圓20錢送料12錢）…當出版部

★春陽堂出版書は研究所究申込の方に限り一割引。
★雜誌は創刊號及び第一卷第五號以外は各號單册殘本多少あり。一部定價50錢（送料共）

本鄉區動坂町三二七
振替・東京七八八一七
東京精神分析學研究所出版部

思春期の研究號・內容目次

『精神分析』第五巻・第一號

隔月刊行誌
定價五十錢
送料共

精神分析

半年　一圓五十錢
一年　三圓
送料共

昭和十一年十一月十二月　新道徳の要求と分析　第四巻第六號

東京精神分析學研究所
振替・東京七八八一七番
本郷區動坂町三二七



『精神分析』第五卷　第一號　卷頭言

★惱ましかりし思春期よ！

若返りたいと云ふことは誰しもの願ひであらうが、而もあの思春期に於ける息づまるやうな惱みをも一度繰返すのかと思ふと、もうもう若返りは眞平だと叫びたくなると云ふ人も隨分多い。世の大部分の人々の青春はそれほどに苦痛に滿ちてゐる。生田春月のやうな詩人もそんな意味の事を謳つてゐたと吾等は記憶してゐる。

併し分析を學んで見れば、あんなにも思春期を惱ましく重苦しく考へるにも及ばなかつたのだと云ふことを我々は感ずる。實に人々はそのエネルギーを青年期に於いて浪費し過ぎる。思春期の性心理機制が如何に構成せられてゐるかを明確に知悉すれば、それに對する處置と態度とを定めることが出來るわけだ。今迄世の何人もがそれを敎へてはくれなかつたのだ。さうして只、恐ろしい顏をして叱るだけであつた。

世の青年男女、及び彼等を子に持ち、門下に持つ父兄、敎育家の人々に、せめて本號の一讀をすゝめたいと思ふ。分析者たちはも一度思春期を過ごして見たい興味と衝動を禁じ得ないが故に、世の青年を羨むのあまり敢へてこの言をなす。

精神分析學より見たる思春期の特質

大槻憲二

一、思春期性感の基礎としての幼兒性感

フロイドが幼兒期の性心理的過程に就いてその徹底的な洞察を下すまでは、思春期とは、個人の發達に於ける甚だ特殊な時期であつて、その時期に於いてはそれ以前の心理的及び肉體的の生活に持つて行つて、一つの新たな、從前には存在しなかつたものとして性本能なるものが擡頭するのだと云ふ風に考へられてゐた。その意味に於いて、フロイド以前の心理學にとつては、思春期とは性感發生の時期であるのだ。從つて、かう云ふ考へ方に依ると、個人はその時期以前には全く性感なるものを知らない存在であつたのだが、今やこの時期に於いて判然として生育し來る性的裝置の影響の下に性の生理的心理的新要素は擡頭し、肉體的及び精神的過程となつて顯現するのだと云ふわけになるのである。

精神分析學にとつてもやはり、思春期に於いては肉體的に異變を來たし性器が顯著に生育し來るのがその特徴であると云ふことは、固より疑ひの餘地ないところである。思春期は十二歳から十四歳の間に始まると分析學徒は考へてゐるのであるが、幼兒が五歳頃からその思春期に至るまでの徐々たる發達の長い期間に於いて、彼等の性器鬮にはその發達上に相對的の禁制が働くのである。醫學の上ではホルモン學說上これは松果腺分泌物の機能と假定せられてゐ

るやうであるが、心理上でもそこに禁制の作用が働き、この時期を分析學上潜在期と名付けてゐる。かくて性器闘の方面のみが發育上の遲延をなし、肉體上の他の方面の發育と均衡を保たなくなるのである。が、思春期に達すると共に、この遲延が極短少の時期中に忽ち回復せられるのである。またこの思春期に於いて生殖腺がその機能を開始する。卽ち男子にあつては夜分に精液の射出せられることがある。これを我々は射精と呼んでゐる。女子にあつては子宮の月經作用が擡頭してくるのである。これ等の徵候は何れの性に於いても、その個人が生殖機能に於いて成熟したと云ふことを示してゐるに外ならないのである。フロイド以前の心理學者等は性の概念と生殖機能の概念とをその內容に於いて同じものであるとしてゐたが、生理心理的衝動の中に性慾の混入し來ることが思春期の特質的な樣相であると考へてゐた點に於いては、彼等も正しかつたのである。

併しながら、生殖と性感との概念內容を區別し、一切の生殖機能は性感の內に屬すべきものであるが、性感そのものゝ概念內容はもつと廣汎で、單なる生殖機能の埒內に跼蹐すべきものでないと云ふことを明かにしたものは、實にフロイドの功績であつた。このやうに生殖と性感とが必ずしも同義語ではないと云ふことになれば、性的現象は生殖力の成熟以前に見られると云ふわけになつて來る。また實際、精神分析は成人の幼時期調査に就いて（のみならず、それに續いて幼兒それ自身を分析調査するにことに依り）、性的顯現は思春期の遙か以前に、否寧ろ、早期幼兒期に旣に發見せられるものであると云ふことを明かにした。これ等、思春期以前の性感を我々は幼兒性感と名付けてゐるが、その幼兒性感とは就中、口唇、肛門、並びに性器の諸帶域に於いて感得せられる快樂的な亢奮や活動の事を云ふのであつて、この性感的活動は快感としての高度の價値を供するものである。これ等は始めは口唇食道その他に於ける生命保存の機能、殊に榮養攝取の機能及び尿道肛門に於ける排泄の機能と內的に結び付いてゐるのであるが、やがてそれ等から獨立し、生命保持のための機能と離れて純粹に快感獲得の目的のために供せられるやうになる。早くから陰莖（陰核）は尿排泄の器闘としての機能を果す傍、（少女に於いては陰核は始めから尿排泄とは無關係であるが、その附近にあるために排泄後の淸掃に際して種々なる刺戟を受ける）、それに依つて高度の快感的亢奮を持ち身

體中のあらゆる快感獲得的帶域中の王座を占めてゐるのである。で、四歲乃至五歲に達すると、性的帶域中の支配的地位を完全に占めるやうになる。この支配的地位こそは、陰莖が後年に於いて成人の生活中に果す重要な役割を豫め彷彿せしめるものである。

幼兒期の性的活動の或る部分は、外的對象への關係から離れて彼自身の肉體に於いて、外的對象には期し難いやうな活動をなすことに依つて滿足を見出す。我々はそのやうな活動を自己性感的と名付ける。併しながら旣に早期に於いて、他の本能的慾求が對象と結びついて擡頭してゐる。その對象は色情的快感の源泉となるもので、從つて戀愛對象と云ふ名に値するものである。まづ最近親者が、就中母親が、そのやうな對象リビドー的願望の目的に供せられる。さうして成人たちの子供に對する介抱や愛撫や、屢々肉感的でなくもない可愛がり方が、かゝる滿足を可能ならしめること大なのである。幼兒の性發展の道程に於いて男根（陰核）が爾餘の性帶域の間にあつて中央的地位を占めるやうになるに從つて、幼兒が周圍の人々に對するこの戀愛關係は、その願望並びに慾求に於いて、ますます高度に成人のそれに近似して來る。その際、男兒にとつては母親は（それ以前に於いても母親は男兒にとつての主要對象であつたのだが）更に男根期に於いても戀愛對象となされるのである。女兒の心理的態度に於いては、解剖的な關係に由來するところの、典型的な對象轉換が實現せられ、それに依つて男根（陰核）的、幼兒的なリビドー期の女兒の中心對象には父親がなるのである。男根期に於ける男兒にとつては母を獨占しようとの願望、母と一緒に寢たいとの願望、母が父親に與へてゐると想像し或は知つてゐるところの好意を自分の方に貰ひ受けたいとの願望、母親との間に子供を一人持ちたいとの願望、從つて競爭者と見做されてゐる父親を除きたいとの猛烈な憎惡的な願望、これ等諸々の願望が幼兒の男根期に於ける精神內容の中核を構成してゐるのである。さうしてこれ等の願望の總てを我々はエディポス・コムプレクスと云ふ名で總括してゐるのである。女兒のエディポス・コムプレクスの內容は、從つて、父親を占有し、彼に依つて子を生み、母の後釜に座り、要するに母親を除け者にしたいと云ふ願望から成立つてゐるのである。

男根期に於ける幼兒等のこのやうな極めて猛烈な願望的亢奮は、併しながら、いつまでもそのまゝの形で存續してゐるわけではない。幼兒は同性親に對して烈しい憎惡の感情を持つてをり、而もその憎惡は同時に反面に於いて豫々存してゐた同性親への畏敬崇拜の感情と相剋するが故にそこに强烈な罪障感を生じ、この罪障感、殊に不安觀念、恐怖觀念の內容中にはそのやうな惡願望への懲罰として男根切斷への期待感が含まれ、かくの如くにしてエディポス・コムプレクスは崩壞して行つて形を改め、同性親への憎惡反感は抑壓に依つて同性親への同一化となつて變革解消せられることになる。このやうにして人間に於ける道德心の中核は形成せられ、我々はこれを超自我と呼ぶことにしてゐる。エディポス・コムプレクスの崩壞、並びにそれにつれて生じ來る超自我の形成確立、と共に、幼兒は今や別の發展段階に入るのである。それを我々は潜在期と呼ぶ。何となれば、この期に於いては、性の流れはなほ潜在的に低迷し、判然と顯現することは殆ど、或は全然、ないからである。このやうに幼兒時代に於ける性感の早期開花と、思春期の入口との間に於けるこの期間は、性心理發展に於ける一つの停滯期として我々には印象せられる。この心理的停滯期は、肉體的にもこれに呼應して男根の發育が禁制を受けて遲延してゐるのである。

我々は幼兒の性心理を比較的精細に說いて來たが、精神分析學で云ふ思春期の特質を明かにするには、まづその根柢たり出發點たるべき幼兒期の性感を明かに知つておくことが必要だからである。

二、思春期に於けるエディポス・コムプレクスの再燃と克服

性的發展の成熟期に於いて、今や內的の、(一切の生長過程に就いての如く、我々にはなほ)未知の原因からして、(前にも旣に云つた通り)男根は可成り速かな增大を來たし、遂に生殖機能を果し得るやうになる。そのやうな肉體的現象が思春期の著しき特徵であると云ふことは、旣に前に述べた通りである。ところが、このやうな肉體的道程の歸結として、性的心理的の流れの力にも變化を來たし、そこに新たに甚だ强力なリビドーの大量が充滿し來ることになる。こゝに至つて、さきに成就されてゐた筈のエディポス・コムプレクスの崩壞が決して完全でなく、新しき酒は

古き革衣に滿たされることが分るのである。幼兒期に於ける大きな對象關係は、潛在期に入つてからは抑壓を受けてその肉感性を失ひ、單なる感傷性にまで影を薄めてゐたのが、思春期に入るに及んで再びその古き肉感的・性的の力を回復するやうになる。肉感的・性的エネルギーを伴ふエディポス・コムプレクスの再燃こそは、性心理的方面に於いて、思春期の最も重要なる特徴である。人々はなほ古き對象に執着し、新しきリビドーの流れも、無意識裡に部分的に殘存してゐる幼兒エディポス期の關係以外にその纒綿對象を別に持たないのである。

幼兒期のエディポス・コムプレクスと思春期に於けるそれの再燃との間には、併しながら、就中、超自我に基く近親姦禁制が確立せられてあり、それが潛在期の全般に亙つて效果を及ぼしてゐる。で、幼兒時代に愛せられた對象は近親者であるが故にとて、その新たな戀愛對象としての範圍から除外せられることになる。そこで、早期に於ける幼兒性感的な亢奮と、潛在期に於ける禁制とが、思春期に於いて衝突し合ひ、それ等兩者が自我に於いて主權を周つて爭奪するその戰ひこそは、實にこの期の不安、不定、神經質的緊張の大部分であつて、これが卽ち思春期の特徴に外ならないのである。この幼兒的對象へのリビドー的憧憬と近親姦禁制との間の葛藤からの脫出はなかなか迅速にはなされない。人々はまづ一時糊塗的な解決策を求めて空想の中へと逃込む。つまり、實現せられることのない觀念の中へと遁れる。この空想には殆ど常に必ず自慰的行爲が隨伴してゐるか、或は最後にはその種の行爲の中へと這入つて行くのである。これ等の色情的な空想の中には、古き近親姦的な對象が意識的に登場することが稀でないが、或は屢々容易に見透かされ得る如き胡麻化し的糊塗がその對象の上に施されてある。思春期のこれ等の空想は幼兒期的空想の連續であることは、大した骨折りをせずに觀破することが出來るが、その空想の內容としては兩親の××への偸覗であるとか、親愛な人物から早期に性的誘發を受けたとか、母胎空想であるとか、家族ロマーンであるとか云ふが如きが典型的なのである。家族ロマーンに就いて、は本誌第三卷第五號を參照せられたい。

思春期に於けるエディポス・コムプレクスの再燃を回避するに人々は同性愛的對象選擇を以てすることも稀ではない。この年頃の友情や、明かに同性愛的性格を帶びた種々の會合、團體などでは、異性を明白に除外し禁制してゐ

る。そのやうな男性間及び女性間の會合團體が思春期に於いて無暗に行はれるのは、近親姦的異性對象への憧憬的選擇に對する自己防禦的な試みであることは明かだ。

思春期に於ける明かに近親姦的空想は、その後の發展に於いて（それを何とか別に、正常に實現しなければならない以上、）克服せられねばならない。併しながらこのやうな克服と共に一つの別の、甚だ重要な、併しながら惱ましき行爲がなされる。卽ち、兩親の權威から離反すると云ふことである。兩親からの獨立と云ふことは、まづ思春期の煩悶の内に成就せられる。野蠻人間の思春期の儀式は、この離反獨立を正に一つの再生として表現する。生れ故鄕の村以外のところで思春期の儀式（その儀式とは割禮又はそれに類することが主である）を終つて後にその村に歸つて來た時に、大抵の民族間に於いては、靑年等は、その儀式の法に準じて、彼等はその村の者等を如何にも見知らぬもの﹅如く、就中兩親には顏馴染でないかの如く振舞ふことになつてゐるのである。彼等は自分の名を忘れ、自分の兩親の家を認識せず、總ての事を新たに敎へられねばならないことになつてゐる。

近親姦的空想や願望の克服は、原始人間に於いては、思春期の儀式に依つて支持せられ、また强行せられる。この儀式に於いては何よりもまづ去勢への威嚇又はその象徵的實施が、最も屢々割禮と云ふ形式で效果を擧げんとする。割禮をしない場合には、それの代償となるべき種々の行爲がなされる。例へば一つの爪を引拔いたり、流血を見るまで攻擊したり、流血を見ないまでも虐めたりするのである。カトリック敎の堅信式に横面を毆つたり、ドイツの學校に於いて卒業試驗を苛酷にしたりすることは、やはり思春期儀式のその後の變形であると見做さなければならない。總てこれ等の攻擊的行動、殊にその威嚇は、思春期に入つて再燃して來たエディポス・コムプレックスを新たに、出來るだけ窮極效果的に抑制するには、根柢的に役立つであらう。

三、思春期に於ける神經症の原因

思春期に於ける性心理的現象の多くは、幼兒性感の時代に既に觀察し得たところの諸現象の再燃であり復活である

と云ふことを、我々は知つたのである。思春期諸現象の他の一部分はこの再燃への反應と認められるのである。併しながら今や我々は思春期に於ける一つの性心理的現象を指摘し、明瞭にしなければならない。それは實際に、一つの新しいものとして思春期に擡頭し來るものだからである。それは窮極快感（Endlust）の現象である。性的所產の射出と云ふことに、殊にそれが性行爲に伴ふ場合には、凡そ經驗し得べき最高の快感が附隨してゐる。この窮極快感又は滿足快感の現象あつて、始めて男根は性的經驗の中心となり、そこが完全な意味に於いて主權帶域となり、他の一切の性的帶域はこれに從屬することゝなる。性感がこの窮極的な發展目標を獲得する以前に於けるあらゆる性的體驗は、換言すれば早期幼兒的な性的體驗は、豫備快感としての性格を具へてゐる。つまり、性器以外の諸帶域に於ける種々の活動は一つの最高の上昇（オルガスムス）への傾向を持つてゐないのである。男根期以前の性的過程は、成熟後の男根的性的體驗に於いて示される如き激しい緊張性を具へてゐないのである。從つてそれだけに殊にかの無上の、最高の、快感的弛緩が缺けてゐるのである。成人の成熟した性感に於いては、男根の緊張は恍惚境（オルガスムス）を經て弛緩の水平狀態へと落着いて行くのである。

思春期なるものは、根柢的には、一つの特殊な、人間的發展の一現象であると、我々は知つてゐる。然るに神經症もまた人間にのみ見られる現象であるとされてゐるのだから、思春期と神經症と云ふ二つの專ら人間的な現象に就いて、そこに何か根本的な關係があるのでないかとの疑問が起きて來る。が、そこにさう云ふ關係を見出すことは容易でない。フロイドはその『禁制論』の中で、神經症を惹起せしめる三つの原因を擧げてゐる。第一は、生物學的原因で、人間の子供は長い間かゝつて育てられ、その間彼等は全く無力で、庇護者に完全に依憑してゐると云ふことである。第二は種族發達史的原因であつて、これと思春期とは密接な關係にある。潛在期を中に狹んで幼兒期と思春期との二期に性的開花が分れて發すると云ふことは、人間が神經病に罹る原因の一つである。動物は第一の開花期に於いてそのまゝ性的に成熟して了ふのであるが、人間はさうは行かぬので、その複雜なる性心理過程に依つてエネルギーを消費すること頗る多大なものがあるためであらう。肉體が漸次に發育して行き、思春期に入つて性的裝置が成熟し

て行くことが、やはり心理方面の性過程にも激しい新覺醒の條件となるならば、思春期の性心理はやはりその對象纒綿を幼兒期の原型に準據するやうになることは當然で、かゝる現象を我等は旣に思春期に於けるエディポス・コムプレクスの復活と呼んで言及しておいたのである。併しながら幼兒期に於いては、エディポス・コムプレクスの纒綿、並びにその根柢に横はりそれに伴うて生ずる本能力は、共に抑壓を被る。何となれば、それ等は甚だ危險なものと自我に依つて感ぜられるからである。思春期に於ける性的活動も同樣の運命にあつて、幼兒期の原型に引き寄せられて、種々雜多な方途に於いて、抑壓に附せられる。そこで自然、性の自由なる伸張（それこそは思春期に於いて望ましきものであるのに）は最も重大な危險に直面する。幼兒期に於ける性感の前期又は早期開花が抑壓せられねばならないと云ふこと、また思春期に於ける性の第二期開花が無意識の原型の魅力を克服するの力に乏しいと云ふこと、これ等二者こそは神經症の原因として最も直接的に把握し得べきものである。このやうに、思春期は成人の神經症罹病と直接的な因果關係にあるのである。最後に第三者の原因は、フロイドが右言及書中に說いてゐるところに依ると、心理的裝置の不完全と云ふことである。就中、心理裝置が自我、エス、超自我の三者に分裂してゐることである。これ等三者がそれぞれに自己の主張を立てゝ對峙し、神經的思考作用内に分裂葛藤が生ずるためである

それ故に、性感發展に於ける二期開花は、フロイドに依つて、神經症の種族發達史的原因と名付けられてゐる。何となれば、ハンガリーの天才的精神分析學者フェレンチーの唱道に基く一つの精神分析學的學說に從へば、この種族發達史的原因と思春期現象とは人類の心理的宿命に對して、必然的關係あるものゝ如く想定せられるからである。この學說によれば、人間の性的發展が中途にして杜絕し、そこに潛在期を生ずるのは、人類が過去に於いて氷河時代（一度にせよ或はそれ以上にせよ、何れにしても）に遭遇し、その歸結又は殘痕が人類の生理心理的發展の上に及ぼされてゐるのである。*この災厄のために人類はその本能を放棄し、本能から由來するエネルギーを以て、困難となつた外的環境に於ける自己保存の用に供するべく餘儀なくされたのであつた。人類が火を支配し利用するやうになつたと云ふことは、このやうに變化した外的條件に强制せられて已むなく踏み出した第一歩として、恐らく文明的行爲の

最も重大なものであつた。フロイドはその著『文明と不滿』（拙譯『社會・宗教・文明』の内）の中で、恐らく如何なる本能への强制からしてこのやうな文化的行爲が生じて來たかを論證せんとした。で、潜在期に於いて本能の禁壓と文明的發展への强制と云ふ事が爲されるのは、嘗て宇宙的影響が人類の過去に及んだことの反復である。併しながら思春期は、そのために新たな本能的發展が、適度な氣候の再來に依つて復活、反復せられるやうになつたものだと見做される。

註* 本誌第二卷第七號及第八號所載、フェレンチー原著、高水力太郎譯「受胎及び性交の生物分析」參照。

四、結論

右に論述して來たところに依つて恐らく明かになつたであらうと思ふのであるが、思春期の心理的態度は幼兒性感への分析的洞察に依つて始めて一層深刻な、滿足の行く如き理解を持ち得るやうになつたのである。思春期に特殊な性心理現象としてエディポス・コムプレクスの復活再燃すること、その幼兒的經驗の反復せられること、なぞを知ることに依り我々は、教育上、又は治療上で、思春期の青年をよりよく理解し且つ取扱ふことが出來るやうになるのである。

以上は、ヴィンの分析學者リヒャード・ステルバ氏の論文『思春期問題に關するフロイド說』（獨文『精神分析教育雜誌』一九三五年第五・六冊）に準據し、處々私見を加へたものである。なほこの問題に關するフロイドの文獻としては次の數種を擧げることが出來る。

一、『性說に關する三論文』の内第三論文「思春期に於ける性感の變化」——邦譯あり
二、『幼兒の男根組織』——邦譯なし
三、『精神分析入門』第廿一章「リビドー發展と性組織」——邦譯あり
四、『禁制と症候と不安と』——邦譯あり

——完——

青年期の研究

土屋秋實

人生を子供の時代と大人の時代とに大別すると、靑年期は丁度その中間の過渡期に當つてゐる。それで靑年期には、社會的にも、肉體的にも、また心理的にも子供の世界と大人の世界とが交錯する。そして詩人哲學者のキエルケゴールが「大人は少年の夢を實現するものである。人はその實例をスウィフトに見る。彼はその少年時代に瘋狂院を建てその成年に至つて自らその中に收容された。」「幼時は何か。それは夢だ。夢の中味は戀だ。」と言つてゐる樣に、子供の時代は搖籃期の夢を追ひ求めてゆく飢と戀との世界であり、大人の時代は子供の時に無意識界に蓄積した夢を實現してゆくための飢と戀との世界であるが、その中間にある靑年期は社會的にも、肉體的にも、また心理的にも夢と現實、無意識界と意識界とが激しく衝突して極度に動搖する時代である。

ふと夜空を仰げば、有限ではあるが終極のない宇宙、辯證法的に螺旋狀の運動をする物質で充滿したところの相對性の宇宙的時空界、その中に幾百億とも數知れない恒星が戀人同志の瞳の樣に煌いてゐる。そしてこの大宇宙の片隅に、北極星を中心としてその周圍を無數の恒星が廻轉してゐるところの一つの螺旋狀星雲がある。吾々が住む太陽系と言ふ小宇宙の中心である太陽は、北極星の周圍を自轉しつつ廻轉する恒星の一つでしかない。そして更にその太陽を中心としてその周圍を八つの遊星（水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星）が自轉しつつ廻轉してゐる。その遊星の一つである吾々の地球！その地球上の力學的世界、物理學的世界、化學的世界、生物學的世界！

その生物學的世界の中に人間界がある。そしてこれ等地上の物質を形成してゐる窮極のものは原子である。その原子は、恰も太陽系を模倣するかの樣に、原子核を中心としてその周圍を多數のエレクトロンが自轉しつつ廻轉してゐる。かように考へてくると、人の一生を支配する搖籃期の夢の底には、深い宇宙的な夢がある樣な氣がする。恐らく戀人同志は、相互に對手の瞳の中に星の瞬きを感じるのではあるまいか。卽ち、太陽の光明と北極星の寂滅とを、生と死とを、そして戀と飢とを。

地球は今日迄に八千万年以上の歷史を經過したと言はれてゐる。そして地質學者は、これを無生岩（八千萬年前から六千萬年前まで）、前生岩（三千六百萬年前まで）、初期古生岩（二千六百萬年前まで）、後期古生岩（一千四百萬年前まで）、中生岩（四百萬年前まで）、新生岩（現代まで）の六時代に分類してゐる。無生岩時代には、まだ地球が赤熱の狀態にあつたので、生物は生棲してゐなかつたらしいとされてゐる。生物が始めて生棲し出したのは前生岩の時代からで、この頃の生物は下等な植物である海藻類や海中に棲んでゐる幼蟲であつた。初期古生岩時代になると、前よりもその形態が大きい海藻類や海の動物類、三葉蟲、海綿、くらげ等が發生した。これらの動植物はすべて海中に生棲して居り、陸上には一步も上つて來なかつた。だが後期古生岩時代になると、海中及び海岸線に添ふた水のある處に、水陸兩棲の魚類に似た動物、昆蟲、蜘蛛、蜻蛉の類が發達し出した。中生岩時代には、爬蟲類のグロテスクで大きな動物が地上を橫行してゐた。そしてこの頃は、哺乳動物はその發生の初期にあつたので、單孔、有袋の如き原始動物や、齒と脊椎と尾とのみで出來上つた鳥類の祖先が生棲し始めたに過ぎなかつた。次の新生岩時代には、哺乳動物が發達し、植物樹木の類が繁茂してゐた。そして八千萬年に渡る地球の歷史上には、氷河時代が四度襲來してゐる。第一期氷河時代は當時常夏の氣候だつたらうと想像される古生岩時代に襲來したが、當時の生物はまだ海中から一步も離れずに海中及び海岸線にのみ生活してゐる原始動物であつたため、氷雪が生物に及ぼした影響は餘り大きくなかつたらしい。第一期氷河時代が過ぎると、常夏の氣候が再び地上を訪れた。そしてこの常夏の氣候が一萬年も續いた頃に第二期氷河時代が襲來して、生物といふ生物が殆んど絕滅されてしまつた。そして怪奇な爬蟲類だけがのこ

つた。次の第三期氷河時代は中生岩時代に襲來した。この寒冷によつて爬蟲類は全滅し、ただ鳥類、哺乳類のみが殘存して進化して行つた。新生岩時代にはマンモス、マストドン、其の他大形の哺乳動物、智力の低い嘼人種が生存してゐたが、やがて第四期氷河時代が襲來して、マンモスも嘼人も氷雪の中に死滅してしまつた。これらの氷河時代が襲來したため、生物は相互の生存競爭の動力によつて自然淘汰されて人類にまで進化して行つた。第四期氷河時代に嘼人類（黑猩々、大猩々、ゴリラ等）は洞窟内に生棲し、火を用ひて寒冷と外敵とを防ぎ、植物の莖、野牛、馴鹿、熊、馬の類を常食としてゐた。次の原人類の時代には石で水を飲む器が作られ、その石器が次第に進歩して石で作つた槍、刄、鏃の樣な戰鬪用の武器が現れた。その次に、今から三千年乃至五千年の昔に始めて眞正人間（ホモ・サピエンス）が種族發展の結果として出現した。

かような極めて長年月に渡る種族發展史は、精子が卵子に侵入することによつて受胎せる個體が、胎内でその生長を遂げる際に非常な高速度で反復再現される。そして個體が胎內におけるその發展を完成し、せまい膣道を通つて胎外に排出される際に、嘼人類乃至原人類が氷河時代に經驗した苦痛が高速度で反復再現される。誕生の際に經驗するこの苦痛は、心理的な「出産外傷」として腦の神經細胞を「條件」付ける。そしてこれが後年、個人發展史上及び社會發展史上に「條件反射」されて神經症が發生する。誕生によつてこの世に現れた獨立の個人としての赤ん坊は、歷史上の眞正人間に相當する。

人類の生活は、蟻や蜜蜂の生活と同じ樣に、一つの集團生活を構成してゐる。だが同じく集團生活であつても、前者のそれと後者のそれとの間には雪泥の差異が存在する。即ち人類の生活にあつては、個人と社會との間に、（1）兩者は相互に獨立の生活意志をもつてゐる、（2）兩者は相互に密接に關聯し合つてゐる、（3）個人は社會を構成する基礎的な單位であり、社會はその基礎の上に形成された超個人的な建築物である、と言ふ樣な三つの關係が存在する。しかし蟻や蜜蜂の生活にあつては、個體の單なる集合が集團であつて、兩者の間に獨立性がなく、兩者は融合して一つのものとなつてゐる。それ故に吾々が人間の歷史について考へる場合には、それを個人發展史と社會發展史と

に分けて考察する必要がある。そしてこの兩者が相互に規定し合つてゐるものたることは勿論である。個人發展史をいさゝか肆意的ながら、(1)乳兒期(口唇性感支配期)、(2)幼兒期(肛門、尿道性感支配期)、(3)幼年期及び(4)少年期(部分性感の潛在發展期)、(5)青年期(轉換期)、(6)壯年期(性器統裁期)、(8)老年期の七段階に區分し、次に社會發展史を、(1)無階級的蒙昧社會、(2)前階級的野蠻社會、(3)階級的古代社會及び(4)階級的中世封建主義社會、(5)階級的現代資本主義社會、(6)階級的協同社會、(7)無階級的協同社會の七段階に區分すれば、この二つの系統における各々の發展段階は同じ樣な性質をもつてゐる。そして、胎内における個體發展史が種族發展史の高速度の反復再現である樣に、個人發展史は社會發展史を高速度で反復再現する。人間の精神もこの樣な種族的＝個體的、社會的＝個人的發展史に沿ふて發達する。そしてこの人間の精神を具體的に認識するためには、生物學的見地と社會學的見地とを綜合して觀察する必要がある。人間の精神を(1)個體保存本能的、經濟的、階級的ロゴス、(2)種族保存本能的、家族的、民族的パトス、(3)エゴ、(4)イデーの四者に區分し、これらを樹木に例へて說明すると、(1)と(2)とは樹木の根であり、(3)はその幹であり、(4)はその枝葉である。樹木は大地に深くその根を下ろして榮養分を吸收し、强靱な幹で地上に高く伸び上り、柔軟な枝葉を大空いつぱいに打擴げ、太陽の光と熱とを求めて「天」にあこがれゆく。人間の精神も樹木と同じ樣な性質をもつてゐる。フロイドの用語に從へば、(1)と(2)とはエスの區劃に屬し、(3)は自我の區劃に、そして(4)は超自我の區劃に屬する。エスは精神の根であり、自我はその幹であり、超自我はその枝葉である。この樣な人間精神がイデオロギー化されると、(1)は科學となり、(2)は藝術となり、(3)は生活意志の規範としての道德となり、(4)は哲學となる。そしてこの人間精神が社會生活に發動すると、(1)は經濟生活となり、(2)は家族生活となり、(3)は政治生活となり、(4)は文化生活となる。人間精神のこれら四つの部分が相互に關聯し合つてゐることは勿論である。そして生活と精神とは相互に不卽不離の關係にあることは衆知の事實だが、前者が後者の基礎であることも亦事實である。種族發展史が個體發展史上に反復され、社會發展史が個人發展史上に再現される樣に、人間の一生は一年の中に繰返

され、一年は一日の中に繰返される。即ち冬と夜とは胎生期に相當し、春と朝とは子供の時代に、夏と晝とは成人の時代に、そして秋と夕とは晩年の時代に相當する。

種族が氷河時代に經驗した心理的苦痛＝個體が誕生の際に經驗する心理的出產外傷は野蠻時代＝幼兒期に反復再現され、それが抑壓されて潛在的に發展し、資本主義時代＝青年期に再び意識面に現れてくる。それでこの資本主義時代＝青年期の精神を研究してみると、そのロゴスは蒙昧期乃至野蠻期＝乳兒期乃至幼兒期の口唇的、肛門的、尿道的部分性感と無意識面で結合しをり、パトスは蒙昧期乃至野蠻期＝乳兒期乃至幼兒期の近親者と無意識面で結合してゐる。そのために、ロゴスはナルチス的であり、パトスは異性親との情死願望、同性親への愛憎アムビヴレンツ等の性質を帶びてゐる。これによつてイデーやエゴも歪んだものとなつてゐる。資本主義時代＝青年期には、無意識面に抑壓されてゐたこれらの搖籃期の夢が必然的に意識面に飛び出してきて、言語動作となつて生活上に發現する。ここに夢と現實との衝突が起る。それ故にこの時代は、歷史上の大轉換期であり、大變動期である。古代人はこれを「世末」として宗教的に豫感してゐたらしい。また或る天文學者は、現代は第五期氷河時代の初潮だとも言つてゐる。なぜならば、年々太陽の黑點が多くなりつつあるからだと言ふのである。根元に遡れば確かにその樣な影響もあるのだと思ふ。だが人間は、その科學的な知慧を働かせば、恐らくこの運命的な必然性を克服してそれを自由性に轉化してゆくことが出來ると思ふ。「哲學者は世界をいろいろに解釋してきただけだ。しかし人間にとつては世界を變更することが眼目である。」（エンゲルス）と言はれてゐる樣に、生活に役立たない知識は無に等しいどころか、かへつて有害である。そして人間の生活が他の動物の生活と異なる點は、後者が單に還境に順應して生活してゐるに過ぎないのに對し、前者はそれのみならず又、生活者としての自己を意識的に把握しつつ自然的、肉體的、社會的、精神的諸還境に對して積極的に働きかけてそれを變更し、その必然性を自由性に轉化してゆく點である。

資本主義時代＝青年期と言ふ歷史上の大變動期における人間精神の特徵は、一方にはナルチス的（自己色情的）なロゴスがイデーを占領したのち自らをドグマ化してその峻嚴な無上命令によつて意識面からエゴを抑壓するのと、他

方にはユートーピア的（近親者との情死愛的）なパトスが無意識面からエゴに抵抗するのとであり、その葛藤のためにエゴは症候を形成して神經症となる。この様な神經症的精神が社會生活及びイデオロギー上に發動すると、文化生活と經濟生活、及び哲學と科學は抑壓的なドグマ性を帶び、家族生活及び藝術は抵抗的なユートーピア性（胎內空想的なニヒリズムもその一種だ。）を帶びるため、兩者の葛藤によつて政治生活及び道德は症候を形成する樣になる。そこで資本主義時代＝青年期の精神の特徵はその神經症にあると考へて差支へない。そして人々がこの神經症から解脫するためには、自己の無意識心理をフロイドの方法に從つて精神分析するのが最も能率的な賢い仕方だと言ふことは事實が證明する。

徹底的な眞人を求めた十九世紀の思想家、マックス・スティルネルは、その著『唯一者とその所有』の中で人生を少年期、青年期、壯年期、老年期に區分し、その各々について「少年はこの世の物に甘んじて、彼が少しづつその物の背後（無意識面）にあるものを把むことに成功した程現實的であつた。青年はさま〴〵の思想に鼓吹されて彼の道を步み、彼が壯年になり、自我的な人間になる迄は理想的である。壯年は彼の意の儘に從つて有ゆる物と思想とに交涉する。そして彼の個人的利害を全ての物以上に置く。最後に老年は、自分が老人となつた時それに就いて話す充分な時がまたあることであらう。」と書いてゐる。そして更に少年を古代人と比較し、青年を近代人及び自由人（當時の自由黨員の意味）と比較して彼の銳い分析的な考察を進めてゐる。彼は人生について次の樣に言ふ。「人間がこの世の光を瞥見する瞬間から彼は彼自身を發見しようとする。そして彼が自分以外のものと一緒に雜色混合の中に動搖してゐる紛亂から彼自身を把持しようとする。それで、各自がそれ自身を守ると同時に、他のものと絕えず衝突する樣になるから、自己肯定の鬪爭が避け難くなるのである。勝つか負けるかこの二つに一つの間に、鬪爭の運命が波動するのである。勝つた者が殿樣になり、負けた者が臣下になるのだ。前者が主權を握り、『至上權』を振ひ、後者が恐怖と服從とにおいて『臣下の義務』を盡すのである。しかし兩者は敵になる。そして常に機會を待ち望んでゐる。

かれ等は相互の弱點を覗つてゐる。鞭が人間を征服するか人間が鞭を征服するかである。」そして更に、少年について彼は次の樣に言ふ。「少年時代においては、解放が全ての物の底に徹しようとする傾向を取る。卽ち物の『背後』にあるものを把まうとする。だから我々は何人の弱點をも偵察する。そして我々は物を破碎することを好む。隱された隅々を隈なく探し、道のあちらこちらに蓋はれてゐるものを精察し、出來るだけ全ての物に對して色々なことを試みるのである。我々が一度物の背後にあるものを把む時に、我々は自分の安全を覺えるのである。たとへばその鞭が我々の執拗に對してあまりに薄弱である事實を捉へ得た時に我々は最早それを恐れはしない。そしてそれを乘り越えてしまふのである。その鞭の背後に、それよりも偉きい我々の執拗、我々の不屈な勇氣が立つのである。我々は次第にかの不可思議な恐怖を感じてゐた鞭の威力、父の嚴酷な容貌などといふ我々にとつて神祕幻怪な全ての物の背後に到達する。そして全ての物の背後に、我々は我々の沈着、勇氣、我々の反抗力、我々の優勢、我々の征服力等を發見するのである。これまで我々に恐怖と服從とを鼓吹したものの前に、我々は最早オヅ〳〵と退かない、我々は勇氣を起す、全ての物の裏面に我々の勇氣と優越とを發見する。兩親及び强權者の鋭い命令の背後に、結局、我々の勇氣ある選擇若しくは我々の機智に優れた敏捷が立つのである。そして我々が自分自身を感ずるに從つて、これ迄不可抗に思はれたものが次第に小さく見えてくる。そして我々の巧妙、敏捷、勇氣、執拗とはなんであるか？心以外の何物であらう！」精神分析は、吾々が抑壓的敎育のために見失つた少年期の本能的勇氣を物の背後に再現さして、これを强化する技術だと言つてもよい。彼は更に靑年について言ふ。「心とは最初の自己發見の名稱であり、最初に神聖な物卽ち神祕な物、幽靈、『天上の諸力』等を不神聖にするものの名稱である。我々の靑春の新鮮な感情、この自己の感情が今や他物にも服從しない。世界が不信用になる。なぜなら我々がそれ以上になり、我々が心になるからである。我々は我々の力の初步を自然力に對して振ふ樣になる。我々は兩親を一個の自然力と見做して彼等に服從する。後に我々は言ふ。父母は見捨てられなければならない。凡ての自然力は粉碎されるものと見做されなければならない。彼等は征服せらるべきであると。合理的な卽ち「智的」な人間にとつて、一個の自然力と見做される時に家族は存在の

理由を失ふのである。兩親と兄弟等に對する反逆が現はれ始める。しかし若しこれ等のものが智的な、理性的な力として『再生』するなら、それは最早以前の如きものではなくなるのである。そして兩親ばかりでなく、一般の人間が青年によつて征服される。彼等は青年にとつて何等の障害にもならない、そして無視されてしまふ。なぜなら今、青年は、人は人間よりも寧ろ神に服從しなければならないと言ふ。この高い見地からすべて『地上の』ものが輕蔑すべき遠方に退く。なぜなら標準が天上のものになるからである。少年期において人は世界の諸法則の抵抗に打勝たなければならない様に、今では彼が志す全ての物の中に、彼は心、理性、彼自身の良心などの故障に出遇ふのである。『それは不合理である。非キリスト教的だ、非愛國的だ』と、この様に良心が我々に叫ぶ。そして我々を威嚇する。人間が隱れてゐるもの（抑壓されてゐるもの）を眺めてゐる間は、恐ろしいのは復讐のエウメニデス女神でも、ポセイドンの怒りでも、神のそれでも、又は火の罰鞭でもない。だが恐ろしいのは良心（超自我）の聲である。我々は今、我々の思想を追つかける。そして我々が以前兩親や人間の命令に從つた樣に思想の命令に從ふ。我々の行爲の過程は、少年期においてそれが我々の兩親の命令によつて決定せられた樣に、我々の思想（觀念、概念、信仰）によつて決定せられる。すべてそれ等に對して、我々は少年の時旣に考へてゐたのである。ただ我々の思想に肉がついてゐなかつたのみである。青年は智的でない全ての物を『外面的なもの』といふ侮蔑的な名稱の下に總括する。それにも拘らず、若し青年が最もツマラナイ外面的なもの（例へば學生俱樂部の習慣その他の諸形式）に拘泥するなら、それは彼がそれ等の物の中に精神を發見するからである。そしてその時それ等の物は青年にとつて象徵（性的）の役目を勤めるのである。自分が全ての物の裏面に自己を發見し、そしてそれを心として發見する樣に自分は後に至つて思想の背後に自己を發見しなければならない。卽ち、思想の創造者若しくは所有者としてである。精神時代において、思想は自分の頭をそれ等が乘り越える迄生長した。しかしその思想といふものも元來頭から生れた子供なのである。それ等が自分の周圍にさまようて發病の幻影の樣に自分を痙攣さした恐ろしい力である。それ等の思想は彼等自身の爲めに具體的になり、神、皇帝、ローマ法王、祖國などといふ樣な幽靈になつた。そのために、たつた今精神として自

分自身を發見した自分はスグ又自分のものではなく天上のものとして完全な精神の前に叩頭して自己を失ひ、自分の空虚を感ずる様になるのである。」次にスティルネルは壯年について言つてゐる。「壯年は彼がこの世界をあるがままに見るといふ點で青年から區別される。彼は、青年の様に至る處においてその誤謬を發見し、彼の理想に從つてそれを改善しようとは欲しない。人間はこの世と交渉するには自己の理想によらず、自己の利害觀念に從はなければならないといふ見解が確立される。人が彼の具體的自己を以て戀に落ち、血あり肉ある生ける人間として彼自身のうちに快樂を取る様になる迄は、個人的な或は自我的な利害觀念を持たない。我々が人間にかくの如きものを發見するのは壯年においてのみである。それは單に我々の精神の利益のみではなく、全體の滿足、全人の滿足、利己的のインテレッセである。試みに青年と壯年とを較べて見よ。そして壯年が一層頑固に、より少く寛大に、利己的に見えないであらうかを見よ。だから壯年は青年より惡いのか？　否と、汝は言ふ。彼はただ一層確かになつたのだ。若しくは君がまださう言ふ様に一層實利的になつたのだ。だが、主要な點は壯年が青年よりも一層彼自身を中心とすることである。青年は神、祖國などといふ外物に昏惑されるのである。だから壯年は第二の自己發見を示す。青年は精神として彼自身を發見して、再び一般の精神、完全な神聖な精神、人間、人類等卽ち全ての理想中に彼自身を失つてしまつたのである。しかし壯年は彼自身を具體的精神として發見するのである。」そしてスティルネルは最後に「自分は自分の力の所有人である。それは自分が自分自身を無二として知る時にのみさうであり、唯一者において所有人彼自身に彼の創造的虚無（ナルチス的なイデー卽ちドグマが無い純粋の創造で、ニヒリズムの意味ではない。）に歸る。そこから彼が生れて來る。自分以上の一切の本質は、それが神であれ、人間であれ、悉く自己の唯一性の感情を薄弱にする。そしてそれはこの自覺の太陽の前にのみ蒼白くなる。自分が唯一者たる自分自身の爲めに自らを干與するならば、その時、自分の干與はその刹那に變る。具體的創造者の上に安住し、創造者は彼自らを消費して、自分は『萬物は己にとつて無だ』と言ひ得る。」と主張し、「如何なる目的に向つて現代が進む可きかといふことについて、最後に一言を費すならば、意志なき學術を必然的に沒落せしめて、意識的な意志を發達させる。この意志は自由な個人の太陽の輝きの中

に自らを完成する。即ち、およそ次の如くにして得られる。知識は死なねばならぬ。意志として復活する爲に。そして自由なる個人として毎日新たに自己を創造する爲に。」（藝術と宗教）と解説してゐる。

人生の各時代における精神を別の言葉で表現すると、少年は「鳴かざれば鳴くまで待たうほととぎす」（家康）の精神が普通であり、青年は「鳴かざれば殺してしまへほととぎす」（光秀）の精神をもち、壯年は「鳴かざれば鳴かしてみせうほととぎす」（秀吉）の精神であり、老年は「鳴かざれば鳴かずともよしほととぎす」の精神となると思ふ。また臨濟の言葉を借用して言ふと、少年は奪人不奪境、青年は奪境不奪人、壯年は人境倶奪、そして老年は人境倶不奪である。これらは循環しつつ螺旋狀の運動をなすところの一つの過程で、その間に價値の高下は少しもない。この世界は畢竟、大きく言へば、すべてが螺旋狀の運動をなす太陽系の中にあるのであり、小さく言へば、太陽系の子供みたいな原子によつて構成されてゐるのだから、無機物でも、生物でも、社會でも、また精神でも、すべて「地上」のものは皆螺旋狀の運動をなして發展し消滅する。この樣な「地上」に生活するために若し道德といふ如きものがあるならば、それは恐らく次の樣なものではないか。

「兩邊に墮すること勿れ。中道に執すること勿れ。（執すれば兩邊に墮す。）空忍に住すること勿れ。」

（十一・十一・二十五）　（完）

スタンリー・ホールの『思春期研究』

塚崎茂明

一、スタンリー・ホールとその學說

北米合衆國マサチュセッツ州ウスター市クラーク大學總長にして心理學及び教育學の教授ジョン・スタンリー・ホール博士（Dr. Stanley Hall）は青年心理學の權威として、又同大學創立廿週年記念講演會にフロイド及びユングを招待し、その結果アメリカに於て精神分析學を一般化せしめた斯學の恩人として、我々分析學徒にとつては親しみの深い學者の一人になつてゐる。彼はハーバート・スペンサーの影響を多分に受け繼いだものと見えて、その心理學說中盛んに進化論を取入れてゐる。その爲に自身で驅逐せねばならぬと言つてゐる「イズムに囚はれた見解」の中へ墮ちてゐる所があるかも知れないが、その著作『思春期』（"Adolescence" 1904）は青年心理研究の指針としてその貢獻する所は少くない。

彼が心理學と進化論の融合を試み、此れに發達的心理學なる名稱を附してゐる。そして此の試みには四つの障碍が存し、それ等を克服する事なしには心理學の發達は望まれないと言つてゐる。その四つの障碍と言ふのは、次の如きである。

第一、古代及び現代の哲學的、神學的思想による先入觀の爲め新說が受け入れられないこと。

第二、肉體と精神を對立させて、その間の密接な關係を認めないこと。
第三、定義し、分類することに專念し、型に入れた一定のイズム（論若くは說）に囚はれること。
第四、野蠻人、不具者、犯罪人、發狂者、動物、兒童等の生活は普通開化した成人の生活と距ること遠く、その研究が疎かにされてゐること。
然し野蠻人や精神的不具者小兒等は心理的に未發達なものであり、成人の心理を理解しようとするには、先づ未發達なものに就ての充分な研究が必要である。又肉體と精神とは別々に考へらるべきではなく、常に此の兩者は同時に考慮せられねばならない。以下、スタンリー・ホールの著『思春期』の概略について述べることにする。

二、思春期に於ける身體的發達

先づ思春期の心理を研究するに當つては、第一にその身體的發達に就いて知るところがなければならない。今その發達狀態に關する統計に依つて確定した事實を箇條書きにすると、次の樣になる。
一、春機發動期前に於て身長、體重は著しく增加する。（十四・五才）
二、女子の方は此の急速な發達が男子より一・二年早い。（十二・三才）
三、此の急速な發達の以前に稍減少した發達期がある。（八・九・十・十一才）
四、十八・九才頃身長の發達續いて體重の發達が後々に不規則に減少する。
更に此れを身體各部に分けて調べて見ると、
（甲）骨骼＝有脊動物に於ては個體發生に於ても、種族發生に於ても先づ第一に顯はれるものは中軸系統で、胎生第一ヶ月目に既に是を認める事が出來る。化骨の初まるのが胎生第三ヶ月目で、成年に於ては誕生時の二十六倍の重量を有する樣になる。
（乙）筋肉＝各個人の筋肉の發達に就いては正確なことは不明だと言ふ。八才の頃には筋肉の重さは體重の二七・

二%、十五才の頃には三二・六%、十六才の頃には四四・二%、二十六才の頃には四五%、以後次第に此の割合は減少して行く。

（丙）心臓・血管＝小兒期から春機發動期に達する迄の間は心臓の大きさと血管の横斷面との間に存る關係に於てその割合は心臓の方が小さく、成人では此の關係が逆になり血管の方が小さくなる。從つて小兒期には心臓の搏動多く血壓低く、成人は搏動少くなり血壓は高くなる。血液は初生兒にて體重の十九分の一、成人にて十三分の一、又は十四分の一である。春機發動期に於て心臓は急に大きくなり、血量も増加する。

（丁）肺臓＝肺臓の重量は老年に至るまでも發達を續けるが、肺活量は十六才の頃最も速かに増加する。呼吸數は嬰兒にては三十五―四十四、十五才にては十八―二十。

（戊）腦髓＝腦の重量は約三倍半に増加し、春機發動期數年前（十二―十四才）に最大重量となる。誕生から成人に至る間にその重量は約三倍半になり、脊髓の重量は七―八倍に増加する。殊に青年期には腦皮質の各部分を連結する切線纎維（tangential fibre）の數及び直徑が増大する。此の期に於ける智識の發達は切線纎維の發達と相伴ふものであると考へられる。

（巳）皮膚及び内部機關＝皮膚中に存る脂腺を初めとし唾腺・涙腺・内分泌腺、消化器、生殖器等、その機能特に顯著となる。

今まで述べて來た事を再び總括すれば、思春期に於ては骨骼、筋肉、循環器系統、呼吸器系統、神經系統、生殖器系統、消化器系統の發達殊に急速なる爲め、その發達の途上にあつて種々の疾患を惹起することは容易に考へられる。例へば、思春期には神經痛、骨膜炎、心臓病、肺結核消化器病、精神病、等に侵されることが少くない。

三、思春期に於ける精神的發達

思春期に於ける身體的發達は不充分ではあるが述べ終へたものとして、次にはその精神的發達に就いて述べること

にする。

前述の樣に身體的發達と精神的發達とは別個のものであつて、而も切り離して考へる事の出來ないものであり、意志表示の機關としての筋肉の發達と精神的發達との關係は殊に重要視されなければならない。男女性別による二次的變化は實に此の時期に始まるのである。今までは裸にして後向きにして置けば男兒女兒の區別困難だつた體格も、男子は肩巾廣く胸筋背筋の發達著明となるが、女子は骨盤大きく子宮筋の發達著しくなり、皮下脂肪・水分に富む樣になる爲め、男子の直線的なのに對して曲線的になつて來る。從つて男子はその筋の發達に連れて精神的發達も著明となるに反して、女子は早熟ではあるが精神的には小兒期を脱しられない。では、女子が精神的には小兒に近いと云ふなら、小兒は精神的にどんな狀態にあるか述べて見よう。

フィアオルト氏の調査によれば、腦の重量は誕生の初年に二倍以上に增加すると云ふ。しかし量を以て直ちにその質を云々し得ないとしても、生後一ヶ年間の間に於ける精神的發達は實に驚くべきものがある。此の間に於て過去長年月を經て現在に至つた人類の古い經驗を再び反復するのである。原人の生活は幼兒の生活と同樣衝動的、反射的、本能的であつたらう。そして幼兒は外界の刺戟に對しては全く反應的で、その自發運動を有意運動に變へる事をしない。彼等は唯手足を無意味に動かす。そしてあらゆる感覺器を總動員して外界を吸收しようとする。今までは無意味だつた指の動きも何等かの目的を發見し、その目的に適した機能に向つて努力する。自發運動はその努力によつて有意運動に修正される。努力に努力を重ね漸くにして得た步行も今や眼を閉してさへ可能となる。對象を發見する事が步行の穫得によつて倍加する。斯うして彼等は幼兒期を卒業する。

少年期に入ると自我の意識が發達するにつれて自己批判的になつて來て少年等は萬事を自分の尺度で計るやうになる。從つてともすれば自己懲罰的になり過ぎたり、正邪の判斷を謬り、過度の自信を持つやうにもなる。彼等の視野は未だに狹い。此れは女子が自己の近邊に對しては實によく觀察し、叉その外圍に關する知識の周到なのに反して、男子の大局的で然もその周圍を理解しないのと、多少差異はあるが、對比される。しかし此の過度の自信も成人との

接觸に於て崩壞されねばならなくなる。今や模倣の時期である。斯うして社交的本能に順つて上長の前に膝を屈するやうになる。

模倣はまゝごと遊びとなり、或は演劇的傾向となり、空想の世界から一歩一歩と現實の世界へ步み出して來る。自已本意から自己批判的になり、最後には他人の批評をも得やうと望むやうになる。自己の動作や言語に他人の歡心を繫がうとして滑稽を演ずる樣になる。そして更に進めば他の嘲笑の料となることを恐れ、已が痴愚を隱蔽しようとする爲に正反對な野卑な體樣を作さうとするやうにもなる。以上の過程は相繼いで、或は殆ど同時的に現はれ、少年達は大人の世界へ入り込んで來る。

四、年少者の過失、背德及犯罪

文明國に於て犯罪統計は悲しむべき事實を示してゐる。それは十二才より十四才迄の年齡に於てあらゆる種類の犯罪及び少年犯罪者の數が到る處に增加し、而も益々早熟的になつて行く傾向がある事である。

少年犯罪の特徵は盜犯の多いことであり、米國少年感化院の處罰原因を千八百九十年の統計に據つて調べて見ると、竊盜に次いで男女とも虛言及浮浪、兩親に對する不從順が多數を占めてゐる。此れは少年が社會的境遇に順應することが益困難になつて行くのを示すものだと云ふ。

青年になると公德に關する犯罪は少くなり、身體に關する犯罪が多くなつて行く。

しかし犯罪と云つても絕對的なものでなく、人爲的に作られた法によつて定められるのであるから、犯罪の硏究は狹い見地からなさる可きではないと言つて、人類史との比較をスタンリー・ホールは試みてゐる。例へば少年の浮浪性に就いては水草を追つて放浪した遊牧の時代を、作虐の本能は原人に見るものの隔世遺傳を關係づけようと努めてゐる。

小兒期の虛言は想像の餘りに出るものであつて惡意は存しないのであるが、叉野蠻人が憎惡する敵に對して虛僞を

話すのを正當の事と思つてゐるのと等しく、小兒にも個人的好惡の念によつて眞實なる觀念に大きな異同が生ずのだと云ふ。青年期になれば虛僞に陷るのを避け、虛言に對する一種の恐怖心を抱いて頻に「あらず」「恐らくは」「と思ふ」といふ類の語を用ひるやうになる。

竊盜の行爲は所有權の何なるかを知らない所にその原因があるので、未だ私有財產なる精徵な觀念のなかつた時代にその根柢を有するのだと。少年達は盜賊隊、海賊、漁獵倶樂部を組織して、食料、電線、木竿等を竊み步いて洞穴や森林中に隱匿したり、同上の內容を持つた傳記物語を讀むことを好む。マーク・トエーンの『トム・ソーヤー』やシルレルの『群盜』もこの類であらう。此種の掠奪的習慣は無邪氣なものと考へて可なりで、十代の初になれば自然消失する。又不良少年團を組織して容易に解散しないものも少くない。

放火犯人特に放火狂型のものは通常青年に多い。化學現象の中で火くらゐ人を魅するものはなく、その痲醉的、催眠的な刺戟が放火の動機となるのであらう。

飲酒の習慣を得るのは二十二才以前で、學校生活を卒へ、社會に出て年長者と交際する樣になつてからである。身心の發達その度に達した靑年期に於ては、平凡、冗長、煩瑣を嫌ひ、感情の强烈・感覺の新奇を要求して、その結果飲酒を好む樣になるのである。サミュ ールソン氏に依れば、何れの國に於てもその文化の最高の段階に達する迄は盛に飲酒が行はれたものであると。

賣淫の罪惡を犯すのは淺薄で輕浮な虛榮心、努力と勞働との嫌惡、不良なる家庭、早熟的情慾等にその原因を歸さうとするのが一般であるが、賣淫を行ふ樣な女でもその不實な情人に熱烈な愛着を爲し、その友人に對しては正直且眞率で、名譽の觀念を持ち、小兒・動物に對して極度の同情愛憐の念を示し、その或る者は烈しい宗教心を有し、棄去つた家庭、兩親、自己の幼時の回想に對して優しい情緒を有する事實の存するところから見れば、單に婦人の性質、現在狀態のみの研究にては解明出來得ないであらうと。此處に於ても古昔の社會に關する進化論的研究に待たなければならないだらうと云つてゐる。

る。少年自殺は些細な原因或は突然起つた盲目的衝動から、又は模倣により、復仇の手段として行はれる。青年期になれば空想の崩壞、愛情が原因となる事が多いが、哲學的自殺は少い。通常男子の自殺者數は女子のに比較して遙に多いが、十五才から二十才にかけて女子の方が比較的多くなる。此れは春機發動が女子ではその期短く、男子より急激な變動を感ずる爲であらうと。かうした自殺の念の生ずると云ふ經驗は、思春期に於て誰しも一度ならず有ることで、從來專ら自我中心的だつた小兒の生活が此の期より次第に他人の爲に義務を行ふ生活に移らうとして自我を抑制する爲め、更に一轉すれば極端な自我滅却の擧に出るやうな結果になるのであらうと。

五、青年期の性的發達と愛情

青年期には皮膚が幾分無感覺になる爲か、特殊の皮膚の感覺を要求するためかは決定し得ないが、兎に角皮膚に異常の感覺が生じて來る。此の期には皮膚の脂肪の分泌が著しくなるため皮膚疾患に罹ること多く、特に顏面に生じたふきでもの類を除去する快を得ようとして盛に搔き、抓み、針を以て刺し、擦り、削り等する。此ふした習慣が性器的に現はれる時は手淫の惡習を生むことになる。手淫の原因は單一なものではなく、その誘因をなすものも少くないが、健康で境遇佳良な兒童よりは羸弱で神經質な兒童の方が此の惡習に染み易い。

性に關する兒童の感受力は極めて鋭敏であると云ふことは科學も兩親も未だ承認しようとしないが、極めて愼重な注意が拂はれねばならない。手淫の惡影響は此の惡習の增長せられるところにあり、その結果として痙攣、癲癇、動悸、神經衰弱、癲狂等の重大な精神及神經的疾患を惹き起す。道德上に於ては手淫の惡行は秘密を要し、秘密は虛飾、僞善、虛言の習癖を誘知し、卑屈、怯懦、我欲の念はその度を加へて、博愛、慈善等の念は空となり、精神的薄弱者となつてしまふ。又此の惡習から脫せられない時は、自暴自棄となつて自殺する青年の數も少くない。なほ去勢が癲癇の發作を輕減する事は大體疑ひない事實であると云ふ。

青年期に於ては新陳代謝速かに發汗、皮脂腺その他の分泌盛なる爲め、體臭は殊に強くなり、他性の臭覺を刺戟する。此の期には嗅覺的な刺戟を盛に求め、花卉の芳香、香水、毛髮、衣服、紙等その香氣を愛する。アルサウス氏に依れば、嗅官の第一の職分は生殖作用の補助にあると云ふが、宗教的儀式の中に用ひられる薫香の暗示性と比較して考へると面白いと思ふ。

人間に於ては動物より嗅覺の方は寧ろ退歩して行くが、此れの補ひをなして進歩したものは色覺であらう。又色覺と同樣に聽覺も又戀愛空想の仲介となる。斯うしてルードキッヒ氏の言ふ如く、青年期の數年間は、精神過程の九分は性及び廣義の性的官能に集中すると考へられ得る。

個人的には愛情の幼稚な形式のものは往々八才以下の男女間に於て既に見られ得る。此の種の愛は意識的なものではなく、他人の嘲弄を恐れる色はない。八才乃至十二才又は十四才の間に於ては戀愛の情は前の樣に無意識的ではなく、相互に羞耻の念を伴つて來る。及此の時期の特徴として他性の年長者に對して張烈な愛情を抱くやうになることがある。此の場合年齡の懸隔は十年若しくは二十年或はそれ以上のこともある。

愛情發達の次の段階は春機發動期に起るもので、兩性が一般に或る季節間は却て互に相隔てようとする傾向のあるのが特に此の時期の愛情の現はれ方の特徵である。此れは人類の進歩に大益を與へた古代の習慣が本能として現はれるものであらう。更に進んで最後の段階に達すれば、十分且正當な意義に於いての愛の時代であつて、精神及び身體の成熟時代に屬する。

六、自然に對する青年期の感情

青年期に於ける性對象に對しての愛情に就いては前述の通りであるが、次に自然に對する態度の變化は何うであらうか。

小兒期に於て今まで全く自己中心的であつた心理生活も、その外界を爲す自然を認知するやうになるに從つて、自

然を理解しようとの試みが行はれやうになる。卽ち活物主義(アニミズム)の時代である。然し精神的成熟に近つくに從つて、從來耳目に慣熟した自然界は一變して別個の新しい外觀を呈するやうになる。小兒期は空想的な自然支配の時代であり、靑年朝は自然の節理に瞠若し、自然の美を熱愛する時代である。

以下自然に對する興味の或るものに關して、一般進化の順序を逐ひ、且つ主として靑年期に就いて概說しよう。

○星辰に對する感情――小兒は星を見て、金剛石・大空を支へる釘頭・火花・硝子と考へ、又此等の星は月の母・日の父の下に相睦みあふ家族・人類に對する合圖・亡き人の靈魂と思ひ、或は又甲の星を自己の星とし、乙の星を他に當て、星座の中に種々の形狀を現はすことを娛む。

靑年期には星に對する感情は一層深くなり、愛と崇拜との相半した心情が自ら發して來るやうになる。又星に對して冥想に耽けり、その精神は肉體を離れて星の世界を逍遙する。或は又少女は星と默契あるを感じ、若き婦人の中には熱情的に星を愛するものがある。

○太陽に對する感情――我々は肉體精神共に太陽の子として、日々大暗黑から救ひ、睡眠より覺めさせ心情を壯快にして呉れる爲に、本能的に太陽を自己の創造者として崇拜する。小兒は太陽を擬人視し、その光輝に喜悅する。日沒の光景は靑年等を小兒の樣に樂しませ、又日の逝くのを悲しませる。此の際外部の感覺朦朧となると同時に內部の精神は明瞭の度を加へ、沈思靜慮、呵責と激勵の形となつて現はれて來る。宗敎的信念も藝術的向上心も是時に於て啓發の好機會を得ることもあり得るのである。

○月に對する感情――少年は月と語り、遊戲の伴侶とし、或は亡き父母・友人・天使の顏をその中に認め、又色々の疑問を提出する。靑年期には月は道德的・詩的・宗敎的生活と密接な聯絡を掛ち、又主として愛を暗示する。少女は月に喜び或は嘆き、請願し、懷鄕の情に惱み、却て又恐怖の念に襲れることさへあるのにもかゝはらず猶り靜かに月に對することを好む。時には月に狂つて自殺するものもある。

○雲に對する感情――小兒にとつては雲は空想的幻影の發生地である。天使・景色・城廓・車馬・船舶・戰爭・隊

商・刀劍・動物・樂園・花卉等幻想の種は盡きない。青年期には雲の中に自由と平和と神秘とを認める。

○火焰に對する感情——火も又小兒の想像力の良材となること雲に等しいが、變化動搖大なる爲めその影響するところも少くない。

○水及び海洋に對する感情——小兒は水に秘密を訴へ、之に物品を供し、又水中には水精・妖鬼・海神の類が生息し、龍宮又は洞穴の存在することを信じてゐる。青年期には海濱に立ちては靜寂・安慰・平安の情を起し、海上遠く見遙かしては永生無窮の念自から生じて來る。人間が水に心引かれるのは肉體に存する遠き水生時代の痕跡に相當するものが精神中にも存つて相呼應するのではないかと疑はれる。

○花卉に對する感情——小兒は花卉を愛撫することを好み、遊戯する際には花を翫具とし、人形とし兵卒とし金錢とする。又は花で頸飾・花環・腰帶等を作り、汚點のあるものは惡んで蹂躙する。十三・四才より十九才頃になると花を胸に抱き、接吻し、顏を花中に埋め。感觸・香氣を愛する。花はその種類によつて花言葉を持ち、その意味する所は色々である。青年期の女子が花に心情を動かされるのは、花が青春妙齡の時期を最もよく表現してゐるからであらう。

此の稿は未だ殘された多くのものがあるが略することにして、又の機會を待つことにしたいと思ふ。殊に教育論はその全部を略したので、終尾徹底しないまゝ一先づこゝに擱筆して置く。

——一九三六・一一・二六——

現代青年に禍根を告げる

――「思春期心理」の崩壞――

高橋鐵

「現代青年論」の氾濫！ これは又をかしな現象だ。が、識者は擧つてこれを語つてゐる。そしてをかしなことには（これが問題なのだが）斯くも怒濤のやうな「現代青年論」を讀む現代青年があるだらうか。もし、あつたらば、彼は「現代青年」ではない。だから、勿論、この一文も、「現代青年」からは、「ハリキッとるのウ」などとオチャラケた一蹴を受けるのみであらう。

それにも拘らず、私が進歩的心理學徒の熱誠をこめて、（すこし頭の禿げた「現代青年」の一人として）青年諸君に呼び掛けやうとするのは、諸君等に異議があるからだ。且、諸君達をさうまで過熟にさせた世に異議があるからだ。**どこに異議があるか？** 私はハッキリ云はう。青年諸君達、君達に八方から浴びせられてゐる批判を、私も、一應肯定して數え上げてみやう。――

野性的だ！ 空ッぽだ！ 無内容だ！ 享樂的だ！ 無情熱だ！ 虚無的だ！ 動物的だ！ 露出症的だ！ 模倣的だ！ 淺薄だ！ 輕兆浮華だ！ 功利的だ！ 刹那主義的だ！ 機智があるだけだ！ スポーツティクな一方だ！ 唯物的な似而非科學主義だ！ 頽廢的だ！ 怠惰だ！ 親不孝だ！ 禮儀知らずだ！ 不眞面目だ！ 贅澤だ！ 無反省だ！ 利已主義だ！ 無定見だ！ エロだ！ 臆病だ！………チンパンヂーだ！ 殼潰し（ファトイフェルシュエンデル）だ！ かげろうだ！

そして、これが驚くべきことには、大體に於て、實相であるらしい。現代青年諸君。これらが果して古來「人生の花」と呼ばれた青年期の屬性でよいものだらうか。そして、諸君等は、なぜ、こんな昆蟲的存在に墮してしまつたのか？（これは後に詳述するが、云ふ迄もなく、諸君達の社會的存在が諸君達の脆弱な「意識」即ち表象・目的及び衝動・道德的イデオロギー等を決定したのである。私は敢えて精神分析學によつて唯物辯證法の此の命題を裏書する一人だ。——W・ライヒ『唯物辨證法と精神分析學』參照）

今迄の思春期心理論を見やう！　私は決して「青年期」を蔑視する者ではない。（いや、それどころか「青年期」が個々人の一生にとつて決定的な轉機であることを認めてゐる）そして、たゞ現代社會下に於て本能まで歪曲されて行く人間の心理過程を述べやうとしてゐるのだ。そこで先づ、現代青年と對比して、今迄の心理學者が攻究した青年心理といふものを概觀せねばならぬ。

青年期といふのは思春期（定說としては生後十四年前後）から廿年前後迄のことを指してゐるが、分析的に觀るならば、人間の性本能が群雄割據的な部分本能から性器の下に（中央集權的に）集められる性の二次的開花期を中心とした時期である。そして男女共に、生理・心理的に大轉化を果す時である。

「天才は一般の人々がたゞ一度しか持つことの出來ない青年を（一生の中に）幾度も繰返し經驗する」（ゲーテ）といはれる尊い青年心理を先人はどう記述したらうか。私は、以下に、スタンリー・ホール、ハヴロック・エリス、マンテガッツア、W・シュテルレ、ホーリングウォース、シュプランゲル、キッシュ、山本宣治、金子近次諸氏の說を重複しないやうに列擧してみやう。

價値生活に入る事、自己籠居的になる事、精神何容が豐かになる事、心理的反應が銳敏になる事、社會性が現れる事、理想・空想の力が强烈になる事、反抗心が激しくなる事、自我が固まる事、……（もつと具體的な點では）怒りツぽくなる、觀察が細かく銳くなる、理解者を熱狂的に求める、羞恥心が强くなる、浮浪性が生じる、好き嫌ひが一變して激しくなる、サド・マゾヒズムが著しく現れる、推理・想像・反省心・優越慾・好奇心・懷疑心・破壞慾・等

が深くなる、思考が抽象的になる、ヒロイックになる、空虚感に襲はれる、訓練に違反する事が多くなる、手紙を矢鱈に書く、多感になる、矛盾・兩極性が增す、愛を萬物に抱く、操つたがる、接近衝動が强くなる、皮膚接觸の快感に耽り出す、子供扱ひをいやがる、亂暴になる……

青年諸君に思ひ當ることもあるであらう。私は、もう一層、諸君の聯想が適確になるやうに（具體的に察せられるやうに）二三の風俗詩を引用してみやう。

「失戀のノート馬鹿〳〵と書き」、「年頃になつて娘は秋が好き」、「孝行の娘も惱む年になり」、「娘から娘へムダな文が來る」、「母の手を振りきつてゐる美少年」、「兄さんともう步かない十五六」、「もう娘胸で積んだり崩したり」、「家の暗さ少年此の頃知りそめし」、「悲觀したなどと妹ませてくる」、「十七と答へて母の蔭にゐる」、「妹に目方をきけば腹を立て」、「意見きく息子の胸に女あり」、「夏やせを嬉しいものに娘する」、「兄弟子の腕には娘惚れてゐず」、「紙入を出すのも娘恥かしい」、「短歌集母は内氣な娘と思ひ」、「初變は末の始末の念はなし」、「人形へ言はれない事云ひきかせ」

その他、不朽の文學中にも青年心理の燃えたぎるものが多い。「狹衣物語」、「落窪物語」、「八百屋お七」、（「五人女」中）、「たけくらべ」、「エルテルの悲しみ」、「ハムレット」、「罪と罰」、「群盜」、「春のめざめ」、「戀愛三昧」、「思ひ出」、「ルーヂン」……否、文藝中のヒーローやヒロインを始め偉人天才は殆んど皆、青年心理の權化であると云へやう

そして、現代青年諸君、諸君の中、誰が敢えてハムレットになれるだらうか。いや、諸君達はドンキホーテにさえなれない筈である。

つい最近迄（十九世紀末から廿世紀初期迄）は、人間はハムレットとドンキホーテとの二種類に分けられると云つたものである。ところが、現代青年諸君、貴方がたは一體何ものなのだ？　人間の中のどれにも屬さない諸君は一體誰なのだ？

さうだ。確かに現代青年は「青年」ではない。子供でもない。大人でもない。——子供から一轉して、全く變つた科學獸になつてしまつたやうなサムシングである。

併し、それも無理からぬことなのだ。何故ならば、現代青年は、戰慄すべき、心の强奪に遭遇してゐるからだ。諸君は、何を奪はれてゐるか、私は順序として、「非常時」現代に到るまでの青年心理の發達過程を考察することにしやう。

青年心理の機制は如何にして成生したか？ 昔……と云つても、つい最近までは、青年心理は家族ロマンスによつて重大な整形手術を受けてゐた。兒童が丁度思考期に到達すると、肉體は生理學的調査統計が明白に語るやうに大飛躍し初め、心の活力も充實する。從つて所謂全精神內容（感覺から智情意などと稱するものの全部）も豐富に纖細鋭敏になつて行く。そして、本能の原素とも云ふべき自己保存本能と性本能との中、性本能は、午睡から醒めたやうに急速度に活動しだす性器の支配下に、統裁される。マンテガッツァは、少女の性愛的（エロティッ）豫感（プレセンチメンツ）は卵巣の成育・經血の開始等の生理・心理的原因の他に恥毛の發生・乳部の發達を見出すことから始まると云つてゐるが、これは少年の場合にもあてはまる。エリスによると、性衝動は初め、半意識的夢想（セミコンシアスリベリース）の形で現れるものだと云ふ。が、これは直ちに、社會的抑壓や身を護る本能などによつて、精神軋轢の種となる。たとへ固陋な性敎育などはあつても、寧ろ山本宣治氏が斷定したやうに「威嚇的性敎育」でしかない狀態だ。（エリス「羞恥心の發達」參照）——そして、この時、家族ロマンスが精神軋轢に新しい油を注ぐのである。

精神分析學の發見したエディポス・コムプレクス（異性親への愛慕・同性親への挑戰或ひは同一化）はここに絕頂に達する。同性親への無意識的な憎惡は、その代償たる外界のあらゆる支配力への反逆心に化して行く。それと同時に、同性親（或ひはその代償——敎育者等）を模型の素材として、自我の上位へ超自我を形成する。それのみでなく悲劇的なこのコムプレクスは、罪障感・劣等感の新しい源泉にさえなる。特に、少女の場合にはこの他、ペニス羨望（ナイド）（去勢コムプレクス）が、やるせない悲觀的感傷になりおはせるであらう。

伸びて行く者の、熾烈な優越慾と、必然的な劣等感との自己葛藤！　エディポス・コムプレクスにつきものの愛憎並存の惱亂！　そして自我が固定して行く爲の自己籠居的內省と、對象リビドーの發達による外界への感情投射！　かういふ入り亂れた精神動向の間に、青年は、再びうちのめされるやうな家族コムプレクスを體驗する。それは、近親姦のタブーにめざめて、愛の對象が、異性親から他の異性へ移ることである。しかも、このやうな馴れぬ對象愛は、羞恥心や恐怖につきまとはれて屢々空中樓閣のはかなさに逢着するであらう。そこで、F・ウォッテルスも述べてゐるが、彼等青年子女の相次ぐ失戀後のリビドーは絕えず去就に迷つて、自我內へ退却しナルチスムスとなる。（本誌「戀愛心理研究號」參照）

實際、家族といふものは觀念形態の製造元だとライヒが明言した通り、家族から離れかけた青年期のイデオロギーは、製造元によつて、最後的な加工を受ける譯である。

キリストも、シェイクスピアも、マルクスもニーチェもトルストイもゲーテもみな、この加工を深く受けて、一生を、青年心理で生きたのだ。それが又、人類の歷史を照らしたのだ。

畢竟、青年期は、リビドー試錬の時ではあるまいか、あらゆる世界へ走るリビドーの種子が、こゝに芽ぐむ時ではあるまいか。それなのに。現代青年諸君、このやうな青年心理を古めかしいものとして悉くナンセンス視するであらう諸君は、一體何者なのかそして何が君達を無意識で（只管衝動的に）踊らせてゐるのだらうか？

現代の青年心理は崩壞した！　私は、自分の生活上、毎日、あらゆる階級の人々に接してゐるが、現代の青年には眉を顰めることが多い。喫茶店で所謂明朗と官能的陶醉との雰圍氣にひたつたまゝ一日ポカンと煙草をふかしてゐる學生の大群。交尾期に入つた動物のやうに眼を煌かせて迷つてゐる青年の濁流。スポーツに全心魂を投げ込んで飛び跳ねてゐる躁狂的な若さの渦！　見えぬ鎖につながれてゐるかのやうに（感情の總てを喪失して）ビル街を行進して行く青年サラリーマンの暗い行列！

そして彼等の精神內容は？――さう訊かされると、私は答えねばなるまい。彼等に「精神」なんて高さうなものが

あるもんですか!? 一度話し合つて御覧なさい。笑ひですよ。うつろですよ。條件反射乃至無條件反射ですよ。不安をさえ抑壓してゐる不安ですよ。本能ですよ。チンパンジーですよ。かげろうですよ。

私は一擧に、この禍根をつかう。何が現代青年諸君の「心」を殺戮したのだ!?

第一に、私は家族制度の崩壞を擧げる。實際資本主義社會は、家庭愛を口に唱へながら、あらゆる家庭を粉碎した。(私が今更喋々と語るまでもない) 親は子に、子は親兄弟に別れを告げねばならぬ。餓の爲に! 働く爲に!

そして、この副産物として、親の尊嚴は失墜し、親へのリビドーは早くたちきられる。

そこで、子は、まづ、イデオロギーの製造元を奪はれ、親(及び教育者)の哀れな姿から眼をそらして 超自我の模型を見失う。子のリビドー、子の無意識的良心(超自我)はどこへ行く? 同性親への攻撃慾さえ感じられない子の正しかるべき社會性は益々無氣力ないぢけたものになる。そして下等動物のやうに、僅かな反射や模倣で社會の渦にまき込まれて行く。纏綿するべき對象の影の薄すさに、愛などが育つ譯もない。低い幼兒的自己愛(ナルチスムス)だけがいやらしい焰のやうに心でくすぶつて行く。

一方、本能中の性本能だけは、リビドー方向の唯一の道になるだらう。が、併し、自己保存本能が脅かされてゐるところに、(すくなくとも人間の場合には) 明るい希望の道があり得る譯はない。私はこんな話をきかされてゐる。「此の頃結婚の口が五萬二千とあつてクサリさ。結婚なんてをかアしくッて。だつて職業でしよ? あたし、まだ就職する必要を認めないからネ。アラ、戀愛はするワヨ。昨日ネ、ロバート・テーラーみたいな男と知り合つて、ナカナカ宜きじやつたよ」と、さう云ふ令孃。「僕、來年死ぬんです。だつて來年、 ですもん。滿洲に決つてんですよ。だから、來年死ぬのに何も勉强する必要なんてないじやないですか」とさういつてノラクラと身をもちくずして行く青年。(こんな連中ばかりである) 現代青年に、仕事や研學ばかりでなく建設的な戀愛さえ出來ないのも當然かも知れないのだ。しかも、現下の中等以上の學校では、眞面目な向學心を恐れて、性本能にリビドーをゆだねるブルヂョア自由のみを默認してゐる傾きがあるらしい。(さうしなければ學校營業が立つて行かぬのかも知れぬし、

就職率やファッショ社會には學問は無用の「危險物」になつたのであらう」からなると、昇華もクソもあつたものではない。

そして對象愛のなきに等しい青年子女に、まして感傷愛などがあらうか。彼等の不安や空虛感は、家族ロマンスよりは、收入と支出、小遣帳の赤字（卽ち自己保存本能と性本能との違和）及び、將來の希望ない自我の道（分析學の公式によれば、願望より轉化した不安）から生じる。が、これとても、その空虛感を充す方向は歪曲されてゐる。今迄の青年心理は、ユング的に云へば、勿論、所謂內向型の特徵を現してゐたのに、現代青年の方向は、內向型に趣(おもむ)いては第一に、第三期的社會狀勢に適應しない爲（性格及生活上の破產に蹴落される爲）外向型の形式をとる。自己愛のみをまとつた者の外向型！　それはすさまじき限りである。

現代青年諸君！　君等は朗らかださうである。君等には超自我がない。素直な對象愛がない。否々、眞實の意味の自我――從つて自己愛もないに違ひない。諧謔者は。自分の「眞面目な世界」を自己虐待的に破壞するから、內心は非常に哀しい自己愛者(ナルチスト)なのだと謂はれてゐる。その通り、君等は朗らかを强ひられた諧謔者として、總てを無意味(ナンセンス)にして行く。權威も文化も愛も進歩も、そして自我も、君達は笑ひ飛ばすのだ。その後に君達に殘つてゐるのは、執拗に生きやうとする肉體だけではないか。單なるアミーバの巢窟(デン)だけではないか。

一人の若いサラリマンが云つた。「僕はネ、モウ一生の設計が決つてるんです。一年に平均二圓づゝ昇給して行くから五十になると八十四圓の月給取になる事になつてるんです。八十四圓あればお葬式が出せるでせうね。それさへ決つてれば安心なもんです。このクリスマスにやア、うんと飮みませうよ。僕、とてもエロな店(とこ)知つてるから……」

强制された外向型！　この問題は別の機會に詳說したいと思ふが、この執筆中（十一月廿八日）に、胸をつかれた社會記事があるから引例しておかう。十七の一少女が日給八十錢で就職したが、しとやかな彼女は直ぐ解雇されてしまつた。人事課長に「君は朗かじやないから」と言渡されて。彼女は十何圓かの僅かな退職金を貰つてボンヤリ家へ歸る途中、龜戶驛のホームから飛降りて轢死を圖つたのである。その傍に殘された便箋に「朗か」と唯二字、書き殘

して――。

現代青年諸君！　君等は、この現代青年になれなかつた彼女に較べて、果して幸福だと云ひ切れるだらうか。

現代青年諸君！　君達の青年期は一體どこへ行つたのだ？――さう、君達の思春期心理は今や崩壊してしまつたのだ。だから、君達は子供でも青年でも大人でも、何者でもないのだ。せい〴〵肉體の花だけなのだ。君達は倖せか？

現代青年諸君！　私は以上で「心」を虐殺した禍根の大要を告げたが、勿論、私は家族制度を讃えて昔に歸れと云ふものでもない。又、性本能の疾風を卑しめるものでもない。超自我を押し付けるものでもない。たゞ、私は、これによつて禍根の影を告げるのみである。――一九三六・一一・二八夜――



フロイドと未來（トマス・マン）

ヰイン醫療心理學協會に於ける、
ジクムント・フロイド生誕第八十回祝賀講演、

大槻憲二
平塚義角　共譯

紳士淑女諸君！ 何故に一詩人をして偉大な學者の名譽のための祝辭を述べしむるに適すると認める事になつたのであらうか？ 又、詩人にかゝる役割を委ねて可なりと信ずる人々の良心を問題にするならば、一つの學識ある團體が、私の場合、一つの學會が、その師の榮えある祝賀講演を擧行するのに、その講師として同じ專門家を、卽ち科學の人を推薦せずに、詩人を、卽ち人間靈（Menschengeist）を推薦するといふ事が如何にして是認せられるのであらうか？ 人間靈は、知識とか、分析とか、理解、認識の方面ではなく、自由意志、綜合、素朴な行動と創造をなすべきもので、精々有益なる認識の對象とこそなれ、性格的に、運命的に、認識の主體には適せぬのである。この事は、詩人が藝術家として、然かも精神的藝術家として、一般に精神的祝賀の擧行には、祝祭には、一層適任であり、性格的に、認識者、科學者よりは根が祝祭向きに出來てゐるといふ理由の下に考へられた事だらうか？――これはまア御尤な考へであつて、確かに詩人は人生の祝祭には通じてゐる、のみならず祝祭としての人生の事に通曉してゐる。――そこで今晩の精神的な頌德音樂に於いて一つの主題的役割を演ずるやうに決定せられてゐるのであらうところの一つ

のモティーフをこの祝祭としての人生に觸れさせて、前座としての微かな役割を果すことにしよう。——然し乍らこの會の祝祭的意味は、主催者の意圖としては、寧ろ客觀と主觀の、また認識の對象と認識者との莊嚴な、今迄にない會合にしたいと云ふに存するのであらう、——認識者、夢の解釋者が、幻想的認識の祝祭的對象となるといふ、土星的逆轉のやうなことの中に存するのであらう。——私はこの考へに對しても、別に異存はないのである。その然る理由は、この思想の中にも既に一つのモティーフが鳴り響いてゐて、それは意味深き交響樂的未來を暗示してゐるからである。このモティーフはもつと高らかに、もつと理解し易く再來するであらう。何となれば、私の思ひ違ひでなければ、主觀と客觀との合一、その相互流入、その相互同一化、及び世界と自我の、運命と性格の、現象と作爲の神祕な統合への理解、それ故に魂の所作としての現實の神祕への洞察、さう言つたものは、精神分析學研究の始めであり終りであるだらうから。

確かに、一詩人を、天才的な學者の推賞講演者に推擧するに決定したとすれば、それはあらゆる場合に於いて双方に關して何事かを言ひ盡してゐるのである。それは双方に對してその特徴を明かにしてゐるのだ。被祝賀者と詩の世界、文學の世界との特殊な關係も、詩人、作家と認識界（被祝賀者はその創造者、大家として認められてゐる）との獨特な關係もそれによつて推論出來る。そしてこの交互關係、この相互接近に於いて、更に特殊な、注目すべき事は、この事が双方から久しい間意識せられず、「無意識」の中に止つてゐたといふ事である。そしてこの無意識の魂の領域を人類のために探究し、闡明し、捕捉することこそ、この認識的な人間（ガイスト）の本來の使命であつたのである。文學と精神分析の近親關係は、双方共に相當前から意識されて來たのである。だが今日の祝祭の意味は、少くとも私の見る所、私の感ずる所に於いては、この兩分野の公然の會合、この意識の宣揚、この意識に對する示威的公表にあると思はれる。

私は只今、この相互關係、この深き共感は、双方共に久しい間意識せられずにゐたと述べた。確かに我々の今讃へつゝあるこの魂（ガイスト）、ジグムント・フロイドが——治療學としての、また一般的研究方法としての精神分析學の創始者が

――その認識の困難な道を、全く一人で、全く獨自の立場から、單に醫者として、自然科學者として進み、彼を慰め、彼を力づけてくれる材料が、偉大な文獻の中に既に存在してゐるといふ事を全く知らなかつたといふ事は、人の知る所である。彼はニイチェがフロイド的な意見を電光的に先言してゐる事も知らず、ノヴァーリスの浪漫的・生物學的な夢想と暗示とが精神分析的な考へ方に屢々驚くほど接近してゐたといふ事も知らず、またキェルケガールの心理學的極端へのキリスト教的勇氣が、彼に深く、有效に暗示を與へたでもあらうに、それも知ることなく、そしてまた、轉向と救濟に向つて努力してゐる本能哲學の憂欝な交響樂家ショーペンハウエルをも知らなかつたのである。……恐らくさうであつたに違ひない。彼は恐らくそれ等の直感的な先人の言を知る事なく、最も獨自の方法で、その見界を組織的に獲得したのに違ひなかつた。彼の認識のあの洞察力は、かゝる無援孤立によつて高められたのであらう。故に大體、彼の嚴肅な姿から、ニイチェの述べてゐるあの孤獨を引離して考へる事は出來ない。――ニイチェがその魅力ある論文『禁慾的理想とは何を意味するか』の中で述べてゐるあの孤獨である。ニイチェがショーペンハウエルは「眞の哲學者だ」、「眞に自分自身に信頼した魂、不動の眼差しを持ち、自分自身に對する勇氣を持ち、孤立する事が出來て、前人をも長上の注意をも眼中に置かぬ騎士の如き男」と述べてゐるその孤獨である。――フロイドの精神的英姿が私の眼界に入り來て以來、私は常にこの無意識の心理學者を、この「騎士の如き男」、死と惡魔の間に生きるこの騎士の面影の中に想ひ浮べる習はしになつてゐるのである

だが、それは後の事であつた。詩人的＝作家的衝動一般が、殊に私の性格がこの科學と近似してゐる爲めに、この事は當然もつと早く期待せられたであらうが、實は遙か後に起つたのである。兩者がかく近似してゐるのは、次の二傾向のためである。第一は、眞理に對する愛、眞理愛、眞理の美と若さに對する感受性と受容性とである。それは大體心理的な感受性と明瞭さとして表はれ、遂には眞理といふ概念さへ殆んど心理的な知覺と認識との中に沒するに至つた程である。第二は病氣への感覺である。健康によつて病氣を評量して病氣と健康との間に一種の近似性のあることへの感得である。病氣には創造的な意義があるとの體驗である。

さてこの眞理愛——心理學としての眞理に對するこの情熱的に道德的なこの愛——に關して言へば、それはニイチェの高尙な學派から發してゐる。ニイチェの眼中に於ては、眞理とは心理的眞理の事であり、認識者とは心理學者の謂であつた。彼の眞理愛の衿持、高貴と知的純粹さに關する彼の考へ、また彼の知識への勇氣、彼の知識の憂鬱、彼の自己認識、自己苛責、——これ等は凡て心理學的な思想であり、心理學的性格を持つてゐる。更に私はニイチェのあの教育家的な强化と深化を忘れる事が出來ない。その强化と深化とは彼の特殊な天稟が、その心理學的情熱の體驗によつて經驗した事なのである。「認識の嫌惡」といふ言葉が『トーニオ・クレーゲル(一)』の中にある。それは正しくニイチェから受けた印象によるのであつて、クレーゲルの青年期の憂欝は、ニイチェの獨自な性格に於けるハムレット的な物に影響されてゐる。——ニイチェの獨自な性格とは、本來は知識的に生れついてはゐないけれども、知識を求めてやまぬ性格である。——私はこの小說で、青年期の苦痛と憂欝を、及びそれが成熟へ向ふ年齡から、より晴朗な、より平靜な年齡へと移り行く樣を描いた。併し眞理と知識を心理學的に理解し、それを心理學と同一視し、心理學的眞理意慾を眞理一般への意慾として感じ、心理學を最も獨自な大胆な意味に於ける眞理として感じようとするこの傾向——この傾向は恐らく自然主義的と稱せられ、文學の自然主義によつて教育せられたものに違ひないが、この傾向が私の中に殘つてゐて、それが「精神分析學」と稱する精神の自然科學へ、私の眼を開かす豫備條件となつてゐたのである。

第二は病氣——もつと詳しく言へば認識手段としての病氣——への感覺であると私は述べた。この感覺も亦ニイチェから由來してゐる事を明かにすることが出來るだらう。彼は如何に多くを病氣のお蔭で得たかを知つてゐたやうである。また彼は、病氣の經驗無くしてはより深い知は決して得られないと言ふ事、より高い健康は凡て病氣の經驗を經ねば獲得し得ないと云ふ事を、書中凡ゆる所で敎へてゐる樣に見える。それ故にこの感覺も亦、ニイチェの體驗に歸しても良いのであるが、實はこの感覺は、精神的人間一般、就中詩人の本質と、それどころか、凡ゆる人間と人間性——詩人はその極端に行つた表現に過ぎない——の本質と固く結びついてゐるものなのだ。ヴィクトール・ユーゴ

ーは言つてゐる。「人間性の何たるかは病弱に依つて明かにされる」と。この言葉は、凡ての高い人間性と文化とは氣持の纎細なものであり、病氣の世界に通曉してゐるものだといふ事を、昻然たる公明さを以て告白してゐるのだ。人間は重苦しい緊張と甚だしい困難とのために、惱めるが故に「病める動物」と稱せられてゐる。この緊張と困難のために、自然と精神、動物と天使の中間に地位せしめられて來た。人間性の神秘がこの側面からして、最も深く突込んで研究せられたといふ事、そして病氣卽ち神經症が、人類への認識手段として、第一位を示したといふ事は、何と不思議なことであらう？

詩人は恐らくこれを不思議とするに最も遲かつたものであらう。詩人が一般に又個人的に强い感受性を持つてゐるにも拘らず、彼の存在が精神分析的研究、フロイドの畢生の事業に對して共鳴的な關係にあるといふ事を認めたのが非常に遲かつたのは、寧ろ彼を呆れさせる事であらう。彼がそれを認めた時は、この學說は最早やとうから、單なる治療方法――毀譽褒貶はまちまちながら――としてのみ問題にされず、寧ろ、とうに醫學的領域を踏み越えて了つて、一つの世界運動となり、精神と科學の凡ゆる可能な分野がこの學說によつて影響されてゐたのである。文學研究、藝術研究、宗敎史、有史以前史、神話學、民俗學、敎育學、その他何でもが影響された。――それは取りも直さず斯學の達人等の革新的な應用的な努力のお蔭である。彼等はその精神病學的・醫學的核心を中心として、この輪光の一般的な效果を及ぼしたのであつた。のみならず私も精神分析へ入つて來たんだなど丶隨分云はれたやうである。が、精神分析が私の方へ向つて來たのである。斯學の信奉者や代表者の各人が、『小フリーデマン氏』から『ヴェニスの死人』、『魔の山』そしてヨーゼフ物語に至るまで、私の諸作に對して友情的な興味を示したので、それによつて、私は自分が斯學と何か關係があるんだなと言ふ事を理解し、また私の作に幾分無意識的な深みがあるといふ事を知つた。また如何にも斯學に相應しく、潜在的な「前意識的」な共感を私に意識させた。そして私は精神分析的文獻を閲讀して、その自然科學的正確さを持つた思考、言語の表現の中に、私の嘗ての精神的經驗と根本的に近いものを幾多再認識したのである。

己れを語りすぎるやうだが、紳士淑女諸君、もう少し我慢して頂きたい。そして私がフロイドについて語らずに、自分の事をのみ話すやうに見えても、悪く思はないで頂きたい。フロイドに就いて話す自信が私には無いのである。私なぞに、彼に關して何で新しい話などが出來る筈があらう。私が自分に就いて話す時、卽ち、私が青年時代にフロイドによる認識から決定的に受けた敎育的印象によつて、如何に深く如何に獨自に影響をされたかを述べる時こそ、私は彼の名譽のために話してゐることになるのである。一度ならず私は思ひ出や告白の中で、あの身震ひする樣な、そして奇妙に陶醉さすと同時に敎育的な、例の混合した經驗を報告した。その經驗とは、若かりし我がショーペンハウエルの哲學を知つた事を意味するのであつて、後に私はブッデンブロォク家といふ物語の中に、その一記念碑を立てたのである。何物にも恐れぬ知識への勇氣が——その同じ勇氣が分析的深層心理學の倫理性を完成したのであるが——自然科學的に旣に强く、武裝せる形而上學の厭世主義に陷つてゐた私に、まづ第一に向つて來たのである。この形而上學は、數世紀來の信仰に對して盲滅法な革命をなして、精神や理性よりも本能の上位にある事を敎へた。この形而上學は、意志を、世界や、人間や、その他あらゆる他の造物の、核心であり、本源であると認め、知性を第二義的なもの、偶然的なもの、意志の奴隷として、弱い光として認めた。だがそれは、現代の反精神的な學說を結果した所のあの反人道的惡意からなされたのではない。ではなくて、理想主義で理想主義を制せんとした一時代の、嚴格な眞理愛からなされたのである。十九世紀は、嘘をさへ、生活の嘘をさへも不可缺のものとして、イプセンを通じて承認しようとした程眞實であつた。——そしてこの嘘が、惱ましい厭世主義や苦い反逆的精神から、卽ち精神の側から是認せられるのか、それとも精神や眞理に對する憎惡からされるのかは、非常な相違である、といふ事は充分に分るであらう。今日では、だが、この相違は、誰にでもはつきりしてゐる譯ではない。

さて、無意識の心理學者フロイドは、ショーペンハウエルやイプセンの世紀の嫡出子である。彼はその世紀の眞只中から躍り出たのである。彼の革命は、その內容に於いて、またその氣持に於いて、ショーペンハウエルのそれと、如何に似寄つてゐることであらう！　無意識が、エスが、人間の精神生活の中で演じてゐるあの怖ろしい役割をフロ

イドが發見して、意識と精神生活を同一視してゐる古典的な心理學に對してなした、そして現になしつゝあるあの叛逆は、恰度ショーペンハウエルの意志哲學が、理性や精神を信奉する凡ゆる哲學に對してなした叛逆と同じ力を持つてゐる。本當に、『意志及び表象としての世界』を嘗て愛好した人は、今やフロイドの『精神分析學入門新講義』の一つである「心的人格の分裂」といふ驚くべき論文を見て、そこに心の故鄕を見出した感を懷くであらう。そこには無意識心理の世界がある。それはエスといふ言葉で言ひ現はされる。だがこの同じ言葉を、ショーペンハヴエルも彼の盲目的な意志世界のために、同樣に正當に、同樣に激しく、同樣に醫師的な冷靜な知的興味の强調を以て使用し得たであらう。フロイドは言ふ。エスの領域は「我々の性格の暗い、近づき難い部分である。それに關する我々の僅かの知識は夢の仕事や神經症的症候の硏究によつて得たのである」と。彼はそれをカオス(渾沌)として、幾多の亢奮の沸き立つてゐる鍋の如きものだと云つてゐる。彼は言ふ、「エス」は謂はゞ結局、肉的なものに向つて門戶を開いてゐて、その肉的なものに於いて衝動の種々の要求を取上げる。——だが如何なる根據に於いてかは分らない。そしてエスに取上げられた衝動は、そこで心理的表現を見出す。この衝動のために、エスはエネルギーで充滿してゐる。だがエスは有機的組織を持つてゐない。何等の綜合的意志を齎して居らぬ。たゞ快不快原則を嚴守して本能の要求に滿足を與へようと努力するだけである。そこには論理的な思考法則は少しも通用せず、まして矛盾の命題などは通用しない。「反對の活動が並び存在して、交互に止揚したり、相殺したりする事がない。精々彼等は經濟的制限に支配されて、エネルギーの消失を防ぐため、妥協を結ぶのである……」と。

紳士淑女諸君、諸君も御承知のやうに、この狀態は、我々の現代史的經驗によれば、自我そのもの、全體的集團我にもあてはまるのである。何となれば、無意識を崇拜し、只生活を促進させる唯一の「動力(デューナミック)」を讚美し、原始的なもの、非合理的なものを讚美するために、道德的な疾患が發生したためである。——無意識、エスは、原始的で非合理的であり、純粹に動力的(デューナミック)なものであるから、エスは價値評價を知らず、善も、惡も、卽ち道德を知らない。加之、時間を、時間の經過を知らず、また時間の經るにつれて、精神的事象が變化するものであるといふ事を知らない。フロ

イドは言つてゐる。「幾多の願望の活動が、エスの領域から一歩も踏み出すことなく、また印象も抑壓されてエスの中に押込められたまゝ死滅する事なく潜在してゐて、數十年間も經つてから始めて、恰も新事件でゞもあるかの如く活動する。それ等は分析的仕事によつて意識に持ち來されて始めて、過去の事件である事が認められ、從つて價値を失ひ、エネルギー纒綿もそこから引揚げられるのだ」と。そして分析の治療的處置はこれに基いてゐるのだとフロイドは附け加へてゐる。——我々は以上によつて、分析的深層心理學と自我とは當然不和であらねばならぬといふ事を諒解する。自我は無意識の宗教性に陶醉して、地獄的な動力性(デモーニッシュ)の狀態にさへも陷つてゐるからだ。かゝる自我が分析などに就いては少しも知らうとはせず、フロイドの名前が面前で叫ばれるのを快しとせぬ事は、餘りに明かであり、その理由も亦明瞭である。

さて自我はそれ自身、そして一般的にどういふ物であるかと云ふと、それは殆んど感動的で、眞に文字通り氣遣はしげである。それは「エス」の、小さな、突出して、光を浴びて、見番をしてゐる部分である。——恰度ヨーロッパが大アジア洲の小さな、覺醒した地方であるやうに、自我は「エスの外界に近い部分で、ために外界の影響によつて變化してゐる。そして刺戟を受容しエスを保護するやうに設備された部分である。譬へて言へば、生きた實質を包んでゐる樹皮層の樣なものだ。」——これは直感的な植物學的譬喩である。フロイドは一般に非常に直感的な文章を書いてゐる。彼はショーペンハウエルの樣に、思想の藝術家である。そして彼の樣にヨーロッパ的な文筆家である。——自我と外界との關係はフロイドによつて決定的なものとなつた。自我はエスの側にあつて、——その安全のために、外界の代辯者の役割を務めてゐる。何となればこの力强い外界を顧慮しないと、エスは、本能充足への盲目的な活動のために、破滅に至るかも知れないから。自我は外界を觀察し、記憶しておいて、客觀的實在と、內的な活動源泉の附屬物とを忠實に區別しようと試みる。自我はエスの指令に從つて、發動性と行動の原動力を支配するが欲望と行爲の間に思考といふ延期間を挿入して、その間經驗に相談する。そして無意識の中で無制限に跋扈してゐる快不快原則に對してある調整的な優越權を持つてゐて、この快不快原則を現實原則によつて矯正する。だが、それにも拘ら

ず、自我は何と弱いことか！ それは無意識と外界と、フロイドの所謂「超自我」即ち良心との間に狹められて、か神なり經質な、オド〳〵した生存を續けてゐる。それ自身の動力性（デューナミーク）は疲勞し切つた狀態にある。で、自我はエスからエネルギーを借りて、合同してその目的を遂行せねばならない。自我は騎士として、また無意識は馬として看做しても良いであらう。だが、自我は反對に非常に屢々無意識に騎廻される。そして我々は、自我がこの幾分非合法的なやり方で、場合によつては最も遠くまで行く事があると言ふ事を寧ろ附言したい。この事は併しフロイドは、合理的道德性のために、云ふのを差控へたのであつた。

然しフロイドの云ふこのエスと自我との關係は――ショーペンハウエルの云ふ「意志」と「知力」との關係にそつくりではないか。――ショーペンハウエルの形而上學を心理學に飜譯したものではないか？ ショーペンハウエルから形而上學的感激を感じ、ニイチェに於いて心理學の苦しき刺戟を味つた以上は、誰だつてこの問を發せずにはゐまい。また人はショーペンハウエルやニイチェに鼓舞せられて、精神分析の領域を見廻はした時、親しみと再會の感情を如何にも深く感じねばなるまい。

人はまた精神分析的領域をこの樣に見廻はして、嘗ての印象を新たにした。そしてこの嘗ての印象の上に最も力强く最も獨特に、彼の精神分析的知識は働いたのである。フロイドを研究して後、彼の探究の光に輝らしてショーペンハウエルの大論文『個々人の運命に於ける意圖らしきものに就いて』の如き考察を再讀すると、如何に異つた感を受けるだらう！ 紳士淑女諸君、私は此處でフロイドの自然科學的世界とショーペンハウエルの哲學的世界との最も內的な最も隱密な接觸點を示さうとする。深い心と鋭い心とへの驚嘆といふ論文がこの接觸點を形造つてゐる。ショーペンハウエルがこの中で展開してゐる神祕な思想は、約言すればかうである。夢に於いては我々自身の意志は、峻嚴に客觀的な運命として現れるが、それを氣附いてゐない。そして夢の中に凡ての事件は、我々自身から起り、しかも我々の各自がその夢の秘かなる舞臺監督である。それと同樣にこの現實に於いても――現實とは、唯一の實在たる意志それ自身が我々總てと共に夢みてゐる所の大きな夢なのだが――我々の運命は我々の最も深いもの、我々の意志の

所産であるかも知れないのだ。故に我々に對して起る樣に見える事件は、實は我々自身が企てゝゐるのだ、といふのである。——紳士淑女諸君、私の概說は非常に不充分であつたが、實はこの論文は最も力強い暗示力と、强い飛躍の廣さを具へたものである。が、ショーペンハウエルの利用してゐるこの夢の心理學は、所謂分析的な性格を持つてゐるばかりでなく、性的な趣旨をも缺いてはゐない。——それ故に、この思想全體は、深層心理學的思想への先鞭であり、その哲學的先驅であつて、實に驚嘆に價する。何故なれば、最初の言を繰返すならば、自我と世界を、實在と現象を、一致させるこの神祕な思想の中に、また一見客觀體と見えるものや偶然的事件と見えるものを精神の意圖として洞察する事の中に、私は分析學說の最も根本的な核心を認めると信ずるからである。

こゝで私の心に思ひ浮ぶのは、この學派の慧敏な、だが幾分忘恩的な末裔C・G・ユングの文章である。彼はその意義あるチベット過去帳概說に於いて、次の樣に言ひ現はしてゐる。「私がそれを如何に造るかといふ事を觀察する事よりも、それが私に如何に振り掛つて來るかを見る方が、遙かに直接で、顯著で、印象的で、そしてそれ故に納得が行き易いのである。」この大膽な狂暴な文章は、今日なほ或る一定の心理學派に於いて、ショーペンハウエルをさへも怖ろしき橫車押しであり「途方もない」思想冐險であると感じた事柄が、何たる平氣さを以て直觀せられてゐるかを實に明瞭に示してゐる。「ふりかゝる事」は一つの「作爲」であると暴露してゐるこの文章は、フロイドの思想なくして考へ得られるだらうか? 決して、決して考へ得られない。この文章は悉くフロイドに負ふてゐる。この文章は幾多の豫想の上に立つてゐるので、これを理解しこれを卒業する事が出來るためには、言ひ違ひや書き間違ひや、行り損ひの全分野、病氣への逃込み、自己懲罰慾、不幸勃發の心理、簡言すれば、無意識の魔力についての精神分析の成果や暴露を悉く理解しなくてはならない。だが同樣に、この簡潔な文章は、心理學的假說をもひつくるめて、ショーペンハウエル及びその不正確な、だが夢の如く大膽な開拓的な思索なくしては不可能であるだらう。——紳士淑女諸君、恐らく今日はフロイドに對して祝祭的な方法で少しく抗議すべき時であらう。何となれば、フロイドは哲學を殊更に高くは尊敬してゐないからである。自然科學者の正確癖は、哲學の中に科學を見るといふ事を彼に許

さなかつたのである。彼は哲學を非難して言ふ。哲學は天衣無縫の世界像を彷彿せしめる事が出來るんだと信じ込み、論理的な方法による認識の價値を高く評價して、直觀を知識の源泉だと信じ、また萬有神論的傾向に全く捉はれつゝ、言語の魅力を信じ、思考によつて現實に影響を與へ得ると確信してゐると。しかしこれは實際、哲學の自惚れだらうか？　一體世界は、思考及び思考の魔術的な運搬者たる言語以外の何物によつて變化せられたか？　私はかう信じてゐる。哲學は實際、自然科學に先んじ、またその上位に置かれてゐるもので、凡ゆる方法や正確さは、哲學の精神史的な意志に奉仕してゐるのであると。結局、「それは證明せられるべかりしなり」である。何等の豫想（假定）がないと云ふことは、科學にとつては一つの儼然たる道德的事實であり、またそれであるべきだらう。併し心理的に見るとこの豫想（假定）がないと云ふことはフロイドが幻想と名づけた所のものであらう。百尺竿頭更に一歩を進むれば、かう言へるであらう。科學は、哲學によつて委任せられ、指圖せられざる發見は、未だ嘗て一つもなさなかつたのだと。

　序でにもうしばらく、ユングの思想を順序として述べさしてもらひたい。彼は特に好んで――かの序言に於いても同樣に――分析學の研究結果を應用して、西歐的な思考と、東洋的な秘敎との間に悟性の橋渡しをしてゐる。未だ何人も、彼の如く鋭くショーペンハウエル＝フロイド的な認識を約言して「凡ゆる所與（運命）の贈與者は我々自身の中に住んでゐる――この眞理は非常に明白であるにも拘らず、最大の事物に於いても最小の事物に於いても未だ知られてゐなかつた。それを知る事が非常に屢々實に必要であり、加之、不可缺であつただらうけれども。」と言つた者はゐない。彼の考へるところでは、世界が魂の本質から「與へられ」たものであることを知るためには、一つの大きな犧牲的な傾向が恐らく必要である。何となれば人間の動物的な本質は、自已を所與（運命）の造出者として感じる事を拒むからであると。東洋が西歐よりも由來動物性の克服に於いて、遙かに强かつた事は眞理である。それ故に東洋の智慧に從へば、神々も亦「所與」に屬してゐて、魂から發生し魂と共に一つとなつてゐる――神々は人間の魂の輝きであり光であるといふ說をきいても、我々は驚く必要はないのである。過去帳の說く所によれば、死人に餞別と

して與へられたといふこの知慧は、西歐的な精神に取つては一つの逆說であつて、彼の論理に矛盾してゐる。何故となれば、西歐の論理は主觀と客觀とを分つてゐて、客觀を主觀の中に移入させる事も、或ひは主觀を客觀から發せしめる事も拒んでゐるからである。たとひヨーロッパの神秘說はかゝる出來心を知つてゐて、アンヂェルス・ジレジウス（Angelus Silesius）の如きも

我は知る、我無くして神は一瞬も生存し得ず、
我滅する時、神は窮乏して魂を失はねばならぬ事を。

と言つてはゐるが、併し全體として神が純粹の所與、絕對の實在ではなくして、魂と一つに結びついてゐるといふ心理的な解釋、神性へのかゝる考へ方は、西歐的な信仰心には我慢の出來ない事であらう。――かゝる考へ方は、それによつて神を冒瀆するであらう。併しながら信仰心は拘束（Gebundenheit）だと言はれてゐる。そして創世紀には神と人間との同盟、結合（Bund）が述べられてゐる。この心理を私は神話的な物語『ヨーゼフとその兄弟達』の中で現はさうと試みた。さうだ。こゝで私自身の作品に話が觸れる事を許して頂きたい。――創作的文學と精神分析的領域とが、祝祭的に會合してゐるのだから、さう云ふ場合に自分の作に言及させて貰つても恐らく當然であらう。私のこの物語の中には、東洋的神秘思想から來てゐると學者が云つてゐる所と正に同じ心理學的神學――「このアブラムは謂はゞ神の父である」と云ふ――が支配してゐる。といふ事は十分注意に價することである。――そしてこれは單に私のためにばかりではないのである。アブラムは神を看取し、案出したのだ。彼が神のものだとした所の力強き特性は、恐らく神が始めから持つてゐたところであらう。アブラムは神の生みの親ではないが、併し或る意味では生みの親でもある。何故かと言へば、彼は神を認識し、思考に依つてそれを具體化したから。神の力強き特性――それ故に神自身――はアブラムには關係なく、事實上の所與であるが、同時にそれは彼の中のものでもあり彼からのものでもある。彼自身の魂の力は、或る瞬間には神の特性と殆んど區別がつかないで、それを組合ひ、認識しつゝ一つに融合してゐる。そしてこれこそ主が後にアブラムと結ぶ所の同盟の起源である。この同盟は内的事實を表現した活動

に外ならないのだ。この同盟は、双方の幸福といふ最後目的のために、双方の利害關係に於いて結ばれたものとして描かれてゐる。人間の貧窮と神の貧窮とがこの同盟の中に於いて組合はさつてゐるのだが、その組合はさり方は、孰れの側から最初かゝる共同作用に向つて動き出したのか、神の側からか人間の側からかといふ事は言明出來ないやうな風にである。併し乍らいづれにしても、この同盟達成に於いて、神が幸福になる事と、人間が幸福になる事とは一つの二重行程を現はしてゐる。それ故に固く結び着いてゐるのだといふ事は斷言される。さもなくして、何のために同盟など結ぶ必要が有るだらう？

紳士淑女諸君、魂が所與の贈與者であるといふこの思想が、この物語の中で一つのイロニッシュな段階を踏んだ事を私は知つてゐる。しかしこの段階が東洋的な智慧か、分析的な認識かは、この思想自身は知らないのである。しかしこの思はざる一致は――後に至つて始めてその一致は氣附かれたのであるが、人の耳目をひく物を持つてゐる。私はそれを影響と名づくべきか？　それは寧ろ共感（シンパチー）である。――或る精神的な近附きである。この近附きは私より精神分析の方が正當にも早くから知つてゐた。精神分析が早くから氣づいてゐたこの精神的近附きのために、かの文學的注目が惹起されたのであつて、私は早くよりそれを精神分析のお蔭であると感謝せずにはゐられなかつた。その最後のものは『イマゴー』誌の拔刷の送附であつた。それはフロイド派の或るヰインの學者の勞作で、『古代の傳記術の心理學に就いて』といふのがその表題であつた。それは全く無意乾燥な表題であつて、表題といふものが一般に內容を顯著にするレッテルとして役立つものであるのに、こゝには顯著にするものが殆んど示されてゐない。著者はその論文中で言つてゐる、民話や傳說から供給され決定されてゐる古代の、素朴な生活描寫、即ち藝術家の傳記や、固定的な樣式的＝形式的な特徵、事件、及び傳承的な種類の傳記の公式傳統を、それ等の英雄たちの物語の中に採用して、それによつて、謂はゞその傳記を正當と認めさせたのである。それによつてその傳記を眞正で、正しいとして、――「それが常に如何にあつたか」また「それが如何に描かれて存するか」といふ意味に於いて正しいとして――證明しようとしたのであると。何故かと言へば、人間には再認識が大切であるからである。彼は古きものを新らしき物

の中に、類型を個別の中に再發見したいのだらう。そしてこゝにこそ生活の凡ゆる信賴性が横はつてゐるのだ。生活は全く新らしく、一回的に、個別的に現はれてゐるので、その中に昔馴染みを再發見し得るといふ風に現れて來ないならば、たゞ喫驚し困惑するばかりだらう。——かの論文の問題は併しながら今や次の方向へ向つてゐる。傳說の公式內容である所のものと、藝術家の生活內容である所のものとの間に、卽ち類型と個別との間に境界を鋭く、明確に引くことが出來るかどうかといふのである。——それは提出されると同時に否定される問題である。生活といふものは、事實、形式的な要素と、個別的な要素との混合であり結合であつて、この結合によつてこそ、個人は謂はゞ公式的＝非個人的なものへと向上し得るのである。多くの非個人的なもの、幾多の無意識的同一化、幾多の傳承的＝公式的なものが、藝術家のみならず人間一般の體驗をも決定してゐる。著者は言ふ。「我々の中の多くの人々は今日でも尙ほ傳記的な一つの形式を、卽ち或る地位、或る階級、或る職業の運命を『生活』してゐる……人間の生活形成の自由は、我々が「生きられたる生活」と呼んでゐる所の過去の生活と密接に結びついてゐる事は明白だ。」——そして彼は正確にもヨーゼフ物語を例に引いて（私はそれを喜んだゞけで、驚きはしなかつた）證明して言ふ。この物語の根本動機は、まさしく「生きられたる生活」といふ觀念であり、繼續としての、前人の轍を踏む事としての、同一化としての生活であつて、この同一化は特に、ヨーゼフの師エリーツェルによつて、諧謔的な莊嚴さの中に營まれてゐるのだ。何となれば、時間の揚棄によつて、過去の凡てのエリーツェル達が、彼の中に於いて現在の自我にまで集合して來て、その結果、彼はアブラハムの最年長の下僕であるエリーツェルについて、第一人稱で話してゐるから。ところが彼は實際はなか／＼そんな下僕などではないのだ。

　私は更に附け加へねばならない。この思想の結合は非常に正しい。この文章は、心理學的興味が神話的興味へと移行して行く點を極めて正確に描いてゐる。この文章は、類型的なものは神話的なものであるといふ事、「生きられたる生活」の代りに生きられたる神話とも言へるといふ事を明白にした。が、この生きられたる神話は私の物語の叙事詩的觀念であるのだ。私は小說家として、市民的＝個人的なものから、神話的＝類型的なものへと步を進めて來たの

だ。分析的領域に對する私の親しい關係は、謂はゞその際どい程度にまで踏み込んだのである。神話的興味が精神分析に固有であるのは、恰度、凡ゆる詩人に心理學的興味が固有であるやうなものだ。精神分析が個々人の幼時へと遡つて行く事は、原始へ、神話へと遡つて行く事である。フロイドは自らから告白してゐる。彼が凡ゆる自然科學を、醫學でも精神療法でも、今日まで長い間かゝつて研究して來た事は、結局彼が青年時代に持つてゐた人類史や、宗教道德の起源に對する情熱へと、迂廻し逆轉して歸つて來た事になつたのだと。迂路を經て彼に廻り歸つて來たこの興味は、彼の一生の最高潮時代に『トーテムとタブー』に於いて、非常に大きく突發した。「深層心理學」(Tiefenpsychologie)といふ成語に於いて、「深」といふ語は時間的な意味をも持つてゐる。人間精神の深底は同時に原始時代でもあり、神話が生きてゐて生活の根本規定、根本形式が基礎づけられてゐる時代の源泉的深淵でもある。何故なれば神話は生活の基礎づけであるから。神話は超時間的公式であり、敬虔なる形式であつて、生活は無意識からその特徴を再現しつゝ、この敬虔なる形式の中へと入り込んで行くのだ。神話的＝類型な觀照法の獲得は、小說家の生活にエポックを作るものである事は疑ひの餘地がない。この觀照法の獲得は、その藝術的氣分の獨特の高揚を意味してゐる。認識と形成の新らしき晴朗さを意味してゐる。かゝる晴朗さは普通は晩年まで保留されてゐるものなのだ。何故なれば、人類の生活に於いては、神話的なものは初期の原始的な段階を現はしてゐるが、個々人の生活に於いては、それは遲い圓熟した段階を現はしてゐるからである。神話的なものによつて獲得されるものは、現實の中に現はれるより高き眞理への眼である。永久なるもの、常に存在するもの、普遍的なるものに就いての微笑ましき知識である。形式についての微笑ましき知識である。そしてこの形式の中で、またこの形式によつて、恐らく全く個的なものが生活してゐるのだ。併しこの個的なものはそれ自身が初めてのものであり一回きりのものであると素樸にも自惚れてゐて、彼の生活が如何に形式であり、反復であり、深く印せられたる足跡へのさまよひであるかと云ふことは感じないのである。性格は神話的な役割である。たゞその役割はほゞ獨自な發見や獨自な方法によつて(併しその際一種の品位と確實さとがあつて)演ぜられるので、單純に一回きりのものであり獨創的なものであると信ぜられるのである。

この神話的な役割は、表面に現はれて目に見える所で動作する役者がこれを果しても、そのために自分が初めてのものであり一回きりのものだと云ふ感じはしない。反對に、かゝる役者は本源的な＝合法的なものを再び表現するために、また良くとも惡しくとも、高貴でも下賤でも、如何なる場合でも自分のやり方で模範的に振舞ふために、より深い意識からこの神話的な役割を創造するのである。若しも彼の實在が一回的＝現在的なものゝ中に存してゐるとするならば、實際彼は何とも振舞ふ事が出來ないであらうし、自分自身に對する關係の中で、據所なく、術なく、當惑し困惑して了ふであらうし、如何なる足跡を印し、如何なる面貌を作るべきかを知らないであらう。併し彼が演技の確實さと品位を獲得するといふ事は、結局、超時間的なものが再び彼と共に現はれて、現在となるといふ事なのだ。その品位は神話的な品位であつて、貧しい無價値な性格にも尙ほ現はれ來るのである。それは自然の品位である。何故なれば無意識から發生するからである。

以上は神話的な行き方をとつてゐる小說家が、現象に對して投げた眼差である。諸君は恐らく、この眼差は反語的(イロニッシュ)なものだと考へられるであらう。何故ならば、神話的なる認識はこゝでは觀照者の中にのみその所を持つてゐて、彼觀照者の中には持つてゐないからである。併し若し神話的な樣相が主觀化し、行動的な自我自身の中に入り來つて、その中で目醒めたならば、そしてその結果行動的自我が喜ばしき或ひは悲しき誇りを以て、その「再歸」その類型を意識し、そしてその役割を地上に於いて演ずるために、卽ち基本的なものを肉體の中に再現し、再び具體化するために、その品位を專ら知識の中に見出したならばどうであらう。それこそ「生きられたる神話」だらうと言ふ事が出來る。だが、それは新奇なもの、未だ試みられたことのないものだと信じてはいけない。神話に於ける生活、神聖なる反復としての生活は、歷史的なる生活形式である。古代人はこの樣に生活したのだ。一例はエヂプトのクレオパトラの形態である。彼女は徹頭徹尾イシュタール[三]＝アスタルテ[四]形態であり、アフロディーテ[五]の人間化である。――バコーフェン[六]もそのバッカス祭、ヂオニソス文化の特性を明かにするに際し、この女王の中に、ヂオニソスの興奮神(レュナムッ)の完全なる姿を見てゐる。プルタークに依れば、女王はこの地上に於けるアフロディーテの具體化にまで發展した婦人であ

るが、それは彼女の肉體的な美によるよりも、寧ろ遙かに彼女のエロティークな精神的洗練によつて表現されてゐるのだと。彼女のこのアフロディーテ主義、ハトール(七)＝イシス(八)としての彼女の役割は、併し、プルタークやバコーフェンによつて始めて言ひ現はされた所の單なる批評的＝客觀的なものではなくて、彼女の主觀的存在の內容であつたのだ。彼女はこの役割の中で生きてゐたのだ。彼女の死に方がそれを指摘してゐる。彼女は胸を毒蛇に噛ませつゝ自殺したと言はれてゐる。しかしこの蛇はイシュタールの、エヂプト女神イシスの動物である。この女神も鱗ある蛇の着物を着てゐたやうに描かれてゐる。またイシュタールが胸に蛇を横へてゐる立像は人の良く知る所である。それ故にクレオパトラの死に方が傳說の通りであつたとするならば、それは彼女の神話的な自我感情を表示したものであるかもしれない。彼女はまたイシスの頸飾りである禿鷲の冠を冠り、ハトールの徽章である太陽面を間に挿んだ牝牛の兩角を身に飾り着けてゐなかつたか？　彼女がアントニウスとの間に生まれた子供を、ヘリオス (Helios) とゼレーネ (Serene) と名づけたのは重要な暗示を與へてゐる。彼女は已れが何者であり、如何なる足跡を辿るものであるかを知つてゐた所の意味深長なる——古代的な意味に於いて「意味深長」なる婦人であつたのだ！

古代的自我と、その自我の自己意識とは、近代のそれとは異つて、排他的な所が遙かに少く、他との限界も遙かに緩かであつた。謂はゞそれは後方に口を開いて立つてゐて、嘗てありしものゝ中から、現在も繰返され、彼と共に、「再びそこに」有るものを澤山取上げた。スペインの文化哲學者オルテガ・イ・ガセット (Ortega y Gasset) はかう言つてゐる。古代の人間は事を行ふ前に一歩後退した、恰度止めを刺すために後退したトレロの様に、古代の人間は過去の中に模範を探し出した。そしてその模範によつて庇護されると同時に變裝し、現在の問題の中へ飛び込むために、恰も潛水器を着る樣に、その模範の中へ滑り込んだのである。それ故に彼の生活は、或る狀態に於いては蘇生であり、擬古的態度であつたのだと。——だが、この蘇生としての、再蘇生としての生活こそは、神話に於ける生活である。アレキザンダーはミルティアデス(九)の足跡の中を歩んだ。またシーザーはアレキザンダーを模倣しようとしたのだと彼の古代の傳記家達は確信した。それが當つてゐるかゐないかは別として。しかしこの「模倣」といふ言葉はそ

の意味が今日のこの言葉の持つ意味よりも遙かに廣いのである。それは古代人にはことに親しまれてゐた所の神話的同一化である。これはしかし新時代へも働きかけ、如何なる時代にも常に可能であるのだ。ナポレオンの形態の古代的印象は屢々強調せられてゐる。彼は、現代の意識狀態では、アレキザンダーに倣つて自分をヂュピター＝アモンの息子であると自稱する事が彼に許されない事を嘆いた。しかし彼は東洋計畫の時期には、少くともアレキザンダーと自分を混同してゐた事は疑ふまでもない。が後に、彼は西歐だけを取る事に決心した時、「俺はカール大帝だ」と公言してゐた。けれどもこれは、「俺は彼を思ひ出す」といふのでも、「俺の立場は彼のに似てゐる」といふのでも、また「俺は彼の樣だ」といふのでもなく、單に「俺はそれである」と言ふのだと云ふことを知らねばならぬ。これが神話の形式である。

故に人生は、何としても意義ある意味深長な生活は、神話を再び血肉化する事である。かゝる生活は神話に關係し、それを證據としてゐる。神話によつて、卽ち過去への關係によつて始めて、それは眞の意義ある生活として眞價を認められるのである。神話は生活の身分證明の樣なものだ。神話により、また神話の中に於いて始めて、生活はその自己意識、その正當權、及び神聖さを見出すのである。死に至るまでクレオパトラは彼女のアフロディーテ的性格役割を貫き徹した。――人は神話を擧行する事による以上に、有意義な、嚴かな生活が營み得るだらうか？イエスとその生活をも考へて御覽なさい。彼の生活は「至るところ、古文書に書いてある通り」であつた。イエスの生活の充實した性格に於いて、福音書著者の文體と、イエスの固有の意識とを區別する事は容易ではない。九時に於ける彼の十字架の言葉「わが神わが神、なぞわれを棄て給ふや」はうはべに反して、絕望と落膽の爆發では決してなく、寧ろ反對にかゝる最高の救世主的自己感情であるのだ。何故なれば、この言葉は「獨創（オリギネル）」の、自發の言葉ではないからである。この言葉は詩篇第二十二の發端にある言葉であつて、それは徹頭徹尾救世主の宣告である。イエスはそれを引用したのだ。そしてこの引用語は「さうだ、私は救世主である！」といふ事を意味してゐるのだ。それと同じにクレオパトラも亦、その死に臨んで毒蛇を胸に擬した時には、やはり昔のものを引用したのであつて、その意味はやは

り「私はそれだ」と云ふことなのである。

紳士淑女諸君。諸君は「式を擧行する」(zelebrieren) といふ語を私がこの關係に於いて用ひた事を注意して頂きたい。それは許容し得る事であり要求される事でさへある。この引用的生活は、卽ち神話に於ける一種の擧式である。この生活はそれが現代化である限り祝祭的行爲となり、祭司(擧式者)によつて定められたる事の實現となり葬式となり祝祭となる。祝祭の意味は現代化としての再歸でないか? クリスマスの夜毎々々に世界救濟の赤坊が、惱み、死に、昇天するといふ運命を以て、この地上に生れ來るであらう。祝祭は時間の揚棄であり、先例であり、定まつた原型によつて演ぜられる所の祝祭的行爲である。こゝに於いて起る事は、始めて起る事ではなく、儀式的に、範例に從つて起るのである。それは現代を捕へて再歸する。恰度、祭禮が時間の中に再歸し、その形相と時とが、極始めに起つた通り交互に現はれ來ると同樣に古代に於いては各々の祝祭が本質的に一つの演劇的な事件であつた。一つの假面劇であり、僧侶によつて行はれる所の、神々の物語の舞臺的表現であつた。例へば、オシリスの生活と惱みの物語の如き、キリスト敎的中世は、これに換ふるに、天國と地獄と、恐ろしき地獄の入口とを持つた神祕劇を以てした。ゲーテのファウストに於いてもそれが再歸してゐる。それは謝肉祭笑劇を、平俗なる身振劇を持つてゐた。それは生活に對して神話的な藝術の光を與へた。そしてこの光の中に於いて、生活は、笑劇として、祝祭的に書きのこされたるものゝ演劇的實現として、滑稽劇として現はれてゐる。そしてこの滑稽劇の中に於いて、神話的な性格の傀儡が屢々現はれて、不變なる、そして滑稽にも再び現代となる所の「行爲」を繰り擴げ實現するのである。但しこの神話的な藝術の光は、演技する人々の主觀自身の中へは入り込まず、その人々自身の中に於いて、遊戲意識として、祝祭的=神話的意識としては現はれず、從つて『ヤーコブ物語』、殊にその「偉大なるヨークス」の章の中で不思議にも現はれてゐる樣な叙事詩は示されないのである。この「偉大なるヨークス」の中に於いては、人々は凡てその何たるか、如何なる足跡を辿るものなるかを知つてゐる、そして彼等の間で、例へばイザーク、エサウ、ヤーコブの間に於いて、苦い=滑稽な物語が神話的な祝祭笑劇として、滑稽に悲劇的に演ぜられるのである。例へば、エサウといふ赤い惡魔が

愚弄せられ、ぺてんで父の祝福を捲き上げられる、宮廷人はそれを見て喜ぶのである。――だからまづ第一にこの物語の主人公ヨーゼフは、生活のかゝる祭司ではないか？ 彼は一種の優雅な宗教的大詐欺を以て、タンムーツ＝オシリスの神話をその身體に於いて現代化するのである。彼は自ら、引き割かれ、埋められ、そして復活するキリストの生活を自身に「起らしめ」、そして彼の祝祭的演劇を、一般に深層からのみ祕かに生活を決定し形造るもの、即ち無意識を以て行ふのである。所與の贈與者が魂であるといふ、形而上學者と心理學者とのこの祕密は、ヨーゼフの中に於いて、容易に、演劇的に、藝術的に、晴朗に、加之、欺瞞的に、道化者的になつてゐる。彼の中に幼兒的な性質が暴露されてゐる。そしてこの言葉に依り我々は次の事を認めて、安心するのである。即ち我々は外見は非常に離れてゐる樣に見えても、我々の對象、我々の祝祭的尊敬の對象からは殆んど遠ざかつてはゐない――我々はその名譽のために話す事を決して中止してはゐないといふ事を……。

幼兒性、子供つぽさ――この眞に精神分析的な要素が、我々凡ての生活に於いて、何といふ役割を演じてゐる事であらう。それは人間の生活構成に於いて、しかもことに神話的同一化、模倣生活、前轍を踏む生活の形式の中で、何といふ强い關與を持つてゐる事か！ 父との結合、父の模倣及びそれを飜譯してのより高くより精神的な種類の父代償の構成――これ等の幼兒性が、個々人の生活の上に、如何に決定的に、如何に感化的に、如何に形成（敎育）的に働きかけてゐることだらう！ 私は「形成（敎育）的」と言つた。何故なれば、形成（敎育）と名づけられるものゝ中で、最も樂しく最も喜ばしくて決定は、私に取つては何と言つても、あがめ且つ愛する者によるこの形成であり、感化である。最深の同情から選ばれたる父の像と幼兒的に同一化する事によつて受けるこの形成であり印刻である。わけても藝術家は――この本當に遊び暮して、しかも熱情的に子供じみた人間は――かゝる幼兒的な模倣が、彼の傳記の上に、彼の創造的な生活行狀の上に、隱れたる、しかも明白なる影響を與へる事を歡に歡ふ事が出來るのである。しかも彼の生活行狀は、屢々時間的に性格的に非常に違つた條件の下に、また非常に違つた――我々は言ふ――子供らしき方法を以て、半神の生活を新らしく蘇生せしむる事に外ならないのだ。それ故にウェルテル及びマイステルの段

階や、ファウスト及びディーヴンの高齢相を回想してゲーテを「模倣」する事は、今日に於いても、無意識に一作家の生活を導き、神話的に決定する事が出來るのである。――私は言ふ、無意識からと。たとひ藝術家に於いては、無意識は凡ゆる瞬間に徴笑める意識と子供的な深き注意深さの色調を帶びてはゐるにせよ。

この物語のヨーゼフは、彼が演ずる限り、卽ち神の「模倣」を以つて無意識を演ずる限り、一個の藝術家である。――だが私は、無意識がかく遊戯にまで晴朗化される事、無意識が生活創造に對してかく生産的である事、心理學と神話がかく物語の中で會合してゐる事――それは同時は文學と精神分析との祝祭的會合でもあるのだ――などを夢中になつて語つてゐる時、如何なる未來的豫感、未來的喜びの感が、私を摑へるかを知らない。「未來」――この語を私がこの講演の題に採用したのは、單に、未來といふ概念が、フロイドの名前と最も好ましく、知らず〳〵の間に結び着いてゐる概念だからに外ならない。だが、私は皆樣の前で話してゐる間に、若しか間違つた告知をしはしなかつたか？「フロイドと神話」といふ方が今まで結論的に話した內容によると、正當な演題であつたかも知れない、と自問せずにはゐられなかつた。けれども私の感情としては、名前と言葉とをかく結びつけたいのだ。そしてこの結びつけを、上述の事柄を以て眞理であると認めたいのである。さうだ、この神話の基礎の上に於ける心理の遊戯――この遊戯の中に於いてフロイド的世界に親近せるかの物語は作られたのだ――に於いてこそ、新らしき人間感情、來るべき人道主義の萠芽と要素が決定せられて橫はつてゐるのだといふ事を私は眞に敢て信ずると共に、全くかゝる確信してゐるのである、卽ち、今日種々の方法で構成されつゝある新人類學のために、より賢明な、より自由な人間性の家のために、最も重要なる礎石の一つが、フロイドの畢生の事業によつて持ち來たされたのである事を人は認めるであらうと。この醫師的心理學者は、我々が豫感してゐる所の、そして尙ほ多くの人の手によつて貫徹されるであらう所の未來のヒューマニズムの開拓者として尊敬せられるであらうと私は信じて疑はない。この未來のヒューマニズムは昔のヒューマニズムとは全く異つたもので、それは神經症的不安や、そのための憎惡の中で惱んでゐる今日の人類のそれよりも遙かに大膽、遙かに自由晴朗、そして遙かに技巧の圓熟せる關係を、隱れたる力、無意識の力、「エス」の

力に對して保持するであらう。フロイドは言つてゐる。將來は恐らく、無意識の學としての精神分析の意味は、治療としてのその價値を遙かに凌駕してゐると判斷されるであらうと。しかし無意識の學としてもそれは治療法である。超個人的な治療法、偉大なる形式の治療法である。諸君はそれを詩人の妄想であると取るならば取れ。――しかし無意識に對する反語的な、藝術的な、しかも必然的には不徹ならざる關係を招來して、それによつて大いなる不安、大いなる憎惡を解消し克服することは、それこそこの科學の人類救濟作用であるといふ風に考へる事は、全體として無意味ではない。

分析的洞察は世界變革的である。この分析的洞察と共に一つの晴朗なる邪推が世の中に持ち來たされ、萬物を暴露する所のその疑心を魂の隱れたろ部分とその隱謀に向けた。この疑心は一度び目醒まされたが最後再び消え去る事は決して出來ない。この疑心は生活に浸潤し、生活の粗野なる素樸さを埋沒して、生活から無知の情熱を取去り、英國人の所謂「控へ目」の趣味にまで、誇張的な表現よりも寧ろ控へ目の表現にまで、また力を節度の中に求める所の中間の、偉大ならざる言葉の文化……中庸の文化にまで敎育しつゝ、その落着きを促進するのである。だが、この中庸Bescheidenheit の語は心得てゐる Bescheid-wissen から來るのであるといふ事、語原的にはこの語はかゝる意味を持つてをり、この意味を越えて第二の節制、中庸といふ意味を取るに至つたのであるといふ事を、我々は忘れてはならない。「中庸」を「分を心得る」から知る――といふ事は、晴朗に冷靜なる平和な世界の根本基調であり、この根本基調を共に招來するためにこそ、無意識の科學は鼓吹されるやうになるだらうといふ事を我々は承認する。

この無意識の科學の中には先驅者的なるものと、醫者的なるものとが混合して入り込んでゐるために、かゝる希望は是認せられる。フロイドは嘗てその夢の說を「民衆の信仰と神秘思想とからかち得た」「科學の新しき國の一片」と名附けた。この「かち得た」といふ語の中には、學者の殖民地的な精神と意味が含まれてゐる。「エスがあつた所のものに、自我はならねばならぬ」と彼は箴言的に言つてゐる。そして彼は自ら、精神分析的事業をツィーダー海(Zuidersee)の排水にも比せらるべき文化事業であると稱してゐる。かくて最後に、我々の祝福するこの尊敬すべき

人の容貌は、老いたるファウストの面貌の中へと一つになつて流れ込むやうに我々は思はれる。「濕りたる海原の境界を狹めるために、大海を岸から閉め出さう」といふ強い慾望に驅り立てられる老ファウストの面貌と一つになつて流れるやうな氣がする。

「すれば私は幾百萬人に土地を開いてやる事になる。
安全ではないが、働けば自由に暮らせる。
さういふ群を目の前にしながら
私は自由な民と共に自由な土地に住みたいのだ。」(十)

それは、不安と憎悪から解放せられ、平和に迄成長したる未來の民である。　(完)

註(譯者)——

一及二、『トーニオ・クレーゲル』、『ブッデンブローク家』共にトマス・マンの小説。前者は一九一四年、後者は一九〇一年作

三、イシュタール。「バビロンの中心的女神、時代の經るにつれて幾多の神々をその中に包含して、遂ひには單に女神を現はす名稱となつた。

四、アスタルテ、近東洋(トルコよりペルシヤまで)の中心神アシェラのギリシヤ名、アッシリヤ、バビロン地方の文化に於けるイシュタルテに相當してゐる。この神の信仰はエヂプトへ入り込んだ。

五、アフロディーテ。ローマ人達のヴェーヌス、豐饒、愛、魅惑、優美の女神。

六、バコーフェン。バーゼル大學教授、古代研究家(一八一五——一八八七)

七、ハトール。エヂプトの天の女神でまた愛の女神とも言はれ、從つてギリシヤ人にはアフロディーテと同じ様に解されてゐた。この神は國外、卽ちミナイ半島かミリヤ等で特に信仰された。彼女は牝牛の頭をしてゐて角を持つてゐる。

八、イシス、エヂプトの女神、天の女神として北部エヂプト一體に信仰された。ギリシヤ人等にはデメーターやアフロディーテと同じやうに解されてゐた。彼女は普通、頭に牝牛の角を戴いてゐた。そしてその兩角の間に太陽を着けてゐた。

九、ミルティアデス。アテーネの英雄、ダウリス王のスキタイ征伐に從つてドナウ河まで行つたが、イオニヤ暴動のために歸國した。マラトンに於けるペルシャ軍擊滅は彼の功績である。翌年ペルシャの友邦パロス島を討つたが傷き、その傷のため間も無く死んだ。

十、ゲーテ『ファウスト』第二部の內、「宮城內の大きな中庭」に於ける、主人公がの死の直前の科白の一節。

『フロイドと未來』譯後に

實に堂々たる大講演で流石に世界的文豪の名に値するものである。文藝作家にしてこれだけ學的思考に堪え得るものは、わが國には殆ど見當らぬやうに思はれる。文藝と精神分析との關係の或る一面を十分に說いてゐるが、まだ他幾多の關係面がある。

たゞフロイドが哲學の意氣を認めぬとか、哲學の科學への上位を知らないとか云ふやうな批評は如何であらうか。私は假にトマス・マンに同ずることが出來ない。フロイドが科學としての精神分析の限界性を說きこれを世界觀と混同すべからざることを反復强調してゐる點だけでも、その事はふ既に明かになつてゐる筈だ。が、學問の上位とか下位とか云ふ價値體系はアービトラリなものであらう。ポリチカルな意味では確に哲學は科學の上位にある。科學は政治的でないと云ふ意味で價値があるのだ。本文表題上の肖像はマンである。（大　槻）

教育者の爲の精神分析概論（アナ・フロイド）

宮田齊譯

今假に、子供が全然自分の母親の手で育てられずに、此の大切な生後一ヶ年の間を乳母から乳母の手に渡るか、それとも何處かの托兒所で、あまり熱のない保姆の世話を受けて過すものとして見ませう。

（斯様な場合）幼兒期の現實的な感情結合を缺く事が、其の子供の將來の生活全體に大きな影響を及ぼすものと考ふべきではないでせうか。或は又少年が自分の模範と仰ぎ、指導者と考へてゐる父親が酒のみであるか、精神病者或は犯罪者であるとしたらどうでせう。

若しさうだとすれば、父親と同じやうにならうとする努力——本來ならば教育上最も大切な補助的意義をもつ努力——が此の場合には子供を一路破滅に導くやうな結果になつて了ひます。

兩親が別居してゐて、互ひに子供を自分の方に引寄せようとして鬩ぎ合つてゐるやうな場合には、子供の信頼といふものが、あまりに早く醒めた批判力のために押し潰されて、その結果彼の感情の發展が全面的に傷けられるのであります。

茲に（私は）、別れて住んでゐる兩親を再び結び合せようとして空しい努力を捧げて來た八才になる男の子の言葉を御紹介申し度いと思ひます。「お父さんが母さんを嫌つてゐれば、母さんも父さんが嫌ひになる。さうすりや、二人共僕のことを好きになれないし、僕だつて父さんや母さんが要らなくなつて、家中がつまらなくなつちやふよ。」斯様な事態から子供が惹き出す結論は大體こんな具合に危險なものなのであります。子供はちやうど、雇主への信頼を失つて、自分の仕事に悅びを感じなくなつた破産會社の従業員のやうな行動に出て參りま

す。つまり、彼の仕事とも云ふべき正しい發達を止めて了つて、歪んだ狀勢に應じて異常な反應を示すものです。――

扨て、本日の私の講演は一先づ此の邊で終りといたしますが、要するに私は、人間の最も幼い時代に起つて來るいろ〳〵の事柄を、精神分析法の力によつて再生した姿に於て御聽取り頂いたわけであります。これ迄に敍べた個々の事柄に就いては、皆樣方の方でも、どの程度に信じてよいものか、或はまたどの程度迄は信じられないか等、いろ〳〵御考へもあらうかと存じます。

が、孰れにもせよ、精神分析は今申したやうな發見を行つて、一般人の注意を幼兒期の體驗と云ふものに向ける事に貢獻したのであります。最後に當つて一つの事件を御報告致しますが、之に依つて皆樣方は、斯樣な理論的考察から導き出された現實的な結果を御了解下さる事と思ひます。

其の事件と云ふのは、最近獨逸の或る裁判所で離婚訴訟事件の判決が下される事になりましたが、審理が進行して行く中に、この夫婦の間に出來た二才になる子供を何方に引き渡す可きであるか、と云ふ問題が起つてゐりました。處で、夫の供述に依ると、彼の妻は色々の性癖を持つて居て、どうも子供の教育には不適當だと云ふ事であり、一方妻の言分は、其の子はやつと二つになつたばかりなのだから、教育といふ問題ではなくて養護してやるのが當然だと言ふ事でした。其處で論爭の中心點は「抑々子供の教育は何時から開始す可きであるか」といふ事になつて來て、此の點に就いて專門家の意見を聞く事になりましたが、この際參考意見を出した人々の中、精神分析派に屬してゐる者は一部分に過ぎず、他は大概在來の學派の人であつたにも拘らず、「兒童の教育は出生第一日より始まる。」と云ふ答申案が出來上つたのであります。若しこれが精神分析發見以前の出來事であつたならば、恐らくこれと趣を異にした結論が出てゐたことは疑ふべくもありません。

第二講　幼兒期の本能生活

前回の講演で述べました事柄を皆樣がどのやうに御聽取り下さつたかは、固より知る由もないことですが、皆樣方は恐らく私の御話から二重の印象を御受けになつたことであらうと思ひます。

と申すのは、皆樣は先づ、夙うの昔から解り切つてゐる色々な事柄を、今更事々しく重みをつけて並べ立てたものだとお思ひになつた事でありませう。私が、現代を

究も、教師が兒童を家庭から分離した孤立の人格として觀てゐた時代と同じものであるかのやうな誤つた考へを持つて居り、また、今日では皆様の中の一番お若い方でさへ、何か困難な問題が起つて來る度毎に、先づ子供の家庭環境を考慮に入れて、兩親が宜しくない感化を及ぼして居はしまいか、兄弟の間のその子の立場はどんなものであらうか、つまり總領であるとか或は中の子、或は末の子であるとかいふ立場がどんな結果を齎すか、と云ふやうなことなどに迄考へ及んで居られると云ふ事實を失念して居るのではあるまいか、と御感じになつたかも知れません。皆様方は常々、學校での子供の態度行動をば其の子の家庭に於ける取扱方に照らして見て說明を與へようと努力しておいになるわけでありますから、改めて私が講演を致す迄もなく、兒童の性格を其の子の家庭內での體驗に迄遡つて考へると云ふ事は、夙くに實行されて居る筈なのであります。

　また、このやうな單純な事柄を如何にも大げさに吹聽したものだと御思ひになつたかも知れません。つまり、私が凡ゆる場合に、幼兒の感情や行動に一々成人の感情行動の表現を當嵌めて解釋し、一般に大人の行動を言ひ表す場合に使ふ文句を用ゐて兒童の行動を敍述したのであります。例へば、子供が日頃兄弟姉妹と小競合ひをやるのを危險極まる死の願望に變へてみたり、或はまた、男の子が母親に對して持つ他愛ない、感傷的な氣持を、性的に女性を欲求する男性の性愛に飜譯したりしたわけです。父親と共同生活をして、其の强い力を常々感じて居る男の子が、父親の命令と自由の制限とに厭々ながら服從するのは、至極當り前の事なのに、私が御話した所に依ると、これには彼のシルラーがドン・カルロス*の中で描いてゐるやうな父と子との相剋があることになつて居ります。

* Don Carlos (1787) シルラー作の古典戲曲。スペインの太公ドン・カルロス (1545—68) と繼母エリサベートとの戀の經緯に取材したものであるが、史實とは異なるといふ。

　以前にも皆様は、精神分析なるものが、幼兒の感情狀態をギリシヤの昔物語にある、父親を殺して生みの母親を妻にしたあのエディポス王の感情に譬へるやうな事迄やつてのけるのだ等と聞かされて屹驚りなさつた事もあらうかと思ひますが、この私の講演は結局皆様が精神分析に對して持つて居られた先入觀念が、全然根據のないものではなかつたことを證明したに過ぎず、而も皆様方の經驗を土臺として左様な觀念を一つの判斷に代へて了つたやうな事になるわけであります。

　然し、私は精神分析の採る立場を玆で論證しようとは

思ひません。只、これに就いての最後の御判斷を今暫らく御猶豫願ひ度いのであります。

扨て、前に申した通り、精神分析の考へ方と全く一致したあの獨逸法廷での判決に戻つて考へて參りませう。一體、出生第一日からの教育といふことは何を意味するのでせうか。今日迄その精神現象に就ては殆んど何も解つてゐなかつた、まるで幼い獸のやうな、小さい人間のうちには、教育すべき何ものかゞあるのでせうか。抑々教育活動は何處から仕事に取掛つたらよいのでせうか。

兒童の內的生活と周圍の人々との關係に就いて、私が述べて參つた所から推して考へますと、之に對する答は至極簡單なやうにも思はれます。

つまり、「幼兒教育の任務は、兄弟姉妹及び父親に對する兒童の敵對的願望と、母親に向ふ愛欲（Gelüste）とを抑へつけて、それ等が實現されるのを防ぐ」ことになるやうであります。

が併し、一歩突込んで反省して見ると、初期の教育に就いての此の樣な定義は不充分であるばかりでなく、稍滑稽にすら思へて參ります。幼兒は成人の環境の中に投げ出された無力な存在であつて、此の環境をつくる人々の好意に賴つて辛うじて死滅を免かれてゐるのでありますから、幼兒の力といふものを、周圍の者の力と同列に考へることは、必ずその子供の爲に宜しくない結果を生み出すのであります。從つて、子供は自分の危險な願望を實現する機會といふものを少しも持たないのであります。少年審判所や幼兒診療所で取扱つた例の中には、事實男の子が母親に對して徹底的に――と申しても自分の身體的發達の程度に應じて――父親の役を勤めたり、また、少女が父親に依つて妻としての用に供されたこと等もあるにはありますが、斯樣な場合にも、これ程の並外れた願望實現を行つたものは、決して子供自身の力や精神力（エネルギー）ではなくて、自分自身の愛欲を充す爲に、それに呼應して來る兒童の願望を利用した、成人の異常行爲が原因となつてゐるに過ぎません。現實生活に於ては、子供の攻擊に對して父親を庇ふよりも、父親の怒りに對して子供を護る方がずつと〳〵大切なのであります。

斯樣な次第で、幼兒期教育の定義といふ問題は未だ釋かれたわけではなく、その內容も明瞭ではありません。そこで、もう一度例の判決に歸つて、兒童養護と兒童教育といふ二つの概念を比較研究して見たならば、或は之に對する答へを見付け出す上に新しい道が拓けて來るかも知れません。

擁護の定義を下すことはさして六ケ敷はありません。

兒童の擁護とは、兒童の要求を充たしてやることであります。乳母は子供の飢を充たしてやり、身體を清潔にしてやり——尤もこの方は、子供自身の欲求といふよりは寧ろ大人の希望によるものでせうが——安靜に、暖かにしてゐられるやうに計つてやり、怪我其他の生命を脅かす危險を防いでやります。つまり、子供の必要とすることは悉く實行してやつて、而も子供からは何の返報を求めない、これが擁護であります。(未完)

「流行現象」の無意識的意圖

高橋　鐵

(1) 流行は集團無意識の仇花だ。(2)「流行」の諸研究をみる。(3) 優越者の「區別」(4) 優越階級の代辯者たち。(5) 民衆は何故「模倣」するか——攻擊・補償・退行の社會機制。(6)「反對模倣」(タルド)を飛躍して民衆が「社會的紐帶」を斷っ時!

1　流行は集團無意識の仇花だ

1936年現在、街々では「ハリキる」といふ流行語が溢れてゐる。その言葉の表面的な意味を解釋すれば、リビドーを積極的に生活へ向けてゐると云ふことになるであらう。實に「非常時」らしい勇猛な精神を現はしてゐる。が併し、これも實は、この言葉を發生させた社會狀勢に對して、ハッキリと、隱された(云ふ當人達さへ氣附かぬ)意圖をもつてゐる。卽ち、「ハリキる」ことの儚さ——あらゆる生活への自嘲的意味を含んでゐる。「わしア近頃一寸ハリキッとるよ」と云ふ男は、本當は、絕望的な努力を無意識的に感じてゐるのだ。「奴は大したハリキリボーイじやネ」といふ人物評は實は、社會的な夢を嗤つてゐるのである。

しかもこの流行語は跋扈して行く?　正規な社會觀を敎えられぬ人々にまで無意識の共鳴を以つて擴つて行く。

このやうな流行現象の集團無意識觀は單に言葉ばかりではなく、服飾・藝術・遊戯・學術・宗教・慣習などの文化形態にあてはまる。たとへば「暗い日曜日」といふ曲が世界的に流行するのも、それを受け入れる社會(世界各國の資本主義社會機構)下の集團無意識が胸うたれるからである。

筆者は斯く、流行現象を一社會段階に於る文化のシムボルとして、民衆の白日夢を分析し、又、如何にして多くの流行が發生したかを例示してみやうと思ふ。

2 「流行」の諸研究をみる

資本主義經濟學の「養父」ゾムバルトも斷言してゐるやうに「流行は、殊に今日の形に於る流行は、資本主義にとつて最愛の寵兒で、且、その本質の根元から發生するものである」（Deu Moderne Kapitalismus）にもかゝはらず、目下のところ、その研究は不思議にも「定義」以上のものにはなつてゐない。

それはこの現象に斧を入れた人々（主に社會心理學者）が案外、最も大切な人々の無意識面に鈍く、或ひは資本主義經濟學を看過してゐる爲、跛行的になつて、殘されてゐるのであらう。

こゝではまづ、それらの內、最も明らかにされてゐる「定義」的な問題を一瞥しやう。

F・フィッシェルは云ふ。「流行とは其の時々に適用される諸文化形態の總體に對する總括概念である」と。エルスターの定義も同樣で、「（流行とは）たゞ一時的に行はれる文化內容の形態そのもの、或ひは又、此の形態の模倣そのことである」

こういふ定義は甚だ漠然とした廣義のもので、なにしろ流行現象そのものが「不斷に變遷するといふ事實は万人が充分承知してゐるくせに、どうも學說は充分でない」（エブレン）ために、E・A・ロッスが僅かに限定的な命題を加へてゐる。「流行とは、人々があるものを選擇する時のその標準の循環的變化の系列をいふのである………」

どうも實に妙なシロモノで、さればこそ、マーク・トウエンが「流行馬鹿」と稱し、ゾムバルトが「流行魔物（モードトイフエル）」と稱したのであらう。そして、この馬鹿乃至は魔物的現象も矢張り辨證法的な各々の歷史をもつことは、タルドも不朽の著作「模倣の法則 Les lois de iimitation」中に規定してゐる。

（模倣——反抗——發明）！

私は、この現象過程を總て經濟的土臺から發生する仇花と觀る。（マルクス「唯物史觀要約」參照）そして此の仇花が總て隱された企圖のシムボルであることについて社會分析を企てた。

1 優越者の「區別」

ロッスも述べてゐるやうに、劣者は常に優越者の外形を模倣するが、優越者はそれに對して直ぐ新しい區別を

立てゝ行く爲、「劣者の模倣が機敏なればなるほど新しい流行が頻發する」のだ。

けれども、この區別（卽ちタルドのいふ「發明」）とても、必ず何等かの意味に於て優越せる彼等支配階級の態度を具現したものでなければ、流行するに到らない。

フランス革命前、宮廷を中心に、鯨骨で腰を傘のやうに膨らませるクリノリンといふ衣裳が大流行した。これは初めはその「發明」をした貴婦人が自分の妊娠をごまかす爲だつたと傳へられてゐるが、結果的には確かに、横幅を獨占する絢爛な威嚴を企圖してゐる。

又、日本でも元文の頃、上方くだりの宮古路豊後椽が裾まで屆く長羽織に細身の刀を落しざしにして懐手のまゝ駒下駄ばきで濶歩するといふ風態を流行させた。この姿は唯想像するだけでさえ、去就に迷ふ封建時代の姿をそのまゝ見せられたやうではないか。

元祿の頃には、若衆歌舞伎が士道までも紊すため斷壓下つて、ソドマイト的役者の前髮を野郎頭風に剃り落された時、その一人荻野澤之丞が紫布の左右へ鉛を入れて醜化した前髮を被ふと、それが忽ち武家女にまで流行しだして、後世まで傳はる澤之丞帽子と呼ばれるやうになつた。こゝに筆者は、封建江戸の胎內に孕まれ行く文化的軋轢形式を指摘することが出來る。（本誌昭和十年七八月號拙稿『同性愛劇抉錄』參照）

世界の女性風俗に革命を起したショートスカートも、この軋轢形式に他ならず、千八百九十五年頃、當時の所謂淑女階級に流行した自轉車用の服として出現したのだと云はれてゐる。産業革命の波をかぶつた近世社會が必然的に、所謂斷裁美を採る女性の進出運動と結びつき、それが今や、資本主義第三期の女性にとつて生命懸けの露出慾を滿さしめるすべと化したりするのである。

かゝる例證は殆んど際限ないので、おそらく唯一つの流行事物を攻究しても面白いに違ひない。だから、こゝには、流行現象は必ず優越者が彼等の階級的コムプレクスを昇華發散する一表現であることを論斷しておくにとゞめる。

4　優越階級の代攝者達

前章の例の中、私は、流行の發明者として俳優・音曲家・女性を擧げたが、讀者諸氏の中には、彼等が優越者かと疑問をもたれる方があるかも知れない。（こゝに亦、一問題がある）

なるほど、「發明者」中には、普通から云へば、もつと地位低き者さへ多いのである。

例へば、江戸寶曆年間、新興商人の內儀達にまでセン

セーションを捲起した「お六巻き」の元は、淺草寺内の水茶屋「お福茶屋」の茶汲女(ウェイトレス)おろくが黄楊の梳き櫛を束ねた髪に逆さにさして巻いてゐたのからださうではないか。(この異常に甲斐々々しい運動型の髪型を一考されよ)

又、斷髪の起原は歐洲大戰當時、看護婦が亂を征伐するための悲慘な「發明」にあるのだと云ふ。(女性まで動員される帝國主義段階のすさまじさが、こゝにある!)

そして、確かにこれらの彼女達は優越者や支配階級ではない。が又、賀川豐彦氏などの「協調的」提言のやうに「流行といふものは時代に最も進んだ自由人がそれを作る」(化粧の心理)のではない。

第一、本質的な「自由人」なんてものが階級鬪爭の歴史にある譯はないのだ。

では、誰が流行發明者かと云ふと、筆者はそれをハッキリ指名し得る。卽ち、ソーシタイン・ヹブレン教授が發見した階級—代攝的有閑階級 Vicarious Leisuro class の人だ。

彼等は奴僕として、或ひは白奴隷としてブルジョアジーに仕へる代りに、主人の閑暇や浪費さえ代攝して、大いにブルジョアジーの「支拂能力を證據立てる」(ヴェブレン「有閑階級論」參照)のである。しかも、この流行發明の場合には消費が卽ち生産を兼ねるやうなものに成る譯だ。

なぜならば、——新しい發明は忽ちブルジョア文化の花輪になるばかりでなく、ゾムバルトも(曾て長谷川如是閑氏も)説く如く、直ちに「劣者」の大群まで魔術にかゝつたやうに模倣するため、それに乘じて「商業主義(コンマーシャリズム)」がその魔術を助長し、益々利潤をかき集める事になる。かうして流行の正・反・合は進展して行く。

5 民衆は何故模倣するか

——攻撃・補償・退行の社會機制

流行現象の社會的動因について、エルスターは云ふ。「實利によつて決定されるものには循環がない。しかるに、流行は主に力の慾望によつて起るのである」と。

これはアドラー的個人心理學の一面から觀ても當然のことである。が、ジムメルの説は又、これを補足して、曰く「同化の生じるのは、力の慾望とは反對な慾望卽ち社會的屈從の慾望によるものである」

此の兩説を綜合すれば、つまり、流行の模倣はマゾ的慾望から生じ、流行の全發展系列はサド的に充されると云へるだらうが、それよりも寧ろ、流行現象そのものは社會に對するサド・マゾヒズムの心理機制から出發する

と云ふ方、が明日であらう。

又一例を引かう。それは明治十四年だつた。五世菊五郎が「お園六三」の狂言の時、舞臺で本當に鉋で木を削るところを演じると、代擇的有閑階級の一人の娘がその鉋屑を貰ひ受けて髮飾りにしたものである。それが俄然、當時の小間物界を風靡して、この菊五郎の鉋屑は「六三(ろくさ)掛け」といふ名稱で女性といふ女性の頭を飾るやうになつたさうだ。

それから、詩人バイロンの時代には、この熱情詩人が兩手をポケットに入れて跛をひいてゐる姿が魅力ある者として、模倣者達を恍惚たらしめたばかりでなく青年間に珍妙な流行をまき起したと云ふ話がある。否、もつと簡單な例としては「英國の皇太子が時計を忘れて鎖をつけずにオペラへ行くと其場內の人々は皆第一の幕の終には鎖を隱す」(ロッス「社會心理學」)と云ふ例さへある。

かうなると、模倣の心理には、たしかにジムメルのいふ屈從根性を認めない譯には行かない。露骨なマゾヒズムそのものすら觀取し得る。

たゞ、此のマゾ的受動性の中に、その時の社會情勢を反映した無意識意圖が本能的に現れるのは當然であらう。

「丹下左膳」が、はやる時代、空想の豪傑「金平(きんぴら)」が拍手された寛文乃至元祿年間等には——民衆はマゾ的に見惚れてばかりはゐず、寧ろ一種のサディスティックな破壞本能のシムボルに同一化し盡すのだ。

かういふ淡い攻擊慾の錯綜は、流行語や流行歌のやうな觀念性のハッキリしたものには、屢々見受けられる。「どうかと思ふ」「いやじやありませんか」などといふ嘲笑氣分は決して個人的な感情ではなく社會への漠然たる集團無意認が人々の心底に疼いてゐるからこそ、言葉の津波にまでなつたのである。

或ひは又、慶應三年に大流行した「えいじやないか」のアナーキスティックな潛伏的願望、「何がさうさせたか」の懷疑的な攻擊感など皆この例に洩れない。その他、說敎强盜がもてはやされたり軍國的服飾がパリ邊りから世界に流行し出す等も總て、何か分らぬ攻擊欲を具現してゐる。

尤も、模倣心理はマゾ的な色彩の方が濃いだけに、大流行を起すのは、矢張り第一に、集團無意識のもつ願望を補償するもの(從つて、退行的な願望を滿足させるもの)が多い。

流浪衝動(ワンデルトリーブ)・墜落墮落願望・胎內空想・別世界空想、涅槃原則・巨母空想・被誘惑願望・去勢コムプレクス・——等々を滿す、股旅小說、三原山、大戰後の黑色、かれすす

き、ハイキング、キングコング、華嚴の瀧、お蔭參り、ガルボ（「不健康を樂しむ女」シカゴの分析士カレン・ホーネー女史の命名による）浪子、唐人お吉、血文字お定、「暗い日曜日」エチオピヤ、「忘れちやいやよ」「あなたと呼べば」「ノンキなトーサン」名金、等々。

但、いかなる社會でも一段階の上昇期には、支配階級の利害と被支配階級の利害とが比較的正比例するために、流行は非常に一般化し、所謂上下おしなべて、一つ仇花を讃えることがある。たとへば、ルネサンス期のエニスや日本の元祿初年及び大正七八年頃の金銀色大流行の如き現象である。（これとても、廣くみれば局部的な消費文化には相違ない）

このやうに、銀狐の毛皮とか小型自動車・小型カメラとかの流行が一部ブルヂョアヂーを席捲する反面に一方では世紀末的仇花が九八％の民衆の間に渦卷いて……流行までクツキリと對立するやうな社會は、果して如何なる無意識企圖を藏すかは具眼の士にのみ解せられる問題ではないか。

6 「反對模倣」――民衆が「社會的紐帶」を斷つ時！

タルドは「社會は模倣である」と云ひ「模倣は社會的紐帶」le lien Social である」と云つて、模倣を二態様に分けてゐる。「一つは、その模型の通りを正確に爲すことで、他はその反對を正確に爲すこと（反對模倣）である」そして社會的な觀念群の相反並存から社會が進展すると云つてゐる。

そして、その後に警告を發してゐるのだ。反對模倣と非模倣 non-imitation とを混合してはならない。非模倣とは、單なる否定的事實ではなく、互ひに模倣し合はないと云ふ狀態で、「父と子の眞實の離脫、舊社會と新社會との間の臍の緒の斷絕」だと云ふ。そのいゝ例が、フランス革命前の社會情勢で、「その數年間、巴里は最早朝廷の流行を追はなかつた。最早ヴェルサイユ宮殿で催された劇を賞讃しなかつた」と斷じてゐる。

これはロシア革命の前にも見られたらしい。賀川豐彦氏の考證によると、その頃、青年達は、世習の通りカラーにのりをつけることも最早しなくなつたさうである。つまり、舊社會の風習を一切模倣しやうともしない態度になつたのであらう。民衆にマゾヒズムの「社會性」がなくなつて總ての文化形態が自然發生的な一つのイデオロギーに結ばれたのだ。

「同一化は共通物質から――」といふロバートソン・スミスの法則に從へば、經濟的にか精神的にかいづれに

しても、共通物質（帽子・ネクタイ・小說本・何でもいゝ）を全國民が採り得なくなると、彼等のとる共通物質は消費的なものではなく武器そのものになる。血の同一化になる。

以上、私は、流行現象が社會測量（ソシアルサーヴェイ）の上に、民衆の主要な企圖を發見する診斷法であることを概說した。今後、折にふれて、流行色の歴史的觀察や、流行歌流行遊戲などいろ〳〵な方面から此の、流行現象の社會分析をはたしたいと思ふ。

—完—

銀行公休日（Kマンスフィールド）

岩倉具榮譯

桃色の顏をした頑丈な男がすゝけた白いフランネルのズボンをはき、桃色のハンケチをのぞかせてゐる青い上衣を着て、餘りに小さ過ぎる麥わら帽を阿彌陀に頭にのせてゐる。彼はギターを彈く。白い布靴をはいた小さい奴さんはその顏を破れた翼の様なフェルトの帽子の下に隱し、笛を吹き、それから丈の高い瘦せた方の奴さんは破れたダブダブのボタン靴をはき、リボン——長い、よぢれた、吹き流れるリボン——の様な音を提琴から引張り出す。彼等は果物店の向ふ側で日光を一杯に受けて、につこりともせず、併しまじめ腐りもしないで、立つてゐる。桃色の蜘蛛見たいな手がギターを打ち、眞鍮のトルコ玉の指輪をはめた、づんぐりした手が、氣のなさゝうな笛を無理に吹き鳴らし、そして提琴引きの腕は提琴を眞二つに挽き伐らうとしてゐる。

群衆は集まり、オレンヂやバナナの皮を引きちぎつて、分け合つて食べてゐる。一人の若い娘は苺の籠まで持つてゐるが、彼女はそれを食べない。「隨分高價いのよ！」彼女は何か恐ろしいものでもあるかの様に、その可愛いゝ先のとがつた果物を見つめてゐる。オーストラリアの兵隊は笑ふ。「まあ、やつてみなよ。一口位しきやありやしねいよ」併しその兵隊も娘が苺を喰べるのはいやだつたのだ。彼は娘の可愛いゝ、おづおづした顏を眺めてゐゝ氣持になつてゐた。すると娘は戸迷ひしたやうな眼をあけて兵隊の眼を見た、「お金を喰べるやうなものね！」兵隊は胸をつき出し、ニヤリとする。天鵝絨の胸衣——古い汚れた針差のやうな——をつけた太つたお婆さんや、頂に震えるボネット

を載せてゐる破れ傘の様な、痩せた婆さんや、垣根にでも生えた様な帽子を冠り、先の尖つた高い靴をはき、モスリンの服を着た若い女達や、カーキー服の男達、水夫、汚い番頭連中、さつぱりとした身なりをし、肩に綿を入れて氣取り、ラッパ・ズボンをはいた若いユダヤ人ども、青い着物を着てゐる「病院のボーイ」達――やつと陽の目を見たボーイたち――これ等の人々は、騒々しい、仰々しい音樂のために一瞬間、一つの大きな群となつて寄り集まつて來た。子供らはふざけ、舗道の上でお互ひに押し合ひ、あちこちと肘をつき合つてゐる。年寄り達は話してゐる、「さうおらアは奴に云つたよ、手めい醫者が要るなら、引張つて來いつてな。」

「それで料理が出來上る迄には、おらの手のひらに置ける程もなくなつてゐたんだ！」

靜かにしてゐるのは襤褸を着た子供等だけであつた。彼等は、互にその手を互の背中の後ろに廻し、大きな眼をして、出來るだけ音樂家達に近くにぢり寄つて、突立つてゐる。時々足が踊り、腕が動く。一人の子供はすつかり感動し、よろよろしながら二回ほどぐる〳〵と廻つて、おごそかに尻餅をつき、それからまた起き上る。

「隨分いゝわねえ？」と小さい娘が口に手を當てゝさゝやく。

そして音樂は明るい調子に亂れて、それから又調子が合ひ、再び亂れ、そして消える、かくて群衆は崩れ散つて、丘の上の方にゆつくり歩いて行く。

道路の隅では露店が殆まる。

「くすぐり箒はいかゞ！　二ペンスの箒！　みなしゃんくすぐり箒を買ひましぇんか。くすぐつておやりよ、子供衆。」針金の取つ手のある小さな柔い箒。兵隊達に依つてそれが飛ぶやうに賣れる。

「お化人形をお買ひなせえ！　二ペンスのお化人形！」

「はねる驢馬をお買ひなせえ！　みんな生きてまつせ！」

「飛切り上等のチューイン・ガム。お買ひなせえ、面白れよ、子供衆。」

「薔薇はいかゞ、女の子に薔薇を買つておやり、子供衆。薔薇はどうです、奥さん。」

「はんね（羽）！　はんね（羽）！」彼等にはとてもかなはない。愛らしい、流れる樣な羽、エメラルド・グリーン、緋色、明るい靑、カナリヤ色。赤ん坊のボネットにさへも羽が縫ひつけてある。

そして紙製の三角帽子を冠つた年取つた女が、まるで今はの際の切なる言葉の樣に、あなた自身を救ひ、或は彼を正氣に歸らせる唯一の方法でゝもあるかの樣に、「三角帽をお買ひなせえまし、して、おかぶりなせえまし！」と叫んでゐる。

今日は太陽が照つたり、風が吹いたりして、飛ぶ樣な日だ。太陽がかくれると影がさつと掩ひかゝる。また太陽が顏を出すと、燃える樣に暑い。男も女も背中や、胸や、腕が燒ける樣に感ずる。彼等は身體が擴がり、生々して來る樣に感じる。……それで彼等は抱きしめる樣な身振をし、何といふことなしに、腕を持上げ、娘にとびかゝり、爆笑する。

レモナード！　それの這入つた、そつくりした槽がきれをかけたテーブルの上に立つてゐる。そして弱つた魚の樣なレモンが黃色い水の中でドロドロしてゐる。それは厚いガラスの中にあつて、ジェリーの樣に堅く見える。何故彼等はそれをこぼさないで飮むことが出來ないんだらうか。みんながこぼし、コップを返す前に最後の數滴はリングの中へ投げられる。

條の覆ひとピカピカした眞鍮の蓋のついたアイスクリームの車の周りに、子供達がむらがる。小さい口がクリームの喇叭のまはりに、辻のまはりに、舌なめづりをする。蓋が上げられ、木のスプーンが投げ込まれる。ある者は、靜かに咬みくだいて、味はうとして目を閉ぢる。

「この小さい鳥にみなさんの未來を豫言させませう！」

彼女は籠の側に立つてゐる、皺のよつた、老いることのないイタリヤ人で、彼女の黑い手を握つたり開いたりしてゐる。彼女の顏は、微妙に彫られた國寶めいたお面で、綠と金色のスカーフを頸に卷いてゐる。そして牢獄の中で愛らしい小鳥たちは種の入つた皿の方に跳んで行き、中の紙片をついばむ。

「あんたは性格の强い方です。あんたは赤い髮の男と結婚して三人の子供を持つでせう。金髮(ブロンド)の女に氣を付けなさい。御覧なさい！　御覧なさい！　肥つた運轉手の運轉する自働車が丘をかけ下りて來ます。その中で金髮の女が口をとがらし、身體を前に乗出し――あんたの命をつき拔ける――お氣を付けなさい！　お氣を付けなさい！」

「淑女並びに紳士諸君。私の職業はせり賣屋であります。そこで若し私のいふことが本當でなかつたら私は免許證を取上げられて重禁錮に處せられます。」彼は胸の上に免許證をひろげる、彼の顏から汗が流れて紙のカラーに注ぎ込む、彼の眼は光つて見える。彼が帽子を脫ぐと彼の額には怒れる肉の深い皺がある。誰も時計を買はない。

もう一度氣をつけて御覧なさい！　大きな四輪馬車が中に二人の年取つた、年取つた赤ん坊を載せて搖れ乍ら丘を下りて來る。女はレースの日傘を持上げてゐる。男は杖の節に吸ひ付き、そしてその肥つた二人の老體は搖籃がゆらぐ毎にぶつかり合ふ。さうして、湯氣を立てゝゐる馬は調子をとつて丘を歩み下りつゝ道筋に添うて肥料を跡に殘して行く。

一本の樹の下に、レオナルド教授が、帽子と大學服(ガウン)を身につけ、旗を控へて立つてゐる。教授は人々の顏を見てその運命を告げ知らせるために、ロンドン、パリ、ブラッセルの博覧會から、「たつた一日だけ」こゝに來てゐるのだ。そして彼はニコニコ人々が彼に見て貰ひ易いやうにし乍ら、不器用の齒醫者の樣に、立つてゐる。一瞬間前にふざけたり口汚く罵つてゐた大きな男達が、六ペンスを手渡して、彼の前に立つ。と、その教授のす早い手が印刷されたカードを切るにつれて、彼等は急に眞面目になり、默つて、びく〳〵し、顏を赤くさへしてゐる。彼等は、禁じられた庭に遊んでゐて、樹の後ろから現れ出て來たその庭の所有主に捕へられた小さい子供の樣である。

丘の頂上に着く。何て暑いんだらう！　何ていゝ天氣だらう！　居酒屋は開かれ、群集が押し入る。お母さんは赤ん坊と鋪道の端に坐り、お父さんは黑い、褐色のものが入つたガラスを彼女に持つて來て、それから亂暴にもう一度押し分けて行く。ビールの臭ひが居酒屋からたゞよひ、やかましいベチャクチャいふ聲が聞こえる。

風は鎭まり、太陽は前よりも激しく照りつける。二つのゆり戸の外にはおいしい壜の口に集まる蠅の樣に大勢の子

供等がたかつてゐる。

そして丘の上へ上へと、人々は箒やお化人形や薔薇や羽を持つてやつて來る。上へ上くと、彼等は光りと熱との方へ登つて行き、叫び、笑ひ、キーキー云ひ乍ら、まるで彼等は遙か下の方から何ものかに押し上げられてゐたかの樣そして彼等の頭上高く輝いてゐる太陽によつて、滿ち滿ちた、輝かしい、まぶしい光明の中へ引上げられただ。かの樣であつた。……さうして遂に何ものへ？

（完）

讀後に――マンスフイールド獨自のペシミスムスの詩だ。如何にも高雅で尖鋭で、象徵的表現が實によく利いてゐる。

オールダス・ハクスリの人と作品（C・E・M・ジョード）

田内長太郎譯

――承前――

文人としてのハクスリについてはそれだけにしておいて、ここでモラリスト及び思想家としての彼に筆を轉じよう。

これは私の一根本所信であるが、最高級に屬する文學といふものは、常に文學より以上のものである。凡庸な作家が世の中を觀たままに記錄して能事了れりとしてゐる傍ら、文士であると同時にモラリストである作家となると、詳しく言へば、偉大なといふ形容辭を冠せられて然るべき實際の大作家となると、いづれも、その讀者達を誘うて、彼の記錄する所のものを變更するに必要な努力を彼等に致さしめんがためにのみ、この世の中のことを記錄するからだ。かく凡庸な文藝作家が、好奇心に動かされて、ちやうど婦人が縺れ合つてひどく取亂らかつた店臺の服地をいぢくりまはすやうに、個個の事物をいぢくつたり、個個の人間を鑑賞したりしてゐる一方で、作家となつたモラリストは、道德的秩序を自覺して、その自覺を實行に移さうとする不可抗的衝動に驅られるのである。この意味で、偉大な藝術家はいづれも傳道者である。その中には、當代社會における或特別の變更を可としての傳道者達もある（と言つて、これらの作家もその傳道者仲間の中の錚錚たる者であるが）、してその作家達の目的とする所は、社會的秩序における弊害の除去を主張するにある。ディケンズが屢屢その態度で製作した、チャールズ・リードやキングスリもまたさうであつた。だが、さうした狹義の傳道者的態度をとつた最も偉大な作家達は、エドワード時代のリアリスト達――ウェルズ、ショウ、ゴールズワージ、ベニトである。これらの作家はよくわざわざ廻はり道をして、希望もなければ理想も持たぬ單調無味な、無表情な人人の生活を、際限

もなく詳細に描いたものだが、それには文學をば、讀者の注意を促して國家の腫物に氣づかしめる藝術的一方便として使用したのである。そこで、讀者が氣づいてみると、その國家の腫物に對しては、われわれが全體にその責任を負ふべきだつたのだ。

事實、偉大な作家はいづれも、畢竟するところ或使命をもつてゐる人間である。すなはち、彼は、生命のもつ本能的目的に意識的表現を與へるやうこの世に生み出されて、人間の行狀の新しい照準線、人間の價値に就ての新しい觀念、もしくは人間の本務に對する一層發達した感念（これらは早晩人類の相續財產の一部を形成するに至るであらう）を進んで人人に敎へてやる任に當るのだ。生物學的に觀ると、偉大な作家達は精神的及び心的發展の段階における「變種」である。そして、彼等が彼等を超越する或目的を傳達するための運搬器であるからには、彼等がその書くものに對して責任のないのは、萬年筆がそれを持つ手によつて書かされる語に對して責任のないのと殆ど同じである。

さういふのが、バニヤンやスウィフトやブレイクやトルストイやショウの如き人人の作品のもつ眞の重要意義である。そしてこれらの人人が讀者達に示す所の一層大きな本務、新しい價値、より發達した意識は、讀者達が承認する本務、讀者達が受容する價値、また現に讀者達が據つて以て生活してゐる意識の照準線と對照して、甚だ峻烈に限定せられる故に、それらの偉大な作家は、常にまづ、現實の世の中を痛烈に非難攻擊する。實際、彼等は讀者の心に、罪は彼自身にありといふ感念と他人の犯罪過失に對する責任感とを發生せしめんがために製作する。ここにおいてか、彼等はその程度の差こそあれ、みな諷刺家なのである。彼等はみな、特にその初期の作品において、まづこの世間にぴしぴしと小言をくらはしてかかるのである。

例へば、彼の東洋への航海日記『ジェスティング・ピラト』の始めで、愉快な事についての世間一般の觀念を嘲つてゐるハクスリにそれを聽くがよい。

「船中の誰彼なしに、インドではとても『愉快な事』があるぞといつて僕等を脅かす。その愉快な事といふのは、競馬へ行くこと、ブリッヂをやること、カクテルを飲むこと、朝の四時まで舞踏すること、また遊談無根に耽ることである。ところでその一方、僕等の住むこの美しい、この信ずべからざる世界が、僕等の探檢を待つてゐるのだ、しかも人生は短い、時は恰も致命傷から流れ出る血のやうに、止め度なく流れ去る。そしてこの世界にはあらゆる知識、あらゆる藝術がある……このや

うな世界で、天よ、いはゆる愉快な事を持つことのないやうに、僕を護らせ給へ！　天は自ら助くる者を助く。よろしい、インドにおいて僕のする事は出來るだけ不愉快なものにしてみよう。」

ハクスリの第一の關心事は人間の行爲である。人人はどういふ風に生活して行くか、またどういふ風に生活して行くべきか、これを彼は知りたいのだ。さうしてそれらの疑問に對する解答を知つてゐると時折彼に考へられる範圍で、製作上の主なる彼の目的はその解答の餘澤を人人に與へるといふにある。彼の著作は大戰の後に來た道義頽廢の空氣のうちにあらはれ始めた。四箇年半にわたる堪へ難い緊張から釋放せられて、人人は享樂生活を送らざるを得なかつた。さて、かうした思ひきつた生活態度は、圓熟した賢人にはどう考へられたにもせよ、一九二〇年時代の輝ける青年達には、第十九世紀がひとりよがりに該時代のモラルと稱んだ所のあの禁止や抑制の侮蔑的放棄を伴つたのである。すでに大戰は多くの人心に、現世に對する不確實感と、來世の可能といふことについての不信とを馴致してゐた。何もかもが不確實である所では、具體的でもあり明確でもある「我等いざ飮食せん、明日死ぬべければなり」の主義が熱心に抱懷される、そこで青年達は、現世でモラリティが命ずるままに酒と接吻を遠ざけたところで、來世でそれの償はれる見込が無いやうに思はれて、皆一樣に多かれ少なかれ酒と接吻に親んだのだ。ハクスリの小說『アンティク・ヘイ』がこの氣分を取扱つてゐる。

思ふに、『アンティク・ヘイ』の中に描いてゐるやうな生活に對して、彼が感じた嫌惡の念が、ハクスリにその頃（一九二三年）から人間の行爲についての問題を考へ始めしめたのではないか。この『アンティク・ヘイ』が、その人間の行爲についての問題を彼のためにちやんと準備してゐるのだ、してその問題にこそ、後年の彼の作品のすべてが、多少とも直接に關心をもつてゐるのである。『アンティク・ヘイ』時代から此方彼は主としてモラリストである。

未來の科學的社會を畫いた彼の繪をわれわれの前に掲げて、さあ、この社會がどの點で缺けてゐるのか、言つてくれたまへ、とハクスリはわれわれに乞ふ。その社會は、明かに、精神の活動を缺いてゐる（これは由由しいことである）、そしてその精神を引ずり下ろす肉體は、精神の敵なのである。ハクスリは彼の小說を通じて間斷なく、精神が屈辱的に肉體に左右されることを表示してゐる。わが人生におけるいとも重要な三事件、生誕、戀愛、死において、その支配權を掌握

し、精神を奴隷にしてしまふのは肉體だといふのである。

　さて、ハクスリの作品中のピュリタニズムは——このことは右に數度ほのめかして來た所であるが——十中八九分まで彼のその肉體憎惡に由來してゐはせぬかと思ふ。例へば、われわれをわが愚者の快樂追求に唆ける(けしか)ものは肉體である。だが、諸君は快樂の王國を强襲でもつて乘取ることはできないのだ。さういふことを企てるのが、現代の根本的の過誤であり、ハクスリが倦まずたゆまず暴露してゐるのが、その過誤である。『アンティク・ヘイ』の終りで、ヴァイヴアシュ夫人とガムブリルがタクシを乘りまはす所を讀んでみるがよい。二人はその餓えた心魂を慰してくれる娛樂をもとめて、友人から友人へ、ナイト倶樂部からナイト倶樂部へと、そはそは移り歩いたが、なんにも見出さない、やがて二人はシーヤウォタの實驗室で一憩みしようと行つてみて、一生理學者が人體に及ぼす疲勞の影響を測定するために、ガラス箱の中でさかんに自轉車のペダルを踏んでゐるのを見るのである。快樂探究の生活の悲しむべき結果を道樂に暴露してゐる作品で、これほど人の心膽を寒からしめるものは、いまだ曾てないのだ。ハクスリはかう言つてゐるらしく思はれる、——吾人の追求すべき物は、快樂ではなくつて、正義だ、と。

　新作小說『ガザの盲目』(Chatto and Windus, 定價一〇シリング六ペンス)の中に出現してゐるハクスリの姿は、現時他の一切の問題の光を失はしめてゐる問題中の問題、すなはち、世界平和の問題、に夢中となつた一モラリストの役割で群を拔いてゐるものである。『ガザの盲目』は喜劇的小說(コミク・ノヴェル)ではない——全く極めて珍らしいことには滑稽(ファース)小說である——といふ事實はしばらく措いて、この小說にはこれまでの彼の作品の特色をなしたすべての性質が含まれてゐる。これはある奇妙な時代模樣(タイム・パターン)のうちに書かれてある。第一章には、一人の中年紳士が、彼の過去の寫眞、兩親や親戚の寫眞、小學生達の寫眞、大學生のグループの寫眞を眺めるところを描いてある。この作品はそれらの寫眞からの寫しである。それを詳しく言へば、篇中の主要な二人物、アントニ・ビーヴィスとヘレン・アムバリの生活からとつた場面(シーン)や事件が、秩序立つて排列されてあるのではなく、ちやうどカルタ札の一組からバラバラとこぼれ落ちたカルタのやうに、ごちやごちやと抛り出されたままで仕組まれた、文學的瞬間撮影(スナップショット)のセリズがこの小說なのだ。

　しかし、この作品の眞の內容と目的は、人生に對する平和主義的一態度の丹念な描寫である。もしもこの世界

に平和が確立されるものなら、それはまづ人人の心の中に確立されなければならぬ、ハクスリは彼のパンフレット『諸君はそれについて何をなさんとしてゐるか』の中で、新たにさう論じてゐる。換言すれば平和主義といふものは、われわれの個人的關係に於てまづ現はれなければならぬ一信條である。そのパンフレットの中で彼は、全世界にわたつて實践的平和主義者達の小さな細胞を確立することを勸告した。さうした運動の編成、及び、一歩進んで、自己の生活においてその平和主義的理想を表白しようといふビーヴィスの企圖が、この小説の終るまでには主題目となつてゐるのだ。では、個人的平和主義といふものは一體何處から始まるか。

「それは民衆を愛するといふ困難な技術の練磨に勉めるところから始まる。」とビーヴィスが答へる。「だが大抵の民衆は極めて嫌やらしいものである。」「われわれが彼等を嫌惡するからこそ、彼等は極めて嫌やらしいのだ。もしもわれわれが彼等を好いたら、彼等は好もしいものになつてゐただらう。」「それに間違はないと思ふか。」「確に間違つてゐないと思ふ。」「では、その後で君は何をするか。」「そこには『その後』はない、」とビーヴィスが答へる、「何となら、言ふまでもなく、それは一生涯の仕事なんだから。」

われわれはすべて（と彼は述べる）、「すべての他人を愛し得る。けれどもわれわれはその愛をこれまで人工的に制限して來たのだ。憎惡と暴力といふ因襲によつてだ。その愛を一家一門や黨派の内部に、また階級や國家の内部に制限したのだ。諸君の友人達はそれらの制限を除去したく思つて、なほ一層の憎惡と暴力を用ひてゐる——すなはち、その制限のそもそもの原因をなした手段とそつくり同じものを用ひてゐるのだ。」

小説の終りでビーヴィスはその平和主義者の問題に身を以て當ることになる。もしも彼が尙もその平和主義を唱導してやまないなら、「闇打をくらはすぞ」といふ匿名の脅迫狀を受取つたのだ。彼はその手紙が冗談ものではないと信ずる。この局面に彼は直面することができるか。世の中を改善してやらうなどといふその仕事を何で全部放擲しないのか。

「どうしてお前はそんなお馬鹿さんなんだい？」小さな聲が質問しはじめた。「どうしてお前は出しやばつて、信念だとか人生觀だとかいふ厄介な荷物を脊負うんだい？　どうしてまた、誰かを裏切ることのあるやうな立ち場にその身を置くんだい？　そして自然がお前にさせようと思つてゐた事柄をするやうに——お前の指定ボックスから芝居を見たり、その批評をやつたりするや

うに、どうして廻れ右をしないんだい？ 結局、お前のやつてゐる事は、どうだつてかうだつていいことぢやないか。いや、よしんばそれが大事のことであらうとも、全體お前に何ができるんだい？」

どうして「お前の指定ボックス」へ立歸つて、「演劇批評」をやらないのか。これこそハクスリが、現在自分にむかつて明かに訊ねてゐる問題であり、それに對して、自分はもはや皮肉な哲學者の超然たる態度に復歸することは不可能だと答へてゐるものである。そこで、この最近の小説は、ハクスリの思想を支配する問題を、新しい一形式で發揚してゐるのだ。その問題といふのは、永遠の疑問によつて提出されるもの、人間は如何に生きるべきか。彼の本務は何であるか。――なばり――

譯者附記。私はまだ『ガザの盲目』は讀んでゐないので、右に引用されてある對話は、すべてその意味の譯出だけにとどめたことをお斷りしておきます。

岩倉譯『理想の家族』正誤表

頁	行	誤	正
目次一	六	ルフト鑛泉湯	空氣浴湯
本文三	一	同	同
一七	三	あつだ。	あつた。
五一	八	二入	二人
八三	一一	早く早く急いで	停めて
一六六	二	ないことを	ないことは
一九九	一四	開かんと	聞かんと
二一〇	九	そんなとは	そんな事は
二一八	六	若しい	苦しい
同	六	兄	弟
同	一一	同	同
二一九	三	同	同
同	四	同	同
二二二	五	同	同
二三八	一	ルフト鑛泉場	空氣浴場

時評

「築地」よハムレット根性を捨てよ

——シルレル及びシルレル愛好の分析——

高橋鐵

私は「築地」を愛し續けて來たファンの一人として、今度の「群盗」を見ながら、胸中に失望と嗤ひがこみあげて來た。そして最後にいらだちの果の溜息を火焔のやうに吐いた。實際今月の「築地」はスバラシイ喜劇である。すなはち、いつまでも嬰兒症（インファンティリズム）（小兒病（キンダークランクハイト））にからみつかれた「英雄」フリードリッヒ・シルレル及び「築地を形成する人々」の危險な稚戯である。（「東童」の方が、皮肉な事には、却つて大人である。）

なぜ、さうであるか。私は——私が今迄自分の出來る限り「築地」に盡して來たことは「築地」の諸君の中知つてくれる人も多いだらうが——進歩的な心理學徒として、諸君ばかりでなく世の文化人に、公開狀のつもりで、分析し解明しやうと思ふ。

社會の進展をみる時その潮流を底から動かしてゐるものが二つある。一つは、その「社會的・政治的及び精神的の一般生活過程」を決定する生産關係（從つて純然たる經濟鬪爭）の波紋であり、もう一つは、人類が當分脱する事の出來ない個々人の家庭コムプレクスである。「死せる勞働」の蓄積によつて人類進歩の速度を鈍めるところの强權者は、いふまでもなく非である。

ABHUB

アブフウブ

他の學問がアブフウブ（屑）として棄てたものゝ中から、分析は眞理の黄金を探し出す。

幽靈がものを云ふ

不老泉院主

幽靈がものを云ふと云ふと氣味が惡いやうだが、大抵の人間はみなコムプレクスの幽靈にとりつかれてゐるので、自分でものを云つたつもりでゐても、實は幽靈に云はせられてゐるのであるのが通例だ。だから分析者が聞いてゐると大抵の人の云ふことは氣味が惡い。

十二月上旬頃、青野季吉氏が母子扶助法案の缺陷を指摘して、私生兒をその恩典から除外したことの片手落を難じ、序

が、それに對する階級闘爭（憎しみのルツボ）の中に、今迄、果して、不純な精神傾向がまじつてゐたことはなかつたらうか。

　云換へるならば、ヘーゲルの辨證法（正・反・合）の心理的基礎には、人間の始原的に抱くエディ・ポス・コムプレクス（父に對する子の、愛憎錯綜した反逆精神）が根柢の力をもつてゐるかも知れぬ。けれども、唯物辨證法の公式にはそのやうな「精神」が入り交ることは不純である。

　それにも拘らず幼稚なアナーキストをはじめとして、初期の公式的マルキスト及びメチヤクチヤな反動革命家には、このやうな、社會進展上の必然的經濟闘爭の觀念過程へ幼兒期から抱いた純精神的な家族闘爭心理が忍び込んでゐる。

　そして「築地」の喜劇も亦、こゝから出發してゐるに違ひない！

むごい斷層をくつて「大衆的」に立ち直つた築地は、ソヴエート劇壇の一方法論を、（社會狀勢の雲泥の相違を無視し）「飜案」して、古典現代化の方針を採つた。さう、まづ、「ハムレット」である。「ハムレット」は大體モダンもクラシツクもない家族闘爭心理の精巧な演劇化である。父を憎む子（ハムレツトの場合では、その露骨さを逃げて、よこしまな義父――伯父對甥）、母を戀人の如く奪還することが、實際の戀人よりも重大な息子――早く云へば、これ丈ではないか。

　「築地」はその「ハムレット」公演後、二三の例外を除いて、年中低徊し續けた。維新革命の志士も繰返された。娘コムプレクスのファウスト博士の亡靈も現れた。そして、いよ〳〵今度の「群盜」に至つたが、よく考えて御覽なさい。（いや、それほど熟考しなくとも、素直に心の中を反省すれば判

に自分の私生兒であることを告白してゐたが（東朝紙上で）、私は氏の率直なる告白には感動し同情を禁じ得なかつたが、母子保護法案への批難には幽靈の聲が聞え、殘念であつた。

　私生兒を扶助案の對象から除外したことはいゝとはいへないが、併し役人としては尤な點もあると思ふ。勝手に私生兒を拵えておいて、お上の扶助を要求してもいゝとなると、私生兒製造を奬勵又は是認するやうな意味に解釋せられる結果にならないとも限らない。さう云ふ點は役人としては警戒するのは尤なことで、この制限の意味は親への警告であつて、子供への警告ではなかつたのだ。が、事實上一番惱むのは子供の方なのだから、私生兒をその法案の恩浴下に入らしめることに就いて當局に再考を求めることは結構であるが、その片手落の故に階級的だのイデオロギーだのとやかましいことを云ひ出すのはをかしい。青野氏自身の個人的境遇がさう云はせてゐるのだとすると、なほさら困る。人間は正義だの公平だのと云つても、大抵は（少くとも分

然としやう）シルレルは、畢竟、「劇作家になつたハムレット」に過ぎないのだ。

シルレルの由々敷き事蹟はこゝに列擧するまでもない。彼こそは、一言にして云へば、封建制の葬鐘、マーカンチリズムの進軍太鼓を叩いた英雄である。そして彼自身が、封建制のたゞ中（お大名の侍醫の守の家）から生れて、殼から質的轉化を果しにうまれて來たのだ。カントの嚴正なラショナリズムと、ゲーテの卒直な「リベラリズム」との矛盾の間をさ迷つて悲壯な太鼓を狂ほしく高鳴らせた。

座右の「群盗」特輯の「テアトロパンフレット」にある、ピスカトールの説によると、「彼はブルヂョア革命家であり、現代のブルヂョア階級にとつても尙革命的であり過ぎるくらゐだ。」つまり、所謂革命精神の永遠の指導標ではあらう。けれども、かういう精神傾向は、日本の新劇界で唯一つ指導的に輝く「築地」が、時者今也とばかりに、頭上にかつぎあげるほど有意義なものではあり得ない。

シルレルの笛で何を踊らせやうと云ふのだ？　シルレルの太鼓——十八世紀の埃が舞ひ上る狂ひ太鼓で、進歩的な民衆の胸がお神樂でも踊り出すと云ふのか。

それは確かにシルレルの劇作法は革命的であつたに違ひない。そして、その頃の民衆は「群盗」初演の第一日に「劇場を精神病院の樣にした」に違ひない。しかし、私は考えた。シルレルの代表作（後述）は殆んど全部——殊に若き日の「群盗」は、いはゞ、思春期の妄想である。又、それだからこそ、社會史上の思春期時代（シュトゥルム・ウント・ドランク）に生るべき

析せられるまでは）個人的コムプレクスから物を云つてゐるので、そのコムプレクスの幽靈を成佛させない以上は、云ふこともすることも地にはつかないやうである。

山本有三氏の志賀曉子辯護については時評欄に倉橋君が痛論してゐるが、山本氏の母コムプレ　スの幽靈的囈語に動かされて、早速執行猶餘にするなんて、司法當局もあんまり定見がなさすぎはしませんか。結局、檢事も、倉橋君の云ふ通り、母コムプレクスの幽靈にとりつかれてゐるから、することと云ふことに全く確信がないので、一寸大きな聲で何か云はれると直ぐフラフラと、暗示をかけられた催眠術被驗者のやうに妄動し出すのだ。志賀曉子は少し獄に入れておく方が本人のためでもあつたのだ。

十萬圓使途論

十萬圓の金を一日中に使ふことが出來るか否かと云ふことに就いて論爭してゐる或る夫婦の傍に座してその熱烈なる論

ものであり、歡呼を浴ぶべきものであつたのだ。なぜならば、封建制といふ大家族主義の崩壊をシムボライズするのは、シルレルの家族コムプレクスから昇華された反逆精神によつて、最も激情的に仕組まれてゐたから。

例示しやう。シルレルは「群盗」に於て、「家」から飛出し「家」の上層であるところの貴族階級に反逆した。又、父を嫌悪し兄弟(カイン)コムプレクスを聲高に叫んだ。そして、こゝにも淡く（未だ抑壓して）表現された戀人アマリヤ（母代償）と實父との愛を、後の「ドン・カルロス」では露はにした。即ち戀人が義母（父の所有）になるといふシチュエーションをみよ！又、「陰謀と戀(キャバーレ)」とに於ては、王子が戀人を我が手から奪はれた爲に彼は父及び君主としての父に反逆する。又、「メシナの花嫁」に於ては、兄弟が一人の女を實妹と知らずに爭ふ。最後に、「ウォルヘルム・テル」に於ても彼は領主（無意識心理からみた父代償）を倒す。――かうして、シルレルは一生、母或ひは母代償のために、父や兄弟と鬪つた。これがフリードリッヒ・シルレルの「革命精神」である。その中に、新興階級の經濟鬪爭が、（もしあるとしても）たゞ〳〵自由々々と叫ぶところのブルヂョア革命の影法師か、乃至は、思春期の猪突的な、解決のない正義觀から淵源する狹量な暴力の道である。

彼は、――及び、「築地」はこの點に於て經濟鬪爭の純理をみずして、不合理社會なる大蛇に刄向ふ盲の小蛇であらう。しかも、その反面、シルレルは、精神分析學の法則の通り、母と母代償との爲に熱情を捧げつくしてゐる。上記の諸作は云ふまでもなく、「マリア・スチュアルト」に於ては、巨母(マグナ・マター)たる女性の墮地獄を滿腔の詩精神で辨護し、「オルレアンの少女」に於

を傍聽したことがあつた。妻君はデパートへでも行つて欲しい着物や家具を片端から買込めば十萬圓はおろか、二十萬圓でも三十萬圓でも一日にして使へると云ふのであつたが、夫君の方はそんなに無方針に買ふとすれば買へるが、それは飽迄も假定説であつて、我々の生活の實際に即して、十萬圓を有効に消費しようとするならばそれは不可能だと云ふのであつた。兩々相持してなかなかに讓らず、結論はいつつくべくとも思はれなかつたが、自分はそれを傍から聽いてゐて、夫妻兩人に對してをかしくもあり氣の毒にもなつて來た。何となれば、彼等は眞面目によく働いてゐるのだが、生活はなかなか樂にはならないので、妻君の方は夫君に氣の毒とは思ひつゝ平生の不平をこの論に托して夫君の面目上に吐きかけてゐるのだと云ふ事が私によく分つたし、夫君の方も妻君に同情はしてゐるのだが、自分の意久地なしに就いていさゝか嘲弄せられてゐるやうに僻んで感じて、それへの辯明をせんとするのが、その論爭の根據であることが、私にはアリアリ

ては母なる母國を護る少女（をとめ）を狂信的に讃えてゐる。

母なる母國（分析學は大地特に祖國との無意識的な同一視を屢々證明した）！　シルレルが反逆家であつて且愛國家を兼ねてゐることは、不思議でない。全作悉く、そこにおちついてゐる。その中でも「フヰエスコ」の如きは主人公のふるさとゼノアへの愛と征服慾で漲つてゐる。（分析的に觀ればサデイズムにまで發展する愛の猛しさ迄感じられる）

元來、シルレルは、自我を對象に投入すること（同一化）のはげしい人で、よく自分の書いてゐるヒーローやヒロインの運命を現實のやうに、よろこんだり悲しんだりしたと傳へられてゐる。それは、氣候にまで影響されてどんよりした日などは意氣銷沈してペンもとれなかつたと云ふではないか。

畢竟、シルレルはブルヂョア自由主義といふ社會革命の時代にあつて、心的外傷（激しく深い家族コムプレクス）の詩をかなでた天才に外ならぬ。社會變革期に揺ぐ思春期妄想の上層建築が設工した代表者に外ならぬ。アダム・スミスを唄ふハムレットに外ならぬ。

「築地」よ、溺れる築地よ、諸君等の心の闇にある家族コムプレクスは、いつ迄、文化主義の妄想だけを胸に抱いて、ハムレットの藁を摑んでゐるのだ？　いつまでも〳〵自己分析の出來ぬ嬰兒症（インファンチリズム）の笛で、社會進展の舞がなし得ると思つてゐるのか？　諸君達にしてみれば、眞劍なそして貴重な運動が、却つて盲蛇を動かす無駄な寧ろ有害な喜劇と化してゐることに氣が付かないのだらうか？　諸君等のハムレットも、いまだに叫んでるじやないか？

——″To be or not to be. That is the question,″

——愛するが故に苛酷に・一九三六・一一・一三——

と見えすいたからだ。つまり二人は議論をしてゐるのではなく、不平と劣等感とのコムプレクスの幽靈が取組合ひをしてゐるに過ぎないのであつた。

西洋の分析漫畫

日本にはまだ分析を意識した漫畫などは現れないが、西洋には流石に既にさう云ふものが、大分出てゐるらしく思はれる。こゝに紹介したものは、『カレント・オヴ・ザ・ワールド』誌昭和十一年十一月號から（同誌發行所から銅版を借用して）轉載したものであるが、西洋の元の雜誌名は聞き洩した。多分アメリカの雜誌であらうと思ふ。題には″He has an Inferiority Complex″（「彼は劣等感を持つてゐる」）とある。インフィーリオリテー・コムプレクスなど、云ふ語は、分析學徒の間ではあまり用ゐないが、一般人の間には（殊にアメリカでは）非常にポピュラライズされてゐるらしい。

圖中、中央の料理人だけが、低い帽子を被つて、他の高い帽子を被つてゐる料

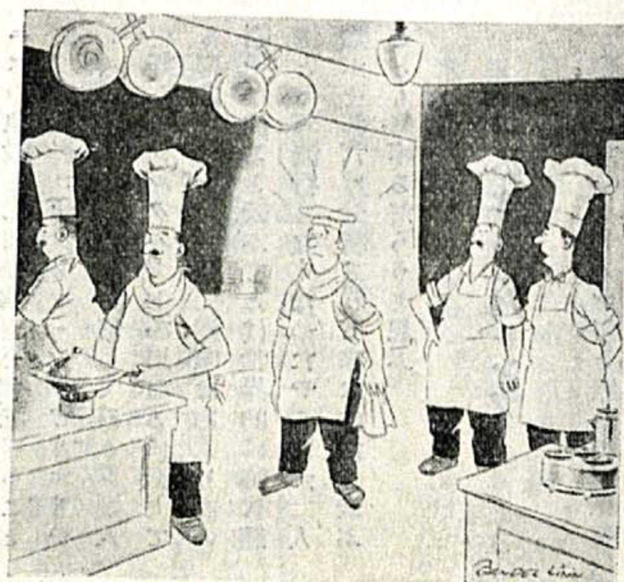
時言三題

土屋秋實

（一）人民戰線と國民戰線との對立を分析す。

人民戰線と國民戰線との對立、鬪爭は流行病の樣に世界的傾向になつてきた。現代の張切りボーイ、張切りガール達は、そのモダンなものはコムニズム的人民運動の襁褓を尻に下げて、未來に搖籃の夢を求めつつ、晝の世界（個體保存本能的、經濟的、階級的世界）に張切つてをり、そのクラシックなものはファッシズム的國民運動の襁褓を尻に下げて、過去に搖籃の夢を求めつつ、夜の世界（種族保存本能的、家族的、民族的世界）に張切つてゐる。搖籃の夢に滿ちたパラダイスは、西の國では「父の國」にあり、東の國では「母の國」にある。現代の張切りボーイ、張切りガール達は、搖籃の夢を追ひつつ、出產時の苦悶を强迫的に再現しようとしてゐる。天地が自分の力で自分を創造するとき諸遊星が深紅の太陽から離れる際に經驗した苦悶。氷河時代において種族が經驗した自然に對する血みどろの鬪爭の苦悶。出產の時の血の苦悶。その血の苦悶は、個人的に又社會的に、一定の時代から次の時代に移る際に「遷移の儀式」（長崎文治氏の說參照）として强迫的に反復再

理人たちがこれを嘲笑してゐるやうな表情を示してゐる。また他の料理人たちは



大抵は口髯を生やしてゐるのに、帽子の低い男だけが無髯であるのも偶然でないやうである。髯は高い帽子と共に屢々ペニス・シムボルとなるから。

高い帽子を被ると云ふことが劣等感のないことを意味し、低い帽子を被ることが劣等感あることを意味すると、公式的に定まつてゐるわけでは必ずしもなから

現される。現代においてこの「遷移の儀式」は、頽廢的ジャズ音樂の莊嚴なりズムに乘りメロディーに醉ひつゝ、コムニズムとファッシズムとの鬪爭による血の儀式としておごそかに進行してゐる。これは、社會的には資本主義時代から次の時代に移る際の「遷移の儀式」であり、個人的には青年期から壯年期に移る際のそれであると思ふ。血の中には生の本能と死の本能とが潜むでゐる。「遷移の儀式」は誕生の儀式であると同時に葬式である。「三つの天の社が地上にある。夢を一杯入れた搖籃、快樂の園、平和に滿ちた柩。」(ペエテル・ローゼッゲル)

おごそかに「遷移の儀式」が進行しつつある現代社會の中で、次の樣な三つの祈禱が「神」に捧げられてゐるのを私の心は聽く。

(1)天なる御父よ！マルクス＝エンゲルスを天父とし、レーニン＝スターリンをその子としてのキリストとし、コムニズムを聖靈とするコミンテルン宗の信者に祝福を與へ給へ。アーメン！

(2)天なる御父よ！皇帝を天父とし、ヒットラー＝ムッソリニーをその子としてキリストとし、排外(父)愛國(母)の精神を聖靈とする西の國のファッシズム宗の信者に祝福を與へ給へ。アーメン！

(3)天なる御母よ！國土を天母とし、　　をその子とし、愛國の精神を聖靈とする東の國のファッシズム宗の信者に祝福を與へ給へ。ナムアミダブツ！

儀式の進行につれてこれらの祈禱はいよ〳〵激しくなつてゆく。だが精神分析によつて無明を解脫(無意識願望を意識化)すれば「雨あられ雪や氷とへだつれど、おつれば同じ谷川の水」(一休)＝「一切衆生悉有佛性、草木國

う。劣等感あるが故に反動構成的に高い帽子を被ると云ふ場合とてないことはない。たゞこの場合、他の者がみな高い帽子を着てゐるのに、彼だけ一人低い帽子を被つてゐると云ふことは、神經症的なものを豫想せずには考へられないことだ。この意味でこの漫畫の目ざすところは誤つてはゐない。高い帽子が偉大なペニスの象徵として優越感を意味することは、アングロサクソン・シウピリオリチー(英人の優越)を自信してゐる英國人の好んでシルクハットを用ゐるに徵しても否定出來まい。併し近頃はあまり高い帽子を被ると云ふことは世界的に時代感情として流行しなくなつたやうだが、人類がそれだけ分析されて來たのだと云ふことも出來るだらうと思ふ。

禮砲のアムビバレンツ

アメリカのハドソン河を遡るわが練習艦隊に對してアメリカの海軍が禮砲を發射してゐるところを朝日のニュース・トーキーで見たが、こゝにも愛憎同型のア

土悉皆成佛」となり、煩惱は卽ち菩提となる、祈禱、求道は妄想の所產、妄想旣に無くなれば祈禱、求道、解脫等は單なる乾屎橛（糞かきべら）にしか過ぎなくなる。

人は誰でも「道を求めて南山に到り、道を忘れて南山より歸る」ことによつて始めて現實的な人間になる

スペインにおける人民戰線と國民戰線との流血の闘爭も、意識心理的には個體保存本能的、經濟的、階級的闘爭の政治的昂揚に相違ないのだが、無意識心理的には種族保存本能的、家族的、民族的闘爭の政治的昂揚であると思ふ。物事の本質を把えるにはその表裏を兩方とも觀察する必要がある。スペインの國民はナルチス的に對立する二つの陣營に集結して、相互に父殺しをやりながら母なる祖國の奪ひ合ひをやつてゐる。そして、その贖罪のために戰場の花と散る。國民は恐ろしい戰場で甘い戀をささやき合ふ。戰慄する戰場！　そこが無意識心理的には同性愛心中や戀人同志の情死の陶醉場となる。スペイン國民の南國の情熱はいまや死の裝束を著けて踊り狂つてゐる。

「夏草やつはものどもが夢のあと」

（一一・一一・一五）

（二）橘孝三郎氏の母コムプレクス

元愛鄕塾々頭で、某右翼事件に連座した結果として現在小菅刑務所に服役中の橘孝三郎氏が、病母と病妻に遇ふために假出獄を許されて故鄕に歸る途上、次の樣な告白をしたことを、報知新聞の十月廿七日朝刊第三面記事は報じてゐる。

ムビバレンツを見て、面白かつた。憎惡の場合には實彈を發射するが、愛情の場合には空砲を發する。外形だけを見てゐると、少くもその表現樣式に差違はないのだから面白い。大砲ばかりではない。軍隊では敬禮する場合に劍を拔いてその意を表はすこともある。

袋と地名

大地は人類のお袋（母）であるためか袋のついた地名が、日本には（殊に東京以北に）多い。それに就いて大槻稿『リヤ王と缺皿』に多少の言及があるが、私は近頃また東京から足利へ行く途中に、「大袋」と云ふ地名のあることを發見してよろこんでゐる。東京附近から東北の方にかけては旣に大分調査も出來たが、（と云つてもまだまだ不完全だが）中部西南地方にはないものか。本誌讀者の間から御報告あらむことを期待する。

言葉の妙味

山川菊榮氏が十月二十三日の東朝『槍

「慰めて勵ましてやるべき僕が、年老いて病める母からまた命數つきた妻から逆に慰められた。二人は甘んじて僕の踏み臺になつてくれたのだ。泣いた。涙をぬぐつた。力強い恩愛の情に思はず溺れようとしたのだ。しかし考へた。恩愛に溺れてはならない。人間橋としては大事な仕事をもつてゐる身だ。僕は恩愛の捨て難き思ひを獄中幾夜も泣明した。出來れば、母を乳母車にのせて野路を歩きたいし、子供と手を組んで野良仕事がしたい。しかし僕の憂國の情は、そして社會情勢は、そんな事を許さないのだ。仕事の前には老母も忘れ、病妻もない。もうこのまゝ二人に逢へないかも知れぬと覺悟はきめてゐる。僕は二人が甘んじて捧げてくれた踏み臺にのらう。そして僕も一身を君國のために捨てよう。」

何といふ「美しい」愛情であらうか！こゝに「大切な仕事をもつてゐる身」であるナルチスト「人間橋」の母定着が告白されてゐる。こゝに「母を乳母車にのせて野路を歩きたい」と語つてゐるのは、無意識心理的には恐らく「自分が乳母車にのせられて母と野路を歩きたい」との幼兒的願望であらう。或は母をわが娘にしたいとの幼兒的恩返し空想であらう。この際乳母車が母胎の象徴であり、野路を歩くことが近親愛的行爲の象徴になつてゐることは精神分析學上明瞭である。また「子供と手を組んで野良仕事がしたい」と言つてあるが、こゝでは同氏自身が母と同一化して子供において自分の過去の姿を想起してゐる樣だ。從つてこれも「母と手を組んで野良仕事がしたい」との無意識願望であらう。同氏の農民的無政府主義に基くファッシズムの無意識心理的根據はこゝに由來してゐる樣だ。

次に「しかし僕の憂國の情は、そして社會情勢は、そんな事を許さないのだ。仕事の前には老母も忘れ、病妻もない」と同氏は自分の無意識願望を理

騎兵』欄に『標準語の標準化』と云ふ題で書いてゐたところは、社會主義的な感情から言葉を見てゐる鈹睨みがあるので、一寸訂正して見たくなつた。氏はかう云つてゐる。

「自分のものにお帽子、お靴といふ者はないのに、自分の手紙をお手紙といつたりする人が隨分多くなつてゐる。」

これはたしかに誤法であるが、併しその無意識感情的根據は、自分の手紙でも相手に向けてゐる以上、その限り敬重しなければならないと云ふわけであらうと思ふ。他人には差向けない、純粹に自分一人に差向けてゐる靴や帽子には從つておをつけないのだ。尊敬する人に差出す手紙は、誰だつてうす汚れた便箋封筒やお粗末な文字、言語は用ひない。卽ち手紙それ自身が既に鄭重になつて禮裝してゐるのだから、それを呼ぶ名詞にも自然「お」の字が附くやうになるのでは當然である。故に意識論理的には間違つてゐるが、無意識論理的には立派に筋が通つてゐるのだ。そこを理解しないで、たゞ批難したつて始まらないことだ。

痛付けしてゐるが、前記の様な幻想的に回想され、ナルチス的に張切つた無意識願望は現在の老母やその代償としての病妻で滿足される筈がない。それを滿足せしむるものは、個人的には過去において女盛りであつた時の母の張切つた俤であり、民族的には太古の母權的氏族時代における原始的母性の俤であらう。同氏の「憂國の情」も、恐らくは自分の母及び民族の原始的母性に對する激情ではあるまいか。この様な激情には超自我の峻嚴な苛責によつて發生する罪障感が伴ひ、その罪障感に基く自己懲罰慾として自殺願望があり、更に母の象徴としての國土を父の象徴としての外國及び新興階級（プロレタリアート）に奪はれはせぬかとの不安が伴ふ筈だ。從つてその不安は、同氏の妻に愛される同氏の子供さんに對して、同性愛に基く投出的嫉妬を同氏が抱いてゐる事をも證明する。

有能な人々が人類社會のために奮闘してくれることは有難いことに相違ないのだが、それがもし橘氏の場合における様に幼兒的コムプレクスに基くものであるならば、恐らく橘氏自身とコムプレクスされた國民はファッショ的統制の「乳母車」にのせられて、祖先傳來の古めかしい「乳房」を含まされることになるだらう。そしてこの事が國民生活の向上と人類社會の發展とのために資するところあるか否かは、やがて國民の生活經驗がそれに對して正しい生活者としての批判を與へるであらうと思ふ。　（拾壹、拾壹、拾壹）

（三）岡邦雄氏の娘コムプレクス

人間のあらゆる行動（文化的、政治的、經濟的、性的）は、個人的にはそ

山川氏はなほ續けてかく論じてゐる。

「また童謠などに出て來るお空、お道なども妙なもので、この流儀で行くと、お空にお雲が出たり、お道にお松が生えてゐたり、おトンボがゐたりしなければなるまい。」

氏はこのやうに「妙なところに無暗におの字をつけて叮嚀がる」ことを難じてゐるのであるが、これ等は別に叮嚀がつてゐるわけではないのだ。叮嚀がつてゐると思つたところに氏の社會主義的感情の先入見（コンプレクス）があると云ふのだ。何となれば、叮嚀がることは尊敬を意味し、尊敬は階級別を豫想し、階級別は氏には不正を意味するらしいから。

ところで、これ等の場合の「お」は必ずしも敬語ではなく、寧ろ親愛語である。幼兒又は原始民に於けるアニミスム（萬有有靈觀）を意味してゐるのだ。子供ばかりではない、田舍へ行くと、今でもお婆さんたちは「お芋」どころか「お芋さん」と云ひ「おくどさん」と云ひ、「お豆さん」など、云ふ。何もかも擬人的に見て、それを親愛してたので、

のイデーに基いて行はれ、社會的にはそのイデオロギーに基いて爲される。そしてイデー及びイデオロギー（超自我）は個人及び社會の個體保存本能的、經濟的、階級ロゴス（自我）と種族保存本能的、家族的、民族的パトス（エス）との兩者から規定されてゐる。

最近左翼評論家の岡邦雄氏があまり新らし味のない「新道德論」や「新戀愛論」を眞面目くさつて盛んに提唱されて居られる様だが、私はその根柢に現代社會及び岡氏の個人的なロゴスとパトスとが潜むでゐるものと思つて注目してゐた。ところが報知新聞の十月廿二日朝刊第三面記事は「評論家岡邦雄氏（四七）が新戀愛論を實踐し、廿年來の妻みつ子さん（四四）と六人の子供のある家庭を解消し若い愛人桝本節子さん（二六）と結婚するとの報は多くの話題と問題とを投げかけた。岡氏はみづからの理論を以て家族の說得に努めて居り、家族はあくまでも反對して飜意させようと努力してゐるが、今や引戻すすべもなく、たゞ決裂の時機を待つばかりとなつてゐる。」とのトピックを報道してゐる。

岡氏はその「新戀愛論」（婦人公論十月號掲載、若き女性への手紙）の中で「僕の戀愛論には二つの根本テーゼがあります。その第一は、戀愛と結婚との同一性のテーゼ、第二は、戀愛當事者である二人を結合する眞の紐帶となるものは協同の仕事であるといふテーゼです。」と主張し、更に、「僕は戀愛を成立せしめる基礎條件として、第一に物質的條件、第二に肉體的條件、第三に精神的條件を擧げるものであります。」と述べて居る。しかし岡氏は、協同の仕事といふ概念を單に個體保存本能的、經濟的、階級的仕事としてしか理解して居ない様だ。私はこの外に種族保存本能的、家族的、民族的仕事

山川氏の云はれるやうに「お」をとつて了ふことの方が階級的であるのですぞ。但し私は「階級的」が公式的に悪いと云ふ風に考へてゐるほど社會主義コムプレクスに取つかれてはゐないので、氏の云ふ意味にも理解は持つてゐるのだ。が、何れにもせよ、言葉の問題を論ずるならも少し心理學的に考究してからにしないと馬鹿げた片手落になりますぞ。元來、親愛語であつたもの、、漸次に敬語となつて變化した機制に就いては私はまだ何も考へてゐない。

やくざは偉い

倉橋久雄

新宿にムーランルージュといふレヴュー小屋がある。仲々機智的なものを見せて娯しましてくれる。その場限りで笑ひこぼして了ふ性質のものであるが、惜しまれるのでその一つを紹介し、分析の科學としての優位性によつて、こゝに機智

といふ意味をそれは含むでゐると思ふ。そしてその協同の仕事は、この二つの仕事を基礎にして文化的、政治的、仕事にまで高められてゆく必要があると思ふ。次に岡氏は、戀愛を成立せしめる基礎條件として物質的、肉體的、精神的三條件を擧げて居られるが、これは戀愛を成立せしめる基礎條件でなくして結婚を成立せしめる基礎條件だと、私は思ふ。結婚はこの三條件が具備されなければ成立し得ないが、戀愛は精神的條件の具備だけで成立し得るのだ。岡氏が主張する「戀愛と結婚との同一性のテーゼ」は、それが「戀愛は結婚にまで發展する必要がある。結婚にまで發展し得ない戀愛は病的な戀愛だ。」といふ意味なら正しいが、それが「戀愛と結婚とは同一物だ。」といふ意味なら正しくないと、私は思ふ。戀愛と結婚とは明らかに同一物ではない。結婚は男女がその性的結合を完成するために營む共同生活であるが、戀愛は幼兒期の部分性感的な性的經驗が條件反射されて發生する精神現象なのだと思ふ。

從つて私は、戀愛は結婚生活に必要な物質的、肉體的、精神的條件が具備されることによつて始めて結婚にまで發展し得るものであり、その結婚を成長させ完成せしめるためには、その結婚の基礎をなす物質的、肉體的、精神的條件に基いて個體保存本能的、經濟的、階級的仕事と種族保存本能的、家族的、民族的仕事との二つの協同の仕事が文化的、政治的仕事にまで高められてゆくことが必要であることを主張したい。

岡氏が主張する協同の仕事といふのは、ナルチス的な經濟的＝文化的、政治的仕事のことである樣だ。そしてその戀愛對象の桝本節子さんは恐らく娘さんの代償ではないかと思ふ。岡氏は四十七才である相だがその年頃には誰

供養を營むことにする。

赤城をおちて來た國定忠次の乾分達、その中の一人が路傍に建札を見付け「おい見ろよ」と他のに注意した、と一人が「親分も偉いもんだなア」と感心すれば、別のが「なにしろ教科書にまでなるんだから」と云ふ。その建札には筆太に「國定教科書」と書いてあつた。

これなど機智としても相當なものであらうと思はれる。さてその笑ひは何處からどうして生れたか、試みに分析して見よう。教科書とやくざ、およそ觀念上同一視すべからざるものが巧みにからみ合つてゐる。そこからまづ笑ひは出てくる。だが、その笑ひは八百屋の包紙に教科書の一部を見出したほど不快なものではない。もつと朗かなものである。ではその朗かさは何處から出るか。それは忠次と云ふ講談種の英雄に對してもつ愛情からであらう。いはゞ忠次は幼兒的な自己を滿足させてくれる、さうした意味での教科書の一分野をなしてゐるからであらう。それと別な教科書、過剩なエネル

しも娘コムプレクスに基く戀愛衝動が起き易いのが普通だ。現實に生きるためにはその衝動を精神分析によつて克服することが必要なのだが、岡氏はその努力を回避し、お手のものの唯物論的「新戀愛論」によつてその衝動を理窟付けしてゐる樣だ。辯證法的唯物論は哲學的な道具で、それはモーターやエンジンと同じ樣なものだ。それなのに、自ら「唯物論者」と稱して、その道具と情死する樣な氣持でそれを抱きしめ、その道具をいい氣持で自慰的にもてあそむでゐると、その道具にはね飛ばされて大怪我をするから御注意が必要だ。

岡氏の長女早苗さん（二一）は前記の報知新聞で次の樣な「父への抗議」を公開してゐる。「ショパンの雨だれはこんなに鋭角的であつたよと、雨の降る夜、お父樣とよくいろんなお話しをし合ひましたね、社會觀、生活觀、モラル、そういふ事にノンタッチだつた幼い私達弟妹を前にして口ぐせのように、『人間は自分一人で生きてゐると思つてはいけない。社會が自分を生きさしてゐてくれるのだ。だからエゴイズムなんていふものは絶對に通らないのだ。』と言つていらした遠い日からのお父樣！　御自分のお作りになつた家庭に對して責任をお感じにならないのですか？　精神的に、物質的に愛情が他に移つたからつて、それを實行しようとなさるお父樣！　同一の仕事の目的をもつ二つの間に湧いた愛情？　つておつしやるけど、それもこの社會に生きるための經濟的なものではないでせうか？　また御自分の行動を理論によつてカムフラージし、偶然性と必然性とを好きなように使ひ分けていらつしやるけど、そんな事でゴマ化される程社會は甘く出來てはをりません。御自分の感情で愛情を好きな時に行動に移す事を正しいと信じていらつ

ギーの支出に當惑しつゝも、赤字また赤字の非常時豫算をくまなければならないさうした狀態に讀者が置かれてゐる、さうした敎科書。この二つの愛憎の量的差異を一方を引上げ、他方を引下げることにより同一水準においたそこに快感が生れ、生れたものが機智として拍手される必然性があるのであらう。勿論この二つに對するリビドーの消費量の差異を無視した所からも笑ひは生れる。忠次と敎科書、この二つはかくも離れた概念かと云ふと案外さうでない。敎科書は偶々忠次的である。しかしこれは秀吉の筆法をもつてすれば、忠次の方で敎科書に似たのであらう。

ごく最近のを紹介すれば、

酉の市と云ふ看板がある。そこを通りかゝつた一人が首を傾げてゐたが、やがて筆をもつて來てサンズイをそへた。酉の市變じて酒の市になつた譯である。

こゝの觀客層は小市民階級である。だからおよそ年中行事といふものに對しては無關心であると云つてよいであらう。

しやるけれど、多くの人達が生きて行かうとするために苦しんでゐる事はどんなのでせう？　みんなおの〳〵が自分の感情を押へ合つてこそ苦しみと戰ひながらも生きて行かれるんではないでせうか？　社會性のない行動を無理にしようとする人間は自滅する外ないと思ひます。まして桝本さんは生れて卄何年かエゴイズムの善惡について一度も考へた事のない程の人です。確實な物質的保證を家族に與へる事もなくして御自分の感情を實行なさる事が正しい事だとおつしやるお父様！　かうしたお父様を敢然として突きはなせない私達、そこに私達子供の生活を保證しない現在の社會制度の矛盾があるのではないでせうか。さうだとすれば、お父様は新しい戀愛に熱情をお注ぎになる前にその熱情をかうした社會の改革のためにこそ先づ注ぐべきではないでせうか？　かうした現在の社會にあつて、戀愛をのみ先に理想的に實踐なさることを間違つてゐるとはお思ひになりませんか？　この社會に生きて行かうとなさるお父様、何卒もう一度反省なさつて下さい。御自分のために、母様のために、私達弟妹のために。」

岡氏の「新戀愛論」よりも娘さんの「父への抗議」の方が遙かに現實性があると私は思つた。

恐らく氏は抑壓してゐる御自分の娘コムプレクスを桝本節子さん（桝本さんは岡氏に父コムプレクスを起して居られる樣だ。）に轉嫁し、それに伴ふ罪障感をコミンテルン宗の信者として祝福されるところの聖なる「協同の階級的仕事」で贖罪し、良心（超自我）の苛責を「戀愛と結婚との同一性のテーゼ」でカムフラージして居る樣に思はれる。私は岡氏がもつ科學者としての才能を愛するが故に、岡氏（父）と桝本さん（娘）とが、その近親愛に伴

こゝでは彼等が多大な關心をもつてゐるであらう酒に酉がおきかへられた。いはゞ觀念の增大である。一筆にして歡樂の宴が開かれた譯だから。笑ひはたくましく生れてくるだらう。緣遠いものを身近に置きかへたこの機智はこゝの觀客層を計算に入れることにより可成の高さに評價されてよいであらう。

立小便禁制新法

久下貞夫

大阪關西中央新聞に次のやうな記事が出てゐた。

よく板塀などに、お稻荷さんの鳥居、或は犬のほか小便するなの文字を見るが、東區久寶寺町四丁目附近の板塀には「日本人なら　便するナ」と麗々しく立札が立つてゐる、これは例の村上大人の『日本人こゝにあり』からヒントを得たらしく、こうなると日本人たるもの、一寸小便も出來ませんゾ。」

ふ罪障感を贖罪するために、手に手をとつて刑務所ゆきの電車に乘りはせぬかと心配してゐる。それは明らかに情死への道ゆきだ。それを「階級的犠牲」だなどと言つていい氣持になつて居られる間は天下太平だが、現實社會はどうもさうは卸してはくれないらしい。（拾壹、拾壹、拾四）

日本評論十二月號誌上で「新女性觀」の題の下に、新らしがり屋の岡氏が奇妙にも「新らしきフェミニズム」を提唱して居られ、そして「吾々の（私の）フェミニズムは決して新らしくはない、たゞ事新らしく玆に更めて提唱せざるを得ない狀態に今日の社會（自分！）が在るのである。」と言つて、抑壓なさつてゐらつしやる御自分の娘コムプレクスを合理化するために、しどろもどろになつて辯明これつとめて居られる。

岡氏の理論の樂屋裏を覗いてみると、結極は「疊と女房とは新らしい」方がよい」といふ事に歸着し相だ。この諺は男の再生願望（輪廻願望、復活願望）を現してゐる。女は生理的にも亦社會的（家庭的）にもその子供と親しい關係にあるから、子供と同一化して再生願望が滿足されるが、男は女の樣にはゆかないから、その再生願望を充すために男が浮氣になるのは本能的、歷史的必然性がある。だが科學はその必然性を自由性に轉化する。と言つてみても、それがなかなか困難なことは事實だ。

山本有三氏人道主義の無意識根據

倉橋久雄

豫て本誌本欄で立小便禁制の爲には鳥居、鋏などを描いておくと効果があると云ふことを讀みましたが、右引用記事のやうに「日本人なら……」と日本人のナルチスムス、（殊にそれを基礎として出來上つてゐる超自我に訴へるのも一法でせう。「犬のほかには小便すべからず」と云ふ警告文も時々見受けますが、これも立小便をすることが犬に同一化することであるのを意識させようとした點では同じくナルチスムスと超自我とに訴へたことになりますが「日本人なら……」の方は、小便する者の憎惡（汚損衝動に於ける憎惡面）を打消さんとするに、同一化心理（塀や壁の持主との同一化）に訴へんとしたもので、「犬のほか……」の如く反感を、從つて反感による故意的行動を誘發しないであらう點にその優越性があるやうです。

新刊紹介

▼『喜び生きろ人生』石丸梧平著——石

東朝十一月十七日より四日間に互つて、山本有三氏は『檢事の論告と『女の一生』」と題して曉子事件を問題にしてゐた。始めに山本氏は「何もそんな女のために餘計な口をきく必要はないのである。現代は默つてゐることが一番上手な世渡りの道とされてゐる」と言つておきながら「けれども私は、このまゝ默つてゐることに、ある息苦しさを感ずる」と正直に告白して居る。この息苦しさは意識的には自分の作品の誤用せられたことに就いての辨明慾であらうが、無意識的にはまた別のものがあるかも知れない。

世の多くの曉子への同情者は、檢事の云ふが如く、山本氏の同感するが如く「映畫女優の裏面にある茨の道」について多大の觀念支出をしてゐるやうであるが、そんな事は女優連にとつて入所以前つとに承知の事なのであらうと思ふ。何にかのゴシップにも「撮影所に處女なし」と言はれてゐる程である。まアこれはゴシップでもあるし、事の眞僞は知らんが。世間好奇の的である「茨の道」も通るやうにして通れば案外味なものであるらしい。兎に角それほど艶種の汎濫してゐる所であるからこそ、そこで生産されるものが商品となり市場に販賣され得る譯なのである。

女優としてもさうである。監督なり重役なりが食指を動かさない女優なんて、もしあるとしたなら、そんな女優の商品價値はゼロに等しいのである。スキャンダルの多いほど女優としての生命もある譯だし、女の中の女として滿天下の桃色ファンの御氣にも召さうと云ふものである。しかし、それもファンの心證を害しない程度に於いてであること勿論である。

あらゆる種類の女の集まるこの所に於いて、先決問題は監督重役獲得術の應用練磨であらう。曉子が男性利用法に於いても相當なものであつた事は阿

丸氏は昭和十一年には五十歳に達した。それを紀念して、府下長昌寺境内に『創造哲學紀念碑』が建立せられることになつたが、出版としての紀念碑が正にこの書である。內容は四部に分れ、（第一部）人生とは何ぞや、（第二部）喜び生きる方法論、（第三部）人生苦の整理、（第四部）戀愛論、となつてゐる。氏が十數年間、アカデミシアニズムの象牙の塔をふりすて、社會大衆の間に分け入つて、創造哲學を以て青年たちを指導して來た功績はわが國敎育史上に於いて特異の光を發つものであらう。二十餘卷に上る從來の著書の總決算とも云ふべき本書は、特に氏の力瘤を入れられたものであることを示してゐる。（春陽堂發行。定價一圓三十錢）

▼『ジャンピアジェ・子供の道德觀』霜田靜志・竹田浩一郎共著――竹田氏が本誌上に數回に亘りその第一章の始めの方を譯載してゐた『兒童の道德的判斷』の譯述である。殆ど全譯に近いのであるが、處々省略し序論に譯者のピアジ

部某なるものを捕へ得たことにも察せられる。（一小映畫會社のスターが一躍天下の諸名士にそれ〴〵一言せしめ、たとへお祭り騷ぎであつたとは云へ、新聞のスペースを多く割かしめたのも、云はゞ彼女が、阿部某を捕へた處より始まつたのである。）それにしても阿部が所謂「色魔」であると云ふ事を事前に知らなかつたと云ふ程、曉子はそれ程うかつな女であつたらうか。

筆者は嘗つてモダン日本主催、松井翠聲司會である催に出席した曉子を知つてゐる。當日は各社から多くのスター連が出て御挨拶なるものをやつた。その際曉子はかう云つて滿堂の拍手喝采を克ち得た。「外の方のはどうでもようござんすが、私の出てゐる寫眞だけは必ず御覽になつて下さい。」それを聞いて傍に竝んで順を待つてゐた高田稔のあわてたのもけだし當然である。「私も曉子さん御同樣に」と云つて、辛うじて彼はその驥尾につかざるを得なかつた。たとへ冗談まぢりにもせよ曉子の心臟の强さの程も察せられると云ふ者だ。山本氏よ。『女の一生』の允子だつたらと考へて御覽なさい。片々たる挨拶を引用してと言ふ勿れ。こんな片言にでも赤裸々をその人自身が露出することがないとは云へない。かくの如き曉子も山本氏によると「彼女を誘惑し、彼女をみごもらせ、彼女を捨てた男は今どうしてゐるか、」と云ふ事になるのである。山本氏を一代表として男なるものは甘いものだと曉子が思はなければ幸である。

曉子は果して阿部に利用されたか。寧ろ利用したのは彼女の方ではなかつたか。まさか阿部が監督であり、何かにつけて利用價値がある。（例へば彼の監督作品に主演するが如き）事位さへ知らなかつた彼女であると云ひ得る

エ論を附加したものである。その社會的研究の科學性と精神分析的研究の科學性とを比較研究して見るのも興味あることである。ピアジェの研究內容に就いては本誌の讀者に對しては今更紹介的な言葉を弄する必要はなからう。（東宛書房、定價四圓）

▼『應用心理學論文集』廣島文理科大學內、應用心理研究會編――東西聯合應用心理學會の第二回大會の記錄を以て本號の內容としてゐる。菊版七二二頁に亙る大册で、我等分析學徒にも共通興味ある主題が多く並んでゐる。（中文館發行、特價一圓五十錢）

▼『D・H・ロレンス』土居光知著――研究社『英米文學評傳叢書』の一に屬するものである。英國詩人にして本誌上にも岩倉氏の譯文によりその小說や論文を屢々紹介して來たロレンスの簡單な評傳であるから讀んで要領を得るには適當である。たゞロンンスは精神分析とは關係がないと云ふやうな事が書いてあるが、勿論ロレンスは精神分析を十分に理解するほどに研究もしてゐ

であらうか。たゞ幸か不幸か、これが墮胎事件を生んだ。（今では反つて怪我の功名となつて、曉子は漁夫の利を克ち得たが）その子を阿部が容認しなかつたとしても、たゞそれだけで阿部の罪であつただらうか、阿部にしても阿部としての理由もあらうと思ふのである。「墮胎事件」さへなくば、この兩者の相互依存關係は圓滑に、彼等の都合のよい所まで運んだであらうと思へる。私は徒らに阿部の肩を持つものではないが、曉子が「かよわい女」であるならば、阿部も「かよわい男」である。何故ならば、彼とてもいづれは、彼自身のコムプレクスに引きづられて行動してゐるのであらうから…。

曉子が私の今の氣持はと武田麟太郎に示した（『モダン日本』）詩（佐藤春夫作）に「白き薔薇は傷きぬ、すさぶ暴風雨の手あらさに、されど花の香はましぬ、多くも受けし苦のために」とある。流石の武麟もこれを示されて、さぞ呆れたことであらう。この曉子のナルチスムスこそ、もつと問題にされてよいし、されるべきだ。これこそ「墮胎事件」を生んだ因の因であるだらうから……。

その「墮胎事件」はおくとしても、とにかく曉子その人については單なる「かよわき女」であると片付けることの安易な甘いやり方に同意出來ないのである。事件後の曉子の贖罪的態度と彼女のクリスチャンであることとが、彼女の煙幕となつてゐるやうに思へる。おのれをよく知るもの蓋し當代の智者、志賀曉子ではあるまいか。現在の彼女はたゞ民衆（山本氏をリーダーとする）の救助願望の潮に乘つてゐるさへすれば再生は近いのである。

だから「彼は名譽こそ傷きたれ、ステツキを振つて自由に街道を歩いてゐても」一向にかまはない。むしろ筆者はもつと足並を朗かにと言つてやりた

ないし、またそれほど科學的な頭腦の所有者でもなかつたやうであるから、關係がないと云つたとて分析學の方では別に痛痒を感じないが、併しとにかく精神分析に關しては二種の論著まであり、殊に其內の一つは明かに「精神分析と無意識」と題示してゐる程であるのに、精神分析と關係がないとはどう云ふわけであるか。

▼『若き母への手紙』シュテーケル原著、尾高豐作譯――シュテーケルはフロイドの門下であつて、今は別れてゐるがやはり分析者ではある。フロイドよりは常識的、通俗的で一般人には分り易いが、我々にはやゝ單純、喰ひ足りない。併し一般人の讀物としては百科辭典式にいろいろな兒童問題が取扱つてあるので、本書の如きは適切なる育兒案內書であらう。序文には無用の文字が澤山に羅列してあるが、肝心の原書名、發行年月、この書の原著者の全著作中に於ける位置及び意義については何も書いてない。（刀江書院、一圓二十錢）

い。彼（おそらくは阿部某の事を云つてゐるのであらうが）は、曉子の悪しき片面をも荷つてなほも歩み歩まねばならぬ事であらうから……。

有三氏にとつては「何故女だけ罪せられるか、なぜ女だけ懲役に行かなければならないか。」であらうとも、曉子の場合、それは山本氏の主觀の投出であるのだから、よく自分を分析して、幾多の名作をものし、多大の感銘を與へた『女の一生』の作者としての矜持を保たれんことを切望する。「あの作は斷じて女を鞭打つ革帶ではない。革帶に代用されることは、作者の忍びないところである。」なんて下らん感傷は見つともないからお止めなさい。こんなチャラッポコな甘い見方で讀者を失望させることも止めなさい。藤村の云ふ支那の諺の如く「年とつた牛は若い草を好むものである」と苦笑して許りもゐられないので、こゝに一言した次第だ。山本氏よ。こんな事にコムプレクス的な罪障感を起さないで、愛用のステッキを振つて自由に街頭を御自身濶歩なさい。志賀曉子の正體なんてその内に判然するでせう。要するに山本氏の人道主義なるものはその母コムプレクスに過ぎないことだけは明かとなつた。一切の女に母としての資格を要請（幻想）し、母らしくない行動をとつたと云ふ外形だけでこれを處罰しようと云ふ形式主義的母コムプレクスの人が檢事であり、同じく一切の女に母の俤を幻想し、それが母らしくない事をするのは男（父又は父に同一化してゐる自分自身）のせいだとしてゐるのが山本氏である。だから山本氏の描く女はみな「惱める母」の幻（幽靈）であつて現實の女ではない。允子や唐人お吉はその幽靈にはもつてこいだ。檢事も山本氏も母コムプレクスにとりつかれてゐる甘い男（幼兒）であることに於いては全く變りはない。たゞ外見が一寸違つてゐるだけだ。（終）

▼『母に與へる書』シュテーケル作、淺羽武一譯――これも右と同じ原著者によつて同じ主題を取扱はれたもので、兩者は同じ書の譯かと思つたが、比較して見ると、兩者は違つてゐるから別書に違ひない。この書も、譯者序文に原書の名、その他に就いて何の説明もない。譯文はいさゝか直譯的である。なほ一工夫を要するであらう。（岡山市、内山下一八、文獻書房。八十錢。）

心理研究ノート（續）

長谷川誠也

（十七）大論の「笑ひ」の說明

「大智度論」の第七に、佛陀の笑ふ所以を說明してゐる中に、笑ひの解說がある。

『笑ふに種々の因緣あり。ある人は歡喜して笑ひ、ある人は瞋恚して笑ひ、あるひは異事を見て笑ひ、あるひは人を輕んじて笑ひ、あるひは異事を見て笑ひ、あるひは羞恥すべき事を見て笑ひ、あるひは殊方の異俗を見て笑ひ、あるひは希有の難事を見て笑ふ。』

同じく第四十にも、笑ひの解說がある。

『笑ひに種々あり、ある人は妓樂の事を見て笑ひ、ある人は內に瞋恚を懷いて笑ひ、ある人は憍慢の故に笑ひ、ある人は物を輕んずるが故に笑ひ、ある人は事を辨じて喜ぶが故に笑ひ、ある人は作すべからざるを而も作すを見るが故に笑ひ、ある人は詐を懷きて善を揚ぐるが故に笑ひ、ある人は希有の事を見るが故に笑ふ。』

西洋においては、プレトー、アリストートル以來、笑ひに關する生理學的、心理學的、あるひは社會學的研究が盛んであり、しかも異說紛々である。大論の說は、散漫のやうに見えるが、そのうちに重要な端緒が出てゐると思ふ。これらの緖口から、改めて研究を進めるのは、われ〳〵東洋學徒の責任であらう。

「人を輕んじて笑ひ」とか「憍慢の故に笑ひ」とか言ふやうな見方は、プレトー、アリストートルにもあり、近世においては、ホブズ說にもある。なほ解說の中「希有の難事を見て笑ふ」とあるのは、非常な難事を爲し遂げ得る自信から笑ふこととの意味であらう。「事を辨じて

喜ぶが故に笑ひ」といふ、第二の引用文の語が、この點をおのづから説明してゐるやうに感ぜられる。さうしてこの點が重要な研究の一つの緒口ではあるまいか。

（十八）大日經の心相

大日經に、佛陀が心相をならべて説明してゐるところがある。説明の順序を多少變更して、次ぎに紹介する。

一、貪心、染法に隨順する。
二、無貪心、無染の法に隨順する。
三、瞋心、怒法に隨順する。
四、慈心、慈法に隨順して修行する。
五、癡心、修行不觀の法に隨順する。
六、智心、殊勝增上の法に隨順する。
七、決定心、尊教命を說の如く奉行する。
八、疑心、常に不定等の事を收持する。
九、暗心、疑慮なき法において疑慮の解を生ずる。
十、明心、不疑慮の法において疑慮なくして修行する
十一、積聚心、無量を一とするを性とする。
十二、鬪心、互に是非するを性とする。
十三、諍心、自己において是非を生ずる。
十四、無諭心、是非共に捨てる。
十五、天心、心念に隨つて成就しようと思ふ。
十六、阿脩羅心、生死に處しようと思ふ。
十七、龍心、廣大の資財を思念する。
十八、人心、利他を思念する。
十九、女心、欲法に隨順する。
二十、自在心、我一切意の如くならうと思惟する。
二十一、商人心、初めには收め聚め、後には分析する法に隨順する
二十二、農夫心、初めに廣く聞いて後に求むる法に隨順する。
二十三、河心、二邊に依り因る法に隨順する。
二十四、陂池心、渇して厭き足ることなき法に隨順する。
二十五、井心、思惟すること深く、また甚深である。
二十六、守護心、この心ばかりが實、餘心は不實である。
二十七、慳心、己が爲にして他に與へない法に隨順する。
二十八、狗心、少分を得て喜び足る。
二十九、狸心、徐ろに進む法に隨順する。
三十、迦樓羅心、朋黨羽翼の法に隨順する。
三十一、鼠心、諸の繫縛を斷たうとする。
三十二、歌詠心、かやうな法を修行し、我當に上昇し

て種々に神變しようと思ふ。
三十三、舞心、同上
三十四、擊鼓心、この法に修順し、我當に法鼓を擊たうと思ふ。
三十五、室宅心、自ら身を護る法に隨順。
三十六、師子心、一切の怯れ弱むことなき法を修行する。
三十七、鵂鶹心、常に暗夜に思念する。
三十八、烏心、一切處に驚怖する。
三十九、羅刹心、善の中において不善を發起する。
四十、刺心、一切處において惡作を發起するを性とする。
四十一、窟心、窟に入ることを爲す法を順修する。
四十二、風心、一切處に變じて發起するを性とする。
四十三、水心、一切不善を洗濯する法に順修する。
四十四、火心、熾盛の炎熱を性とする。
四十五、泥心、これに類するを性とする。
四十六、顯色心、同上。
四十七、板心、量に隨ふ法に順修して、餘の善を棄てる。
四十八、迷心、執する所が異なると共に思ふ所も異なる。
四十九、毒藥心、生分無き法に順修する。
五十、羂索心、一切處に我縛に住するを性とする。
五十一、械心、二足止まりて住するを性とする。
五十二、雲心、常に雨を降らす思念をなす。
五十三、田心、常に是の如く自身に事あることを修す。
五十四、鹽心、思念する所に復た思念を增し加へる。
五十五、剃刀心、剃除する法に依り止まる。
五十六、須彌等心、常に思惟して心高擧なるを性とする。
五十七、海等心、常に是の如く自身に受用して而も住する。
五十八、穴等心、先には決定し、後には變改するを性とする。
五十九、受生心、諸の行業を修習して、かしこに生ずることがある。

これに次いで『一二三四五、再數すれば、およそ百六十心がある』といふ追加の語がある。右の記述を、心理學的に研究し、かつ分類して見るならば、おもしろからうが、それは他日のことにする。さしあたり興味ある點は、種々の事物が象徴的に使用されてゐることである。

（十九）老子の母コムプレクス

幽玄深奥といはれる「老子」も、精神分析の立脚點から見ると、その要旨を、案外容易に會得されるやうに思ふ。

　全篇を通讀して、まづ感ぜられることは、著者の母コムプレクスである。それは全篇を通じて母といふ字が、非常に重要な意味をもつて使用されてゐることから推測される。左にこれを列記しよう。

　無名は天地の始、有名は萬物の母（一章）

　谷神は死せず、これを玄牝と謂ふ。玄牡の門、これを天地の根と謂ふ。（六章）

この玄牝といふ語は巨母（Great mother）の意味であるといつても差支へあるまい。

　物あり、天地に先だちて生ず、寂たり、寥たり、獨立して改めず、周行して殆からず、以て天下の母たるべし。これを字して道といふ（二十五章）

　天下始めあり、以て天下の母たり。既に其母を知りて復た其子を知り、既に其子を知りて復た其母を守れば、身を沒するまで殆からず（五十二章）

　國を有つの母は、以て長久なるべし（五十九章）

　大國は下流なり、天下の交なり、天下の牝なり。牝は常に靜を以て牡に勝つ、靜にして下るを爲すを以てなり（六十一章）

ここの牝といふ語も、母性的といふ意味に解しても差支へなからう。

　かやうに、母といふ字の用ゐられてゐる處をならべて見ると、それがいかに重要の意義をもつてゐるかが判明する。全く、母といふものは、老子の説く道の象徴であると見てもよからう。それだけに、老子の心理には、母といふ觀念に執着するところがあつたと推定される。彼にまつはる傳説に、彼は八十一年間、胎内に居たといふのがある。表面から見れば、愚にもつかぬ話であるが、内面的に見れば、大いに有意義である。これは老子が一生の間、母といふ觀念に愛着をもつてゐたこと、即ち母コムプレクスを抱いてゐたことを暗示すると解釋される。それから考へると八十一といふ數は、おそらく老子の年齢であらうかと想はれる。この傳説は、いつの世に構成されたものか。それは私には分からないが、そもそもの起原は、一生の間、母といふ形象に支配されてゐた彼の生活を譬喩的に傳へたことではなからうか。

　さらに、この書には「嬰兒」といふ語の用ゐられてゐる處がある。

　氣を專らにして柔を致む、能く嬰兒たらんか（十章）

衆人は熙々として太牢を享くるが如く、春、臺に登るが如し。我獨り泊として其れ未た兆さざること嬰兒の未だ孩せざるが如く、累々として歸する所無きが若し（二十章）（註）孩は赤ン坊の笑ひの意。
衆人皆な以てするあり。而して我獨り頑にして且つ鄙し、我獨り人に異にして、而して母に食はるるを貴ぶ（同上）
其雄を知りて其雌を守れば、天下の谿となる。天下の谿となれば、常徳離れず、嬰兒に復歸す（二十八章）
含德の厚きものは赤子に比す。毒蟲も螫さず、猛獸も據へず、攫鳥も搏たず。骨弱く、筋柔かにして而して握ること固し（五十五章）

老子の「無爲の事に處り、不言の敎を行ふ」といふ人生觀は、嬰兒をその象徴とするのである。かやうに嬰兒の生活に、理想を認めたところを、心理學的に解釋すれば、認得の奥に「胎内空想」があるのだ、と言へる。老子の無意識に潜んでゐた胎内生活の記憶が、「母に食はる」と言ふ理想的（あるひは空想的）生活を描かしめたのであらう。かう見てくると前記の傳説は、一そう意義深いものと言はなければならぬ。主知的に見れば、一顧の價もない傳説も、心理學的に見れば、老子の人生觀そのものを、最も好く説明すると言へるだらう。

（二十）「人は盡く夫なり」

左傳の桓公十五年のところに、左のやうな話がある。
祭仲、專なり。鄭伯これを患へ、その壻（祭仲の女婿のこと）雍糾をして之を殺さしめんとす。將に之を郊（郊野）に享せんとす。雍姬（祭仲の女）これを知り、その母に謂つて曰く、父と夫と孰れか親しきと。その母の曰く、人は盡く夫なり、父は一のみ。なんぞ比すべけんやと。遂に祭仲に告げて曰く、雍氏その室を舍てて將に子を郊に享せんとす、吾これに惑ふ、以て告ぐと。祭仲、雍糾を殺し、これを周氏の汪（池）に尸す。（下略）

道德論者から見るならば、この事件は、かなりの問題となるものであらう。しかし、その立脚點から離れて見れば、雍姬の心理過程に同情することができる。かの女の無意識にあつた父に對する愛着のコムプレクスが、母への相談となり、母の心理にあつた同じやうなコムプレクスが「人は盡く夫なり」の語となつて顯出したのである。妻たる位置にある女性は、この物語を熟考して見るがよからう。これほど極端でなくとも、形式においては、これと類似の場合に臨むことがないとも限らないからだ。

芭蕉の俳句の分析鑑賞

前號課題

ふるさとや臍の緒に泣く年の暮
年暮れぬ笠着て草鞋はきながら



齋藤發智良

「人の運命はそのエディポス・コムプレクスであり、藝術は無意識界に蟠る種々なるコムプレクスとの葛藤に於ける苦悶の象徵である」と云ふ精神分析學の命題に忠實なる爲には、作者のコムプレクスに觸れずしてその作品を鑑賞することは出來ない。

前號に於て芭蕉の胎內空想は分析闡明せられた。彼を生涯旅から旅へ導いたのは、その强烈なる母への戀であり、彼の藝術は巨母（マグナマーター）なる自然との交りに於て生れたと言ひ得る。

「年暮れぬ笠きて草鞋はきながら」の句は、甲子紀行（野ざらし紀行）の中にあり「そぞろ野ざらしの吹く頃江戸を出立」して東海道を上り伊賀、大和、近江を經巡つて美濃から尾張に出で、「こゝに草鞋を解きかしこに杖を捨てして旅ながら年の暮れければ」、尾張のとある山家で越年することになつた時の作である。『奥の細道』の中で「日々旅にして旅を栖とす」と云つて居る彼に於ては常住座臥する時も、笠の緒つけ代へて旅する時も、その心境は同じであつた。然し如何に藝術の爲とは云へ庶民の上に立つ武士の身分を捨て自ら進んで不自由な苦しい旅に生涯を過さねばならなかつた事は彼のマゾヒスムスの素質にも因る事ながら、何か彼の超自我をして彼の上に苛責の鞭を振はしむるコムプレクスの潛む事を想像させずには置かないし、又母への愛が强烈であればある程息子の近親姦願望を妨害する父に對する憎惡の激しいのは當然である。

芭蕉は伊賀の藩士であつた。家長の權力を以て愛する母に盲從を强ひる父への憎惡は、對象に於ては君主・武士階級・社會へと轉位せられ、深さに於ては父殺しの願望となつた。

彼は僚友、彌太夫の門邊に「雲と隔つ友かや雁の生別れ」の短冊を殘して故鄕を出奔したのであつたが、之は結局彼が父を拒け、殺した事である。己れの身命のみならず家族のそれをも君の御用に捧げることを無上の面目として、その爲にこそ知行を頂き、農工商の上に立つ武士の家庭は、その中から無賴の徒や夭折者を出す事は大なる汚辱であり、又その度に祿高を減らされるのであつ

た。啻に藝術の爲のみならば、弓矢の道を捨てずとも文武兩道を勵み得たかも知れない。然し彼の强いエディポスは父を拒け主君を拒け、封建的、武家的生活の桎梏に反抗して遂に脱藩して了つた。

彼がこの句を作つたのは文化風俗が絢爛と咲き誇つた元祿時代に入る四年程前で、既にこの頃から江戸の人々は歡樂を追ひ求める事がその風習となつた程、世俗的になりつゝあつた。歡樂の蔭の悲哀を知り享樂の生活を野ざらしにそよぐ枯蘆の風景と同じに見て片雲の風に誘はれる如く漂泊の旅に上つた彼のニヒリスムスは、無意識に於ける父殺しの罪に對する無意識の自己懲罰で、之が彼の藝術に深刻さを與へた最大の原動力である。母なる自然を苛む文化を彼のエディポスがその對象とした事は、彼が時流に對する反抗的態度や超然として己れの道を進んだ彼の生涯即ち

何にこの師走の町に行く鴉

この道や行く人なしに秋の暮

等の句によく現れて居る。

武士としての體面を保てぬ恥辱よりは、死を選んだ當時に於て武士を捨てる事は死を意味する。彼の出奔は父殺し願望の遂行であると同時に、その贖罪の第一歩であり、一生旅に於て甘受した困苦缺乏はそこに始まつたのである。

旅する人の樂しみは快適な道中と心地よき夜の泊りであるが、死の本能に惹かれ罪障感に追はれる暗い彼の旅にも、この願はあつた。即ち「今宵よき宿借らん」と「草鞋の足によろしきを求めん」であつて、之は些か矛盾して居る樣であるが、「よき宿」は胎內への復歸を夜毎新に體驗する所であり、「足によろしき草鞋」は先を急がぬ旅には足拵への嚴重さでなく母なる大地との接觸を快くする爲である（裏に鋭いスパイクを植ゑた登山靴等は當時あつたとしても彼としては履くに忍びなかつたであらう）事を知るならば、彼のこの唯二つの願ひは彼の旅に對する態度を說明し得て餘りあらう。事實、この旅行觀即ち人生觀を除外しては彼の藝術を理解し難い。

藝術は露出慾の昇華せられたものであるから、芭蕉も露出慾即ち名譽心は相當强かつたらしく、永の太平に武勳を建てる機會なく只管君主の御機嫌を取結ぶより他に出世の道がなかつた事も、彼の出奔の一つの動機となつたに違ひない。彼が到る處に名句を殘してゐるのは、愛する母に多くの偉大な子供を與へた事であるが、一面彼の露出慾の變形たる撒布癖、落胤癖を窺ひ得やう。

こゝに課題の兩句には、共に同じ年の暮が異る意味に用ひられて居る所に、問題の面白味があると思ふ。

日月の運行と自己を同一化し、コムプレクスしてゐた古代人の時代輪廻の思想、習慣は未だ人類の心に廣く蔓つて居て、宇宙の森羅萬象悉くは新しき年と共に生れ、暮れ逝く年と共に死ぬる様に考へる。（大槻氏著『精神分析讀本』参照）即ち暮は死の象徵であるが「年暮れぬ」は時の經過を表はし、旅に明け暮れした彼が只冥途の旅の一里塚に脚を留めて、暫し來し方を振り返つたに過ぎない、「死にもせぬ旅寝の果よ秋の暮」の秋の暮と同じく前途には尙苦しい人生の旅路が續いて憧れの胎內は遙に遠い。

さて彼のエディポスを期待して分析の光を笠と草鞋に向ける。孰れか一方でも旅の意を表はし得るのに、短い俳句の中に兩者を並べたのは、この光なしには單に上と下との對照によつて意味を強めるとか、彼の旅する姿を細く描き出す爲、位の表面的な說明しかなし得ないであらうが、その裏には深い彼のコムプレクスが秘められてゐるのだ。

「世の中は上を見れば限りがないから笠を被つて暮らす」とよく人は云ふ。芭蕉が彼程の才能を以て尙富貴を求めなかつたのは、先に述べた如く、父殺しの罪障感に依る懲罰願望の爲であり、陽炎燃え立つ大地を遠慮なく照りつける太陽や落葉散り敷く上に冷く降り注ぐ雨を防ぐ事は父への反抗であるから、笠は彼が父に對して抱いたアムビファレンツを示し、草鞋は母に對する感傷愛の象徵であるから、この一句は實に彼の性格の根柢をなす強烈なエディポスコムプレクスとそれとの闘爭に終始した彼の一生を物語るものである。

× × × ×

彼の激しい無意識心理の相反相剋に依る胸苦しい迄の緊張は「ふるさと」の句に於て、大きな息抜きをして居る。強烈な性活力（リビドー）（蒸汽壓力）とそれに比例する抑壓（汽罐の閉鎖）は強大な力をエディポスのピストンに與へて、彼を生涯旅から旅へと推進し、諸國の山河に美しいデジャギウの汽笛を響かせて居る。然し汽笛は單なる息抜きであつて決して彼の驀進力を減殺しはしない。

一度は總てを捨てゝ出奔し魂の安息所を持たぬ彼も故郷の地のみには心惹かれて屢々こゝに立戻り、その都度暫くは故郷に住ひして居た。晩年程此の傾向が激しくなつたのは興味深い。

此の句は享保四年の秋から元祿にかけての旅行記である『芳野紀行』の中にあつて、この時彼は故郷で兄弟達と樂しい時を過して居る。

風景そのものが既に母胎の象徵であるが、彼を哺んだ故郷の自然、我が家、一度は母の愛を爭ふ嫉妬の對象で

あつたが母を同じくする兄弟。時は年の暮であり、彼は老年であつた。彼が今手にして居るものは嘗ての胎內に於て彼と母とを繋いだ臍の緒である。此の句の「年の暮」は前の「年暮れぬ」と異り、停止して居て、彼は草鞋を脫いで居る。胎內に於ける如く超時間的で最早永遠に明ける事のない暮、卽ち死の象徵である。之以上御膳立の揃つた胎內空想の滿足が現在にあり得るだらうか？ 彼は全く胎內に復歸して歡喜の聲を擧げて居る。

塚も動け我が泣く聲は秋の風

の悲痛な叫びではないが、それと同じく激情的な喜びに泣いて居る。歡樂の絕頂に湧く悲哀感とでも云ふか、今迄の緊張が急に弛んだ何か賴りない、不快慊厭の情は彼を全く力の無い幼兒に還元して、譯もなく泣きたい氣持に陷れたものであらう。

又父や主君の死は一面彼の無意識に於ける父殺しの願望を達成しては吳れたが、反面に於ては所謂「憤る第三者」の刺戟に依る快感を失はしめた。彼のエディポスは消極面の對象を失ひ、高められた罪障感は尊敬親愛の情となり、彼をして益々懷古的ならしめた。諸方の舊跡や舊藩主故禪吟公の庭等を屢々訪れて懷舊の情に耽つた。當時の作

さまさまの事思ひ出す櫻かな

の句に彼の心境を窺ふ時は、盡きぬ興を覺える。

現世に於ける、斯くも完備せる胎內の象徵を以てしても、結局代償に依る滿足は終局的なものでなく、慾望を更に熾烈なものとするに過ぎない。斯くて彼は再び死の本能に追ひ立てられ死神である母の面影を戀ひ慕つて故鄕を彷ひ出でたのである。彼の終焉は元祿七年十月十二日（新曆で十一月二十五日）であつて「ふるさと」の句を作つた時から尙數年を經て居るが

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

の悲痛な臨終の光景は既に當時彼の腦裡に描かれて居た事であらう。

藝術は描くものに非ずして現れるものであるから、僅か二つの俳句からその作者のコムプレクスが分析解明されても、それは牽强附會や單なる偶然ではない。容易には說明し難い「寂び」の境地もコムプレクスを鍵としてその神祕の扉を開き得る樣に思はれる。（昭和十一年芭蕉忌）

★

無門關子

ふるさとと言ふ言葉には母國、故鄕、家庭、母などの無意識心理が伴つてゐます。そして臍の緒は母胎と胎兒とを結合する紐帶となつてゐます。誰でも胎兒として胎

内生活をしてゐた時代がありますが、その時代には胎兒のあらゆる生命力はこの臍の緒に集結されてゐました。それでこの臍の緒はふるさとに到るための最も古い門なのです。胎兒が胎内生活を無事經過致しますと、誕生によつて臍の緒を斷ち切られて乳兒としての新らしい生活を致さねばならなくなります。乳兒期（蒙昧期）には母の乳房がふるさとに到るための門となります。次に幼兒期（野蠻期）には自分の肛門や尿道が、その門となります。幼少年期（古代、中世期）は幼兒期の繼續なのですが、この時代には幼兒期の門を通つてふるさとに到ることが超自我の無上命令によつて禁制されて、この門の前を行きつ戻りつしなければならないのです。壯年期（資本主義時代以後の時代）には性器がふるさとに到るための門となりますが、青年期（資本主義時代）は幼少年期から壯年期へ移るための轉換期になつてゐます。次に泣くと言ふことは悲哀感情の表出行爲なのですが、この悲哀感情の最も根本的なものは臍の緒を斷ち切られて愛する母胎と別離する苦しみに伴ふ悲哀でせう。一年は一生の死出の旅への一里塚の樣なものですから、年の暮は晩年の象徴でせう。臍の緒に伴ふ母胎との愛別離苦は芭蕉の晩年をも支配してゐた樣です。それで「ふるさとや臍の緒に泣く年の暮」と言ふ芭蕉の俳句は次の樣な意味をもつてゐます。即ち「老人になつても尙ほふるさとの事を想ふと、胎の緒を斷ち切られた悲哀に泣きながら母の乳房を求めた頃の事が胸に迫つてくる。」東洋人は一般に出産外傷が西洋人よりも強い樣ですが、芭蕉は特にそれがひどかつたらしい。

母胎との愛別離苦を解脱出來なかつた芭蕉は、「年の暮」（晩年）になつても尙ほ魂が休むべきふるさとを求めて、「笠着て草鞋はきながら」全國をさ迷ひ歩かねばなりませんでした。彼はその晩年に「旅に病み夢は枯野をかけめぐる」と書いてゐます樣に、ふるさとへの旅で病氣になり身動き出來なくなつても、母胎との愛別離苦の哀々切々たる夢は尙ほもふるさとを求めて枯野をかけめぐつてゐるのです。花紅柳綠の山河も芭蕉にとつては枯野に見えたのでせう。そしてそれは芭蕉の出産外傷と近親愛へのタブーとの投出のためではないでせうか。（完）

（十一、十一、二十）

★

森久兵衛

旅をする人は靜寂を求め、徘徊癖を持つてゐる。で、靜寂と徘徊とを愛する俳人の身體や性格にはアブノーマルな所があるやうである。總べての人は物質的成功者たらん事を希望してゐる。それが健全とは云へないかも知

れないが、それなきは不健全と云へよう。

彼芭蕉の如きも陪々身の家に生れて、加之も父は鐵砲鍛冶（三十石は取つてゐるが、母は人も嫌がる忍術使の百地氏の家に生れて迚もこの家筋では立身出世は覺束ない）、その上芭蕉は子供の時に落馬し、骨を折つてゐる不具者だ。貧乏と不具――どうしてもぢつとしては居られない所だ。が彼が出家するにしても當時の藤堂藩制が許さない。其處で彼は出奔して俳人となつたのだ。然し彼の魂は鄕里を戀ひて已まない、彼が農人町の生家に歸る事は、軈て彼の靜かなる魂を滿足さす事になる。然るに旅から旅へ續けて、高等ルンペン然たる現實の自身の姿を、いかに情けなく感じた事であらう。

然し、彼としては西行や僧基（？）を範としてゐる以上、自身の生活に愚痴をこぼす事が出來ない。まあ行き當りばつたりで暮すことが却て禪的だと自ら理屈をつけてみても、さて納らないのは胃の腑の問題だ、平素はともあれ歳暮になるとこのパン問題に關聯して行脚生活が情けなくなる。其處で、何時まで「笠着て草鞋はきながら」股旅を、つゞける事であらうと、哭いたのでもあらう。

芭蕉の心理を臆測することを許されるならば、自身は俳人たらんより武士として富祐な生活を續けたかつたかも知れない。彼の內心はその主藤堂探丸子の風流三昧を嘲りたかつたのだ。何故なれば、彼が若し五千石の城代の家に生れて居たら、恐らくは彼自身俳人たらんよりも立身出世に汲々と勤んだであらうから。併しこれは私の投出であつて、彼はもつとエディポス的に不健全で、五千石の家の子であつても、やはり出家したことであらうか。

（完）

俳句分析新課題

一、芭蕉の幼少年期の分析的研究

前號の出題に於いて、芭蕉の句を誤記しまして、應答者諸君に御迷惑をかけましたことを謝します。正誤表中にもその事は入れておきましたが、甚だ失態でありました。今度もなか〳〵見事な應募答案が集まり、誠に編輯部員一同大喜びいたしました。今度の出題は少し面倒でせうが、應募者等が如何にも芭蕉をよく知つてゐられるので、ツイから云ふ大問題を提出して見る氣になりました。敢然應募の筆をとられたことを、切望して已みません。採用分には薄謝を呈す。應募者はなるべく特別誌友に限りたいと思ひます

（編輯部）

內外彙報

佛國分析者アランディ氏の來翰

アランディ氏（Dr, Allendy）からわが延島英一氏宛に次の書翰が到着したのは既に數ケ月前の事であつたが、誌上紹介が遲れたことは申譯がない。延島氏は、アランディ氏書中に言及のゴブロン氏（延島氏舊知、文學者）宛に手紙を出してフランス精神分析學界の樣子を尋ねてやつたに就いて、ゴブロン氏からアランディ氏に延島氏の書翰が移牒せられて、左の返書となつたわけである。アランディ氏はフランス精神分析學會員で、最大の分析者だとゴブロン氏は云つてゐる。（記者）

×

拜啓

在レテルのガブリエル・ゴブロン氏から來翰あり、フランスの精神分析學運動に就き、諸君が情報御希望の旨傳へられました。私は發刊以來八年を經た我が『フランス精神分析學雜誌』（Revue française de psychanalyse: Editeur. Danoë et S'eele, 19, Rue Amelis, Parie-YII）を諸君が御存知のことゝ察しますが、同じく、八年の星霜を經た我が「フランス精神分析學會」、（Société française de Psychanalyse）が、諸君の興味を如何なる點で惹いたか詳しく存じませぬ。我が學會々員は約三十名です。又それとは別に我々は「精神分析學研究所」（Institut de Psychanalyse, 137, Bourvard St. Germain a Paris）を有し、四年來そこで精神分析學の講筵を開いて居りましたが、昨年から外來診療をもいたすことになりました。現在圖書館を設立中です。次に「精神分析學實驗所」（Laborotoire de Psychanalyse）が設けられました。それはパリ醫醫科大學の精神科講座に公式に合併され、クロード教授（Professeur Claude）の下に聖アンナ精神病院（Asile Ste. Anne, 1, Rue Cabanis a Paris XIV）で研究を續けて居ります。

我々の運動の發展並びに我々の見解の侵透は滿足な具合で進んで居ります。精神分析學關係書が澤山發行されました。最近ソルボンヌ大學でフロイド生誕八十年祝賀會を催しましたが、大成功を收めました。

諸君が斯々のことゝ問題を指定されゝば、私は喜んでそれに就き詳しく情報をお送りいたします。お問合せのスペインとイタリイの精神分析運動に就ては、私は充分明白にそれを知つてゐないのです。

一九三六年六月廿四日（巴里）　アランディ拜

『イマゴー』昨年度第三冊

一、フロイドと未來（トマス・マン）——本誌本號に大槻、平塚兩氏が共譯してゐるものゝ原文。

一、本能感情とその發達（カール・ランドアウエル）——本能感情と情熱と氣質との關係を研究してゐる。昨年五月キイン精神分析學會に於いて催されたる講演の草稿。ラントアウエ

ルハアムステルダムの一流分析者。

一、スエデンボルグの宗教的危機と彼の夢日記（ヸイン在住、キンテルスタイン）――スエーデンの自然科學者にして神學者たるスエデンボルクの宗教的危機を主題とし、それを彼の夢日記の分析によつて、研究せんとした野心的な、大論文である。彼には妄想症の傾向が强かつたと云ふことで、母胎空想もなかなか豐富であつた。

一、精神病者の繪畫（ヸイン在住、エルンスト・クリース）――精神病者の描いた繪畫の見本を數枚挿圖し、この精神病學的興味との相關分野を分析的に研究してゐる。

一、リビドー分類の吟味（ヸイン在住、リヒャード・ステルバ）――本能說の確立が未だ分析學に於いて不十分であるに鑑みベルンフェルドが嘗てその研究を『イマゴー』誌上に公にしたことは、既に本誌上に紹介したが、ステルバは更にそのベルンフェルド說を批評せんとしてこの論をなしてゐるのである。

一、新刊批評三件――

『精神分析教育雜誌』昨年度第四・五册合併號

一、集團心理と學校級別（ヸイン在住、エディト・ブクスバウム）――フロイドの『集團心理と自我の分析』を參考として學校生活に於ける兒童の社會心理を、相互同一化、攻擊慾、轉嫁作用、その他種々な方面から觀察してゐる。婦人分析者であるが、なかなか組織的な論文である。

一、三歲未滿女兒の攝食障害と不氣嫌の分析（ヸイン在住、マルガレーテ・シュミード）――分析者は女兒の肛門性感に遡つて研究してゐる。

一、兒童分析に於ける遊戯技法（ニウ・ヨーク在住、エドワード・リス）――古代人に於け演劇（遊劇）の意義を論じて兒童の遊戯衝動に於ける無意識根據を實例を擧げて說く。

一、二種の防禦（ヸイン在住、エディタ・ステルバ）――三歲女兒の防禦機制の觀察。

一、空想による否定の實例（ヸイン在住、ベルタ・ボルンシュタイン）――空想に依つて現實の不安を打消さんとするこれまた子供の防禦機制の研究。

一、去勢不安より生ずる思考障害と攻擊慾（ヸイン在住、アナ・メンヘン）――

一、試驗不安と試驗神經症（ヸイン在住、エルキン・ステンゲル）――

一、精神分析學と學校（ルート・ワイス）――

一九三七年度『精神分析年鑑』

一、アクロポリスに關する或る記憶障害（ジグムント・フロイド）

一、フロイドと未來（トマス・マン）

一、セルマ・ラーゲルレフの童話の創作由來に就いて（エドワルト・ヒッチマン）

一、ユトーピア（エドワルド・グラヴー）

一、ユダヤ的機智の本質に就いて（テオドル・ライク）
一、自我閉込め（アナ・フロイド）
一、思春期に於ける本能の不安（アナ・フロイド）
一、人間への理解（ハンス・ザックス）
一、精神分析學辭典から（リヒャード・ステルバ）
一、フロイド學說の社會學的及び法律學的意義（ローベルト・ウエルダー）
一、昔の傳記の心理學（エルンスト・クリース）
一、不良少年のナルチスム的轉嫁（アウグスト・アイヒホルン）
一、幼兒教育について（ジョン・リツクアン）
一、自我限界、自我の力、及び同一化（パウル・フェーデルン）
一、本能說の發展及び問題（エドワルド・ビブリング）
一、フロイド八十歲誕生日に於ける斯學の位置（ハインリッヒ・メング）
二、その他挿圖三葉。

最近國內事實

▼本研究所講習會員は十一月九日夜築地小劇場に、シルレル作『群盜』を總見し、觀劇後銀座西ヤンキー喫茶店にて分析合評會を催した。

▼『獨身生活に加へた精神分析』――フランスの小說家アンドレ・ビリ（Andre Billy）が書いた『どんな人間？』平板無飾な獨身男の平凡な生活を精神分析したら如何なるかを示したり。主人公はポール・ブルーゼと云ふ大佐で、陸軍省の勤人。その平凡な生活は判然二つに區分せられてゐる。一つは數字の本をコツコツ勉强すること。他は犬を連れて每日きまつたやうに散步に出ることである。作者は此の大佐の若い時分のことを描き出し、イレンと云ふ美しい異母妹に戀されることにして居る。イレンは熱烈に彼に戀をし向けたのだが、彼はやさしみと正しい禮儀とて受け答へするだけでその戀を受けいれなかつた。それでイレンは失望して、他の男と結婚したが、その人は世界大戰で死んでしまつた。死別れて後家になつたイレンは愈々又、大佐に對して戀愛表現をやつて見せだした。それでも大佐は依然として柳に風で居るので、とうとうイレンは憔悴して死んでしまつた。だが、さて、大佐ははたしてこんな戀に對して木石であつたらうか、それは判からぬ。彼はどんな人間？

　してまた之れに別な或る若い女で、やつぱり大佐に對して直接に端的な熱愛を示して來たが、之れに對してもやつぱり大佐は優しい禮儀正しい友愛をもつてするだけで、戀と云ふ事には入つては行かなかつた。これは一體何うした事だらうか？大佐は木石ではない。每週金曜日には軍服をぬいで流行服を美しく着飾つて巴里に汽車で出かける。彼は決して世界に女性がある事を忘れて居るのではない。彼は女性を理想化し、せられたその理想化の姿を現實で破壞さすのが惜しいものだから、それで女には觸れないのであらう。數學の本と、犬との生活、そのどんな人間であるかの精神分析は此の小說の唯一の價値で、大きな價値だと佛蘭西では大評判。

(『東京堂月報』昭和十一年七月號、「海島通信」欄より)

▼『德富健次郎と性愛』前田河廣一郎稿——岩波書店『文學』十一月號。精神分析的見地からの觀察批評は多くはないが、分析材料として興味深き論文。

▼ハーバート・リードの「シェリ辯護その他」宮西光雄稿(『アルビオン』十一月號)——リードは精神分析學的方法に立つ藝術及び文學の批評家であるが、彼のシェリーに就いての分析的研究がこゝに精しく紹介せられてある。彼は始めは分析學的研究法にシムパサイザー的態度をとつてゐたが、近來益々これに全幅の信賴をかけるやうになつたやうである。リードのワーヅワース分析評については曾て本欄で言及したことがあつた。

▼『廣告心理學は破產した!』高橋鐵稿——誠文堂『廣告界』十一月號

▼『洒落型外裝物語』高橋鐵稿——同誌・昭和十二年一月號。

▼『坪內博士と精神分析學』平塚義角稿——『文學精神』十二月號。

▼『娘の自殺に發心して佛門に入つた父親の話』大槻憲二稿——『女性の光』十一月號。

▼『精神分析言語學』大槻稿——『コトバ』十一月號。

▼『ロレンスと精神分析學』の題下に大槻氏は十一月十四日、早稻田大學英文學會秋季大會に於いて講演した。同時に橫光利一、水谷八重子、その他二氏出演、頗る盛會であつた。

▼『秘密の精神分析』大槻稿——『生きて行く道』十二月號。

▼『萬引で子の學資を稼いだ母親の場合』大槻稿——『女性の光』十二月號。

▼『ある貧書生の話』大槻氏稿——『現代』新年號。

▼『或る戀愛破綻者の分析』大槻氏稿——『生きて行く道』新年號。

▼本誌前號內容に關しては本號卷頭の廣告を參照ありたし。

長谷川氏還曆と出版紀念會

長谷川誠也氏は昭和十一年十二月を以て還曆せられ、それと同時に、岡倉書房から『遠近精神分析觀』を上梓せられたので、二つの慶事を祝福するために極近親の友人後輩等寄合ひ、極めて質實に、內輪に、その賀筵を、昭和十一年十月廿八日夜上野山下「揚出し」の風雅な一室に催した。中村星湖氏發起人を代表して挨拶を述べられ、長谷川氏これに答へて簡單に、謙讓に謝辭を述べられ、一夕の歡を盡して十時頃散會した。こゝに掲げた寫眞はその時の紀念撮映である。寫眞は前列向つて右より、富田義介、長谷川誠也、岩倉具榮、田內長太郎の諸氏。後列右より中村星湖、森下雨村、日高只一、前田晁、大槻憲二岡村祐之、高橋鐵の諸氏。

本研究所研究會例會

十一月例會は十六日夜、萬世橋驛前アメリカン・ベーカリ階上に催された。食前、例により司會者から本誌前號所載の語彙につき、解說的講義があつた。食後、新來者加藤己酉三郎、梅

長谷川氏還暦と出版物紀念會



木米吉雨氏の紹介があつた。

食後、高橋氏は（別項報告の通り）築地小劇場に總見したるシルレル原作『群盜』の分析批評文を朗讀して一同の批評を乞はれた。一同異議なきことゝなつて、御覽の通り、本號時評欄にそのまゝ掲げられてゐる。

次に土屋秋實氏立ちヒウマニズムに就いての所感を述べられたが、これは本誌前號所載同氏論文主意につき北垣照雄、高橋鐵兩氏から質疑があつたので、それに對する答辯としてゞあつた。

第三に、塚崎茂明氏「スタンリー・ホールの思春期研究」について研究を發表せられた。これは更に推敲せられて本號研究欄に掲げられてゐる。

次に土屋秋實氏また「スティルナーと思春期問題」について研究を發表せられ、これまた推敲せられて本號研究欄に掲げられてゐる。

最後に高橋氏も思春期の問題について研究論文を朗讀せられた。本號研究欄のものはその加筆淨書せられた結果である。このやうに本誌所載論文はみな苦心の結果であつて、無責任な一夜漬けのものではないのである。

出席者は右言及諸氏の他に小林一、田中虎男、大槻岐美、宮田齊、西御門千代の諸氏であつた。

なほ岩倉具榮、大久保眞太郎、立川玄一郎、伊藤龍朗、内藤梅子、松井定之、武田忠哉、富田義介、竹田浩一郎、倉橋久雄田内長太郎、の諸氏からは電話又は書面を以て鄭重な缺席挨拶

があつた。

本研究所講習會例會

七一月例會は二日夜、研究所に於いて催された。出席者は北垣照雄。小林一、北山隆、倉橋久雄、加藤巳酉三郎、塚崎茂明、大槻憲二、大槻岐美の諸氏。『快不快原則を超えて』の第六章の中部、ナルチスムスのリビドー性についての論述を、大槻氏が擔任朗讀せられた。讀後、茶菓をとりつゝ宗教儀式の象徴的意義、神經組織、ホルモン問題、ナルチスムスの鏡面對象に於ける性別的意義と云ふやうな問題に花が咲いて、頗る賑かであつた。

×

十二月例會は七日夜、同所に於いて催され、『快不快原則』第六章の中央部、「早期の狀態を再現する必要から一つの本能が生じた」と考へたい必要からプラトーンの對話編中に出てゐるアリストファネスの話に言及してゐる條を大槻氏擔任にて精讀討議した。

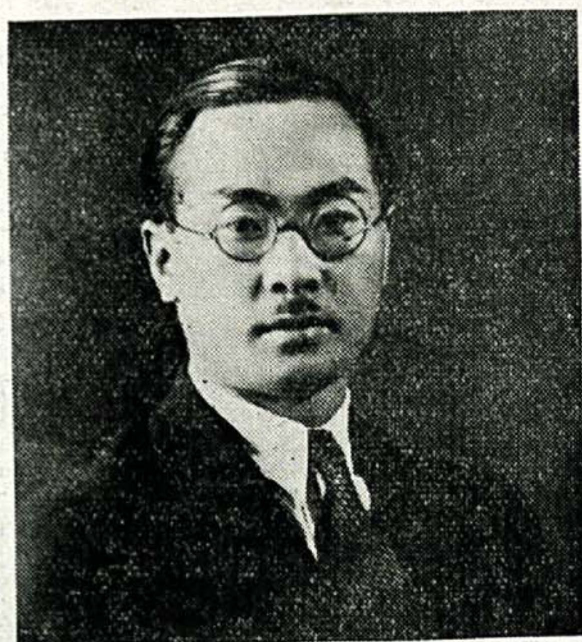
精讀後、山田わか論、所謂ウオードの女性中心說のコムプレクス的意義、戰國時代武將の分析批評、女性の復讐心理、母性愛と父性愛の生物（殊に魚の場合）的意義などについて話が交され、頗る愉快な一夕であつた。

出席者は塚崎茂明、北垣照雄、土屋秋實、倉橋久雄、延島英一、大槻憲二、同岐美の諸氏であつた。

本誌前號正誤表

頁	行	誤	正
七	一八	苛賁	苛責
一〇	一五	殆まら	始まら
二二	四	生命的な精神	反生命的な精神
二三	一一	ヒトーピア	ユトーピア
二四	九	國民線戰	國民戰線
同	一二	それに	それな
四三	上一九	矛看	矛盾
六六	上一〇	自へ然	自然へ
七一	上七	百種	百穂
同	上一一	テディポス	エディポス
八〇	上一四	五つて	亘つて
八一	下二	お糊	お粥
八二	下八	堪えて	湛えて
八五	下一六	d'nue	d'une
八六	下八	僻釋	註解
八八	下三	年の暮	年暮れぬ
同	下四	二句	二句
九二	上五	甚たしも	必ずしも

フロイド賞論文詮衡決定



（長崎文治氏像）

第一回のフロイド賞は、昭和十一年度本誌所載論文中より詮衡中のところ、第四卷第二號所載、

長崎文治氏稿『母性感情の中に潜む憎惡』

に擬せるゝことに決定し、賞金及び賞牌を贈ることゝなつた。

東京精神分析學研究所・フロイド賞詮衡委員

（イロハ順）

岩倉具榮
長谷川誠也
大槻憲二

編輯後記

謹賀新年　編輯部員一同

分析者も人なみに年頭の賀詞を讀者諸賢に向つて述べます。その集合無意識的意義は萬々承知の上で……。何となれば、これは一つの好意と感謝との表現に外ならないからであります。

×

本誌も愈々誌齢第五卷に入りました。讀者諸氏の熱心なる支援によるとは云へまた執筆者諸君の無私なる奉仕にも負ふものであります。今や學界及び世人の信望も不動の篤さを加へ、今後の努力を誓はねば相濟まぬ氣持で一杯であります。

本號も御覽の通りに充實した內容を具へて、諸賢の机邊にまみゆること丶なりました。何れも執筆者に於いて全力を擧げて書かれたもの丶みであることは、秘かに我等の誇りとしたいところであります。新進の方々の元氣な活躍ぶりを見て下さい。

×

新執筆者は塚崎茂明氏と森久兵衛氏とだけでありますが、實は塚崎氏は菊川茂樹の匿名下に本誌第四卷第二號にも書かれたことがありましたので、こ丶には改めて紹介は致しますまい。森久兵樹氏は普通讀者でありますので、個人的なことは分りません。

×

その後の新特別誌友は左の七氏であります。こ丶に御紹介申上げます。

▼市內目黑區……………田卷　ミタ殿
▼大阪府……………古岩井久平殿
▼神奈川縣……………外岡　豐彥殿
▼大阪市……………森崎　安海殿
▼市內神田區……………主婦之友社殿
▼市內牛込區……………佐々木不二夫殿
▼朝　鮮……………大野慶一郎殿

每號、着實な勢で特別誌友諸氏が增加して行きますが、各地に支部としての研究團體を組織せられんことを切におす丶めしたく存じます。研究所からは出來るだけの援助を惜みません。

×

別項廣告の通り、研究所出版部から『阿部定の精神分析的診斷』と題する新書が十二月廿五日に公刊せられます。內容が少し危險なのですが、嚴密に科學的態度で研究してあるので當局の忌諱に觸れるやうなことは萬々ないと思ひます。御希望の方はなるべく直接、至急御注文御送金の程を願ひ上げます。

春陽堂發行の『精神分析總論』、『分析藝術論』、『分析戀愛論』などが簇々再版になりましたが、『快不快原則を超えて』は、大改訂を要しますので、少し遲れます。岡倉書房の『精神分析讀本』も初版(上製本)が殆ど賣切れましたので、今度普及版を上梓しました。兩種とも御希望の方には、當所出版部で取次いたします。

人生創造社發行の『精神分析・社會圓滿生活法』もこの度『精神分析・社會生活法』と改題して再版になります。過般品切中御注文下さつてお斷りした方があ

りましたが、この雜誌が讀者諸賢の手に渡る頃には再版が出來上つてゐると思ひます。誠に相濟みませんでした。

『精神分析』合本第四卷（昭和十一年度本誌）出來いたしてをりますから、御希望の方は、御注文下さるやう待上げます。（定價三圓・郵税十五錢）

×

別項報告の通り、フロイド賞論文が決定し、長崎氏『日大生殺し』の論文がその榮譽を獲得しました。長崎氏は本誌創刊以前からの關係者で、研究所をして今日あらしむるに特別の大功あつた人であります。讀者諸君も共にお慶び下さるやうに願上げます。



次號は『不良少年少女の心理』を特輯します。內容は大體左記のものが確定してゐます。

不良少年問題と敎育相談…杉田　直樹
少年少女の漂泊性、家出癖について……大槻　憲二
異常少年の分析研究……高水力太郎
少年期の惱みを診斷する…高橋　鐵
幼兒に於ける現實感の發展段階
（フエレンチー）……伊藤龍朗譯

その他計畫中のものとしては――

マンスフィールド作
『舞踊會』……岩倉具榮譯
ムシュク・精神分析と文藝
……武田忠哉譯
雙生兒崇拜（ランク）……延島英一譯
ゲーテ作『魔王』の分析……土屋　秋實
わが少年期の自己分析……齋藤發智良

などが豫定せられてゐますが延島氏の『雙生兒崇拜』は早く發表せよとの要求が讀者の間から連りなので、困りました。實はその原書の到着を待つてゐたのですが、到着するにはしましたが、それは『ドッペルゲンゲル論』で、これだと思ひましたところ、同じランクの『ドンホアン型』論の中にあるらしいので、アテが外れました。原書は間に合ひませんが、とりあへず、佛譯からの重譯のまゝで發表することに致します。

昭和十一年十二月二十五日印刷
昭和十二年一月一日發行
（隔月刊）定價五十錢（郵税四錢）
編輯及發行　東京市本郷區駒込動坂町三二七　大槻憲二
印刷所　東京市淺草區北三筋町五五　三進堂印刷所

定價一部　五拾錢（郵税四錢）
半年分　一圓五十錢（送料共）
一年分　三圓（送料共）

御注文規定
・本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
・御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
・郵劵代用の場合は一割增に願ひます。
・本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

發行所　東京市本郷區駒込動坂町三二七　東京精神分析學研究所　振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂・大東館　北隆館・（大阪）福音社

學問の世界性とエスペラント

學問は人類全體の共同の財産であつて、決して、一民族や、一國民の私すべきものではない。

☆……したがつて、學問上の重要な新發見や新創意は、必ず世界へ發表して、文化促進の助けとするのが、學者の義務である。

☆……ところが、その實行上、日本の學者は、一つの大きな困難に行當るのである。それは……

言語の問題である。ヨーロッパの學者達は、自國の言葉であるドイツ語、イギリス語、フランス語等で、その業績を發表してをり、それによつて文化に貢獻してゐる。

☆……が、日本人は、日本語が孤立してゐるため、これで發表したのでは、世界に認められるわけにゆかない。そこで、從來は**國辱**を忍んで外國語で發表したものである。科學日本の體面上甚だ情けないことであるが、それだけならば、文化の向上を願ふ者の標度として、堪へ得るとしても、外國語の習得に、多大の貴重な時間を空費することは、學問を愛する者にとつて、實に惜しんでも餘りあることである。

☆……外國語を讀み得るまでになる努力だけでも容易ではないが、讀むためだけに外國語を學ぶことは、まだやむを得ないであらう。そこで、せめて、最も困難な『外國語で書く』努力だけでも逃れる手段はあるまいか。この問題の解決策として、學界の一部に、『學習に容易な……

國際共通語エスペラントを學說發表用語とせよ』といふことが叫ばれ、現に活用されてゐる。高象氣象臺は、毎年浩瀚な報告書を、この言葉で出し、多くの醫學者や、理研の一部の科學者達は、その業績の發表に盛んに、これを利用し、全世界の科學界から注目されてゐる。

エスペラントで發表すればエスペランチストでなくとも、ヨーロッパの學者は、自分の專門のことなら、容易に理解し得るから、決して看過される心配はない。

☆……語學の素養が相當にあれば、エスペラントで論文を書き得る程度に達することは、さほど困難でないから、日本の……

學者は、すべてエスペラントを學んで、これによつて、人類のために、大いに貢獻すべきである。

☆……エスペラントの學習法や學習書の選擇については、日本におけるエスペラント普及、研究の中心機關財團法人日本エスペラント學會（東京市本郷元町）あてに照會すれば、答へてくれるはずである。

メレジュコーフスキイ著
昇曙夢譯

トルストイとドストエーフスキイ（その生涯と藝術）

四六判五六〇頁 佛蘭西式假綴

定價金一圓六十錢 送料十四錢





杜翁逝去二十五周年記念に際し増補新版

改訂版序文より……

想ふにトルストイやドストエーフスキイの如き偉大なる文豪は、時や場所の制限なしに、いつの世にも萬人に愛讀せられ、且つ各時代に新しく見直さるべき人々であらう。現にソヴエート・ロシヤに於ても我が日本に於ても最近古典復興の機運に際會して、兩文豪は再び讀書界に蘇り、新たに再吟味されつゝある。だが、何と言つても哲學的、宗教的乃至文化的考察の深さに於て、藝術的鑑賞と理解の廣さに於て、また人生觀上いろいろな暗示に富んでゐる點に於て本書の右に出づる程の纒つた獨創的な研究は他にまだ出ない樣である。（譯者）



東京・麴町・九段下
振替東京二七〇番

東京堂版

世界に於ける最も美しい傳記

耶蘇

ルナン著
廣瀬哲士譯

「ルナンの『耶蘇』以上に最早や耶蘇傳を書く餘地なし」とは多くの批評家の間に一致した言葉である。その流麗典雅まことに耶蘇を語るにふさはしいルナンの名文は、廣瀬氏により完全に邦文に移植され、既に久しく我國讀書界に喧傳せられてゐる。茲に十三版成るに及び之を假裝として廉價版を刊行する事にした。今や古典復興の聲高き秋、この不朽の名著により永遠に清新にして偉大なる思想を汲み取給へ!!

四六判	500頁
定價	￥1.50
送料	14

ロレンス傑作集

太陽

岩倉具榮譯
大槻憲二跋

詩に、小說に、戲曲に、論文に、行くとして可ならざるなく、あらゆる文明の虛僞を振り捨てて肉體と魂の健全性を强調するロレンス。そこには又えもいへぬ藝術美と雄大な原始美とがあり、彼はまさに二十世紀のジャン・ジャック・ルソー。その中・短篇にこそ却つて緊張した美しさがある。『プロシヤ士官』は精神分析的傾向と社會的傾向を取入れた最初の傑作。『太陽』は精神分析の野蠻主義と藝術美の結合した傑作。『微笑』は小篇中に人間心理の複雜性を描いた傑作。『山間の十字架像』は叙景と思想とを交へた獨特の美を持ち、精神分析學の所謂「死の本能」說に基いた人生觀の表現。附錄の『男女相要論』は一冊の單行本の全譯であつて、即ち彼の戀愛論の粹である。

燦々とふり注ぐ白日の光の下に照らし出された人間裸身の美を見よ

內容

プロシヤ士官
太陽
微笑
山間の十字架像

附錄

男女相要論

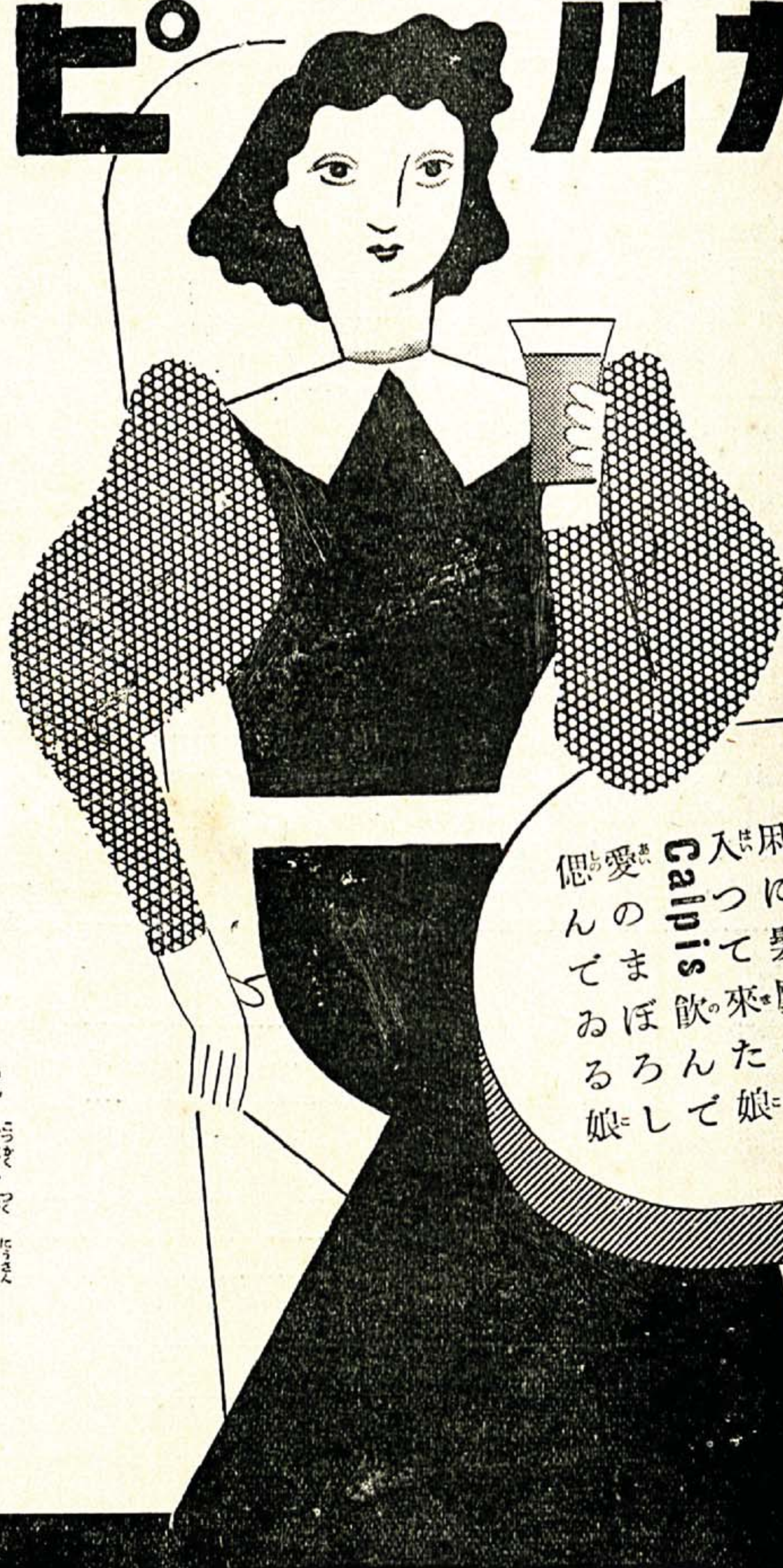
跋

ロレンスと精神分析

四六判上製二〇〇頁
定價一圓

長篇小說
リュシエンヌ
ロメン
富澤統一郎譯
四六判三二〇頁
定價一圓三十錢

東京市澁谷區金王町七番地
作品社
振替口座東京七四二八七番



愛をつたへる滋強飲料
カルピス
街のカッフェへ
凩に髪靡せて
入つて來た娘に
Calpis飲んで
愛のまぼろし
偲んでゐる娘に
主成分
骨格を作る乳酸カルシウム。
發育の素なるヴイタミン。
營養の王座を占める各種アミノ酸。
爽快さと殺菌力ある乳酸。
活動力を補充する葡萄糖其他の糖類。

V. Jahrgang, Heft 1. Jan.—Feb., 1937. Erscheint zweimonatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse"

(Sonderheft fuer Studium ueber Pubertaet)

Studien

Literarische Werke

Kritik und Methodik

Varia

Neuigkeiten des In-und Auslandes

Preis des Einzelheftes, 50 Sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag
327, Dozakacho, Hongoku Tokio Nippon